

# FGO二部二章・改「狂焰 之巨人王と三人のセイ バー」

hR2

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

### 【完結済】

これは、英雄の花嫁が召喚されることなく終わった北歐異聞帯の話。

代わりに現界するは三騎のセイバー！

剣と剣が激突する剣戟バトルの火蓋が切られるッ！

剣よ、終焉の黄昏を斬り裂いていけ——！！

二部二章ゲッテルデメルングを再構成した、全九話＋エピローグのバトルSS！

(これは二部三章が配信される前に執筆したお話です)

### 【改題済】

(11/26に旧題「Grand Order Another belt: 狂焰之巨人  
王と三人のセイバー」より現題に変更いたしました、ご迷惑をおかけしますが何卒よろ  
しくお願い申し上げます)

# 目次

第一話 第一のセイバー、見参！

1

第二話 Blade, Blader,

Bladest

27

第三話 彼女という剣

55

第四話 日本で一番強い剣士は誰ですか

? 78

第五話 第二のセイバー、推参！

145

第六話 彼という剣

187

第七話 冬の少女は一人想う

241

第八話 血戦×決戦

246

最終話 狂焰之巨人王と三人のセイバー

エピローグ その者達は、

459 309

## 第一話 第一のセイバー、見参!

白一色の銀世界を、幾つもの斬光が切り裂いていく。

幻想的なその光景の内にあるのは、紛れもなく美と称されるべきもの。

加え、激突の度に飛び散る火花と打ち鳴らされる戟音が、見る者の心を鷲掴みにして離さない。

戦うは超常なる二騎のサーヴァント、剣の英霊と盾の英霊。

世界よりその功績と偉業を認められた存在が、互いを打倒せんと死力を尽くす。

その剣の冴え、視認することなど微塵も許さず、

その盾の構え、泰山よりも確として揺るがず。

しかし——目を奪われることなど決して許されない。

何故ならこれは、

「くううう——!?」

——戦いというより、一方的な鬻り殺しなのだから。

「第一話 第一のセイバー、見参！」

雪が、溶けていく。

赤い瞳の仮面の剣士が持つ熱量と刃の激しさが、白を塗り替えていく。

英国が誇る名探偵の右腕をいとも簡単に切り飛ばしたこの剣士こそ、シグルド。

破滅と太陽を併せ持つ頂点たる魔剣を持ち、想い人から伝えられしルーン魔術を操る竜殺しの英雄。

シャドウ・ボーダーをいとも容易く切り裂き、ペーパームーンをカルデアから強奪。

逃すまじと追いつがるマシユ・キリエライトとその主に対し、一方的すぎる戦いを展開している。

「カカカ。

愉悦。

滑稽。

無様。

よく凌いでいると褒めてやらんこともないが、何を求める？  
所詮貴様らなぞ、灰と燃え消える塵芥だろう？

結末はただ一つしかないというのに——何をもがく？」

シングルドの手に踊る短剣が、その両の腕により、

「——つつつ!!」

回転式拳銃リボルバーより連射される銃弾の雨のごとく空を裂き、

マシユの掲げる大盾へ吸い込まれるようにぶつかっていき、

「ぐうつつ!？」

確かに受け止めたはずなのに、内部まで伝わってくる衝撃に片膝をつかざるを得ない。

——すごい、圧力……………！ でも、なんで……………!?

「おい。

誰が休んでいいと言った？」

両眼を彩る赤の輝きが、どす黒い悪意に染まる。

「先輩、下がってください!!」

マシユの大盾に撃ち込まれた六本の短剣、それら全てが中空を駆け回り——  
この場に存在する最も脆弱な存在、カルデアのマスターを蜂の巣にすべく疾駆する。  
マシユの盾は確かに強靱だが、それは一方向しか防ぐことはできない。  
シングルドの投擲した刃達は、全方位より襲いかかる。



矢より速く、弾より激しく、武技練り上げた剣士の業の狙いは、どうしようもなく正確無比。

「先輩!!」

▷ □ 「オツケー!」 □ ◁

□ 「了解!」 □

入れ替わり立ち代わり、背中合わせで立つ二人。

従者はその盾で主に襲いかかる刃群を防ぎ、主人は自分の五感をフル稼働させ従者へと伝える。

まるでそれはダンスを踊っているかのよう。

物言わずとも、相手に全てが伝わっている。

背中越しに感じられる相手の温もりが、更なる力を引き出していく。

二人で掲げるその盾が、全ての刃を撃ち落としていく。

数えきれない修羅場を共にくぐり抜けたこの二人を討ち取るには、

いかな北歐に音聞こえた剣士の投擲といえども——足りない。

「ふむ。

増やすか」

▷ □ 「!?」 □ ◁

シグルドの腰に収められていた何本もの短剣が抜き放たれ、  
輪を描きながら回転。

「守れ。

守れ。

お前が守らねば、主人は死んでしまうぞ？  
カカカ」

再度その両拳が刃の撃鉄となり、剣の切っ先が血肉求める凶暴な猟犬となる。  
火花が所狭しと飛び散り、刃を防ぐ盾の音はもはや管弦楽団の大合唱。

「見もの。」

見もの。

その主人が死んだ時、どんなみつともない顔でお前は泣く?」

「くう——!」

ジリ貧。

防御一辺倒で倒せるような敵ではない。

かといってこの状態で攻撃に転じても、一本一本が意思を持つかの如く正確にこちらを狙い続ける短剣達をどうにかしなければならぬ。

そうでなければ、攻撃の最中にマスターを殺されるという大失態を演じることになる。

——震えが、止まらない……………!

自分が震えてはいけないことなど分かっている、けれど、これは何だというのか?

魂の底の底まで破壊するような、シグルドの両眼が放つ悪意。

これまで戦ってきた戦闘記憶の蓄積が警鐘を鳴らし続けている。

何かがおかしい、何かが噛み合わない、何かが根本からずれている。

それはバーサーカー召喚による狂化の付与などとは比べ物にならないほどの異物感。

何よりも——この相手がシグルドだということにどこか納得できない自分がいる！

「限定されているこの状態では、全力の魔劍宝具は出せんが、

ククク、お前ごときに使うはずもない。

なにせ真似事でも余りあるからなア？」

「っ!？」

これまでに射出した短剣と、シグルドの腰に残っていた短剣。

その全てが剣士の元へと集結し、転輪する。

剣士の霊圧が、天井知らずに一気に膨れ上がり、

冬の大気を散り散りに引き裂いて——

「恐らく敵宝具、来ますっ!!」

世界が………：鞘より抜かれたる魔剣の登場に、恐れ慄き震えながらに刮目する!

「起動」

回り出す刃。

込められる魔力。

定められる狙い。

「お前の矜持、見せてもらおう」

赤眼が見据えるは、血、血、血。

死が見たい、破壊が見たい、お前が慟哭する顔が見てみたい。

下らぬ英霊、塵芥の人間、その全て——オレが欠片残さず燃<sup>殺</sup>やし<sup>し</sup>尽くしてやろう

!!

短剣の一本一本、切っ先から柄頭まで、余すところなくその全てに破壊のManaが充填される！

「これなるは破滅の黎明——ッ!!」

それは正に戦場を駆け抜ける破滅の流星群。

マシユの想像を大きく上回る展開・射出速度の流星達は、盾の英霊から宝具を起動する時間を奪い切ることに成功。

射出され続ける殺意の刃、光芒だけを後に残し——我が最も早く標的穿たんと襲い掛かる！

が、その全て、命中し切るよりも早く

『ベルヴェルケ・グラム壊劫の天輪』ッ!!』

これまでの投擲を遥かに超える剣の一射が、彗星となって突き進む！

冬の大地に、  
破壊と爆裂が、  
嵐となって吹き荒れた。

「せ、先輩……………だいじよ、うぶ、ですか……………?」

▷ □ 「マ、シユこそ、大丈夫……………夫?」

□ □ 「正直、ダメ、かも……………?」

□ □ 「マシユがいい子いい子してくれたら、大丈夫かも」

「イエス、マスター……………!」

ダメージは大きいですが、まだ………まだ、戦えま………くう!!」

敵の一撃で大きくダメージを貰うも、二人の瞳から闘志は消えていない。

二人とも五体満足、まだ、戦える。

ここまでの損害で抑えられたことを、良しとすべきか、それとも——。

「ククク」

——やっぱり、おかしい………!!

マシユは自分の直感を確信する。

確かにこの一撃、相手は全力を乗せていないし、そもそもこの攻撃を宝具とするには決定的に何かが足りないが、北歐有数の剣の英雄シグルドの技たり得るもの。

だが、盾で受けてみて自分が感じたのはまるで違う存在。

——似てる、あの時と………!!



ウルクで対峙したクラスビースト・ティアマツト。

冠位時間神殿で対峙した魔神王ゲーティア。

そんな、英霊が持ち得るレベルを遥かに超越した殺意と悪意が、最後の一投に乗せられていた。

——ブリュンヒルデを巡る悲哀の恋で反転した……………？

——違う、絶対にありえない！ その域を凌駕してる！

恐らく、この違和感の原因を知ることが、

このシングルドを倒すのに必要な鍵となるか。

「真似事でこの程度か。

無様。

無様。

多少は使えるかと思っただが、話にならん。

雑魚。

劣等。

駄犬。

雑種。

ゴミは燃やして終わらすべきだが、オレが燃<sup>殺</sup>やしてやる価値もない」

英雄の周りに、刃が集結する。

□ 「ふぎけろ」

□ 「マシユは、」

▷ □ 「最高のサーヴァントだ！」 □

◁

「先輩……………っ!!」

「カカカ。」

麗しい主従愛だな。

悩む、悩むぞ」

シングルドが、口を三日月にして嗤う。

「マスターを殺し、主人を守り切れずに泣き叫ぶもどきの面を見るか、

もどきを殺し、そいつの死に顔を見ながら絶望するマスターを見るか。

ククク。

実に良い。

実に良いぞ。

ああ、こんな感覚はいつ以来だ？」

膨れ上がる霊圧。

告げるのはそう、決して避けられぬ激突の瞬間。

□ 令呪を使うしかない □

▷ □ マシユを信じる

□

◁

使わない、使って良いはずがない。

このぐらいの窮地、何度も何度も共に乗り越えてきたのだから。

▷ □ 「マシユ、」 □ ◁

□ 「そいつをぶっ飛ばせ！」 □

▷ □ 「そいつをぶっ飛ばそう！」 □ ◁

「——っ!!」

イエス、マスター!

その命令、了解しました!!」

その信頼と絆こそが、絶体絶命のピンチに陥っても不可能を可能にする原動力となる  
!

「ククク。

よく吠えた。

まだ死ぬなよ、ようやく体が暖まってきたところだ。

次は、ちと強いぞ」

高まり極まる戦意と戦意。

最強の矛と呼ぶに値する魔剣の刃と、最貴なる光を担う盾。

己が持ち得る全ての力を、盾に込める。

外界が震え出し、空間に亀裂が走る。

霊圧と霊圧が衝突を繰り返し——

——絶対、負けない……っっ!!

その決意を示す時は、今を置いて他にあらず!

「起動」

「真名、凍結展開——!」

そして謳われる伝説の一撃、至高なる輝き。

例え全知全能の唯一神であろうとも、この激突を止められることはもう不可能。

「お前の矜持、見せてもらおう」

「これは多くの道、多くの願いを受けた幻想の城！」

天輪する刃は円を描き、

高々と掲げられる大盾は貴き幻想を歌う。

「これなるは破滅の黎明——ツ!!」

「呼応せよ——っ!!」

魔剣はただひたすらに狂奔し、

大盾は遥かなる夢想の城を呼び寄せ——

ベルグ・エルク・グラム  
「壊劫の天輪ツ!!」

モールド・キヤメロット  
「いまは儂き夢想の城!!」

刃の流星群を従える魔剣の彗星が、  
打ち建てられた城門へ、

その全てを噛み砕かんばかりに穿ち抜かんとする!

「ぐうううう——つつつ!!」

其は速く、烈しく、猛々しく。

狂えんばかりの悪意を滾らせながら、その力を一点に集約させ、

「フン」

瞬転したシグルド、城門と魔剣が互いを削り合う決戦場へと到来。

「なつつつ!?!」

吹き荒れる魔力流を全身で感じながら、その右拳に万力を込めて引き絞り、

「言ったはずだ——ちと、強いとな」

一直線に振り抜かれた右腕が、城門を貫かんとしている魔剣の柄頭と接触。  
刹那、

焰が、爆裂。

全てを、駆逐した。

▷ □ 「マシュー——————!!」 □ ◁

未だ爆煙収まらぬ中へ呼び掛けても、ただ無音だけが答える。

「真似事の八割程度でこのざまか。」



英霊もどきの宝具もどき。

そう考えればよくやった方か。

カカカ。

おい、どこか最高のサーヴァントだ？  
道化師<sup>ビエロ</sup>の冗談にしても笑えんぞ」

▷ □ 「お前……………!!」 □ ◁

□ 「テメエ……………!!」 □

□ 「あんた……………!!」 □

「まだ……………私は、戦えます、マスター……………!!」

▷ □ 「マシ、」 □ ◁

「——ガハツ!!」

銀世界が、血に染まる。

▷ □ 「……………え？」 □ ◁

吐き出した血を拭うこともままならない、紛れもない重傷。

盾に寄りかかり立っていることは立っているが、鮮血に塗られた腹部と滴り落ちる血だまりが示すように、限界はどうに通り越してしまっている。

いかなる悠久久遠の城といえども、マシユが宝具として展開するその形、未だままならない。

まるでそれは、朧なる蜃気楼のように不確か。

宝具ではない、投擲劍技としてのシグルドの魔劍を受け止めると考えれば——分が悪いはずがない、が、

カルデアの者達は現時点で気付くよしもないが……………それは、竜殺しの英雄シグルドの魔劍の場合。

このシグルドであることが問題だった。

魔劍グラムは太陽の力を持つ。

本来の壊劫の天輪は、その太陽から焰を撒き散らしながら射出される。

そう、このシグルドの悪意が、拘束状態のはずの魔劍から焰を滲み出させ、本来あり

得る威力よりさらに上をもって行ったのだ。

「よく立った。

——では二回目だ」

「負けま……………せん……………!!」

あなたには……………負けちゃ——、

ガハツ——ゴホツゴホツツ、ぐううう……………!!」

世界が歪み、震え出す。

それは恐怖。

まるでこれから打ち出される宝具の一撃に、滅ぼされてしまうと恐慌していく。

▷ □ 令呪を使う! □ □ ◁

□ □ 令呪を使うしかない □ □

□ ……………それでも、 □ □

- |                          |           |                          |
|--------------------------|-----------|--------------------------|
| <input type="checkbox"/> | 靈基の完全回復   | <input type="checkbox"/> |
| <input type="checkbox"/> | 宝具の強化発動   | <input type="checkbox"/> |
| <input type="checkbox"/> | 戦闘からの撤退   | <input type="checkbox"/> |
| <input type="checkbox"/> | 他の使い道を考える | <input type="checkbox"/> |
| <input type="checkbox"/> | 二画を同時に使う  | <input type="checkbox"/> |

円転する刃が、生物に必ず訪れる終焉を描き出し

「……………又？」

……………何奴？」

「……………あ……………う？」

突如あらぬ方向からシングルドの後頭部へと投げつけられた刃。

当然のように防がれるも、勝負を決する剣技と令呪の行使に待ったをかけた。

衆目の視線が集まる中……………

「一つ、ひと夜に悪を斬り、」

▷ □ 「あ——！」 □ ◁

「二つ、不埒な悪者退治、」

「……………この、声は……………」

「三つ、みんな大好き可愛い娘をいじめる奴は、」

「……………ま、さ、か……………！」

「お姉ーさんが許しません」

▷ □ 「武蔵ちゃん！」 □ ◁

「新免武蔵守藤原玄信！」

義によつてカルデアに助太刀いたす!!」

日ノ本古今無双の双剣使いにして第一のセイバー、ここに見参。

天元の花が、北欧の雪に咲き乱れる。

(第二話へ続く)

第二話 Blade, Blader, Bladest

走り抜けたるは一条の斬閃。

それは斬撃にして、斬撃にあらず。

剣に生きる者だけにしかその真を分かれぬ、剣士から剣士へと突きつけられた究極の挑戦状。

全てを剣に捧げ、遍く世界を旅してきた剣士が辿り着いた武の極みとは、

このシグルドの、心魂血脈靈素の一欠片に到るまで凍りつかせて余りあるものだった。

「第二話 Blade, Blader, Bladest」

□ 「武蔵ちゃん、いっけー！」

□

▷ □ 「武蔵ちゃん、やっちやえー！」

□

◁

初撃を終え、無言のまま剣を構える二人に黄色い声援が飛ぶ。

□ 「マシユも一緒に応援しよう、」

□

▷ □ 「でも無理はしないようにね！」

□

◁

「は、はい……………、ぐっ!？」

痛っつ……………ぐぐぐぐ……………!」

□ 「そのまま無理に立ち上がらないで、」

□

▷ □ 「二人の戦いを見守ろう」

□

◁

その言葉にマシユ・キリエライトは顔をしかめるも、  
一つ頷き、視線を二人のセイバーへと向ける。



「フン」

一瞬、ごく僅かにだが確かに凍りついた。

それは無論相手の双剣使いに気付かれている。

剣士の技の真実は、同じ剣士にしか分かることはできない。

素人、例えばカルデアのマスターが見ても、なるほど、すごいことは分かる。

だが、相手の技術がどの程度なのかは、戦士にしか分からない。

戦闘者としてあらゆる修羅場を経験しているマシユはこう推論している――、

これほどの剣技を持つ者は、自分が知る数多のセイバーの中でも片手で数えるほどしかないはず、と。

だが、二人とも分かっていようでも何も分かっていない。

その技がどれほどまでに奥深く、どれほどまでに天高くあるものなのか――。

そして何より、

それが自分よりの程度上なのか下なのかは、同じ剣士にしか測ることができない。しかもそれは、武蔵と同程度の剣の技量を持つ剣士という但し書きがつく。

劍と共に、汗を流し、涙をぬぐい、苦痛に耐え、強敵を乗り越え、血を浴びる――

劍士だけが、劍士を理解し得るのだ。

シングルドは黙り、止まり、凍りついた。

それはつまり、

黙り、止まり、凍りつくに足りる劍の技量をシングルドが有していることに他ならない。

つまりこの女――、

オレを殺せる可能性がある、ということか。

「――ハッ。」

だからどうした」

啞う、啞う、啞い転げる。

ああ、そうだろう。

こいつの方がオレより劍の腕は上なのだろう。

一つか二つ、いや三つ四つ——そんなものどうでも良い。

それが人間という種。

極めて短いサイクルで誕生と死滅を繰り返す塵芥の如き有象無象。

その多さ故に、稀に光を持った者が出現する。

神靈の恩寵を授かるに相応しい英雄という者達。

永久不滅なる神靈では決して持ち得ない、定命の者だけが持つその光——、  
その光こそ、不老にして不死であるはずの神すらも、容易に殺し尽くす。

その光を持つ者が、今オレの目の前にいる女だということ。

何ら感傷など抱くことがない、ただそれだけのこと。

「ちよいとアンタ」

「何だ？」





「お前らの生命存在を終焉終わらせさせるモノだ」

狂暴なるシグルドの剣意によって、

嵐を超える嵐となるべく――

開戦と終戦を同時に告げんと、雪崩の如く一斉に射出される！

「――っ！」

速きこと、迅雷の如く。

それは最早、嵐とは到底形容できない、刃群の死檻。

正真正銘、初撃から全力を尽くした短剣の連続投擲。

「あれが………セイバー・シグルドの本気………っ！」

抜かれていたのだ、手を。

刃一つ一つが意思を持って状況判断しながら獲物の急所へと飛んでいく

オールレンジ攻撃  
全方位殲滅投擲。

上下左右、短剣が襲いかからない方角など存在しない。

もしこの場に竜種がいたとしても、あの刃の地獄の中では十秒と持たずに穴だらけと変わる。

あれを使われたら——果たして自分はマスターを守りきれただろうかと、マシユの背中に冷たいものが走る。

それだけではない。

飛び交う短剣はその軌道・勢いを細かく変えながら、シグルドの元へと帰ってくるものがある。

その刃を、

「——シッ！」

再度拳で打ち出し、さらなる勢いで持つてして武蔵の身体を突き穿とうとする。

さらに、

その右手、魔剣を打ち出す準備を既に完了している。

期すのは必殺、己に相応しい最強の一撃。

一度開けた刃獄の釜の蓋は、決して閉じることなく大口を開けている。

縦横無尽に貫き続ける刃達は、もはや空間そのものを埋め尽くす剣勢で飛び交っている！

「こんな……………デタラメ、どんなサーヴァントでも……………」

躲せない、凌げない、防げない——  
マシユの頭が、自然と下を向いて

□ 「でも、武蔵ちゃん、」 □

▷ □ 「さばいているよ？」 □ ◁



「え……………」

ええええええええええええええええええええええええ!!??」

シグルドの額に、油汗が流れる。

全く信じられないことだが——、この勝負、シグルドが押されている。

武蔵は泰然たる巖の身、垂直に立つ背は曲がりも反りもしない。

不動でありながら、不動ではない。

カルデアの者達の目には動いてないように見えるが、その実動いていることをシグルドは知っている。

極々僅か、極めて微小な回避行動が、短剣を弾く双剣操作の体捌きに吸収されている。不動ではないが、不動のように見えるのだ。

刀を振りながら短剣をさばききり、シグルドとの距離を詰める——

言葉にすればこれで終わるが、それがどんなに荒唐無稽な絵空事なのかはシグルドが射出する短剣の荒れ狂う様を見れば誰でも分かる。

嗚呼、それなのに――

武蔵は着実に距離を縮めているのだ。

先刻のマシユとの戦いとは比べ物にならないほどの剣戟音は決して休むことなく音に音を重ねて音を掛け続ける。

刃と刃の激突のフラッシュが、まるでそこにもう一つの太陽があるかのように輝き続けて止まることがない。

その光の影響で、こちらからは武蔵の姿を視認することは難しいが、この音と光が未だ止まっていないことこそ、武蔵が健在である何よりの証。

たった二つ、たった二つしかないはずなのだ。

だがその双剣、神楽を舞っているかのように武蔵の身体を離れることなく、己へと降りかかる刃の厄災を一つ残らず打ち据える。

届かない。

竜殺しの英雄の刃を持ってしても、届かないのか――？

接近戦では、分が悪い。

魔剣一つで敵の双剣を相手にするは、ほぼ無理だとシグルドは判断している。

剣士が最も無防備になるのは攻撃をし終わった後ではない、攻撃している最中。ところがこの常識が双剣使いには通じない。

右で攻撃しながら左で守り、左で突きながら右でさばく。

攻撃と防御が一体となるのだから。

だからこそその中間距離での連続投擲。

間合いを保ち、一つでも当たりさえすれば崩れた体勢へ魔剣投擲、詰みにすればいい。

だが……………

その一つは、一体、いつ、当たってくれらるかというのか？

そんなことよりも——！

「ツ」

押されている。

理由はまるで分からないが、自分はこの女に押されている。

何故だ、何故何故何故何故、何故なのか!?

不快な苛立ちが募り、また一つ距離を詰められる。

「くッ!」

あの不愉快極まる剣は何だというのかっ!

あらゆる方向、あらゆる角度から突っ込んでくる短剣の全てをさばくため、武蔵が両手に持つ双剣は常人では視認することは到底不可能。

シグルド・武蔵級の技量クラスを持つて初めて目で追うことが許される。

その域の者ならば知れる者もいようか——、

何故シグルドは開幕からずっと押されているのか、そして何に苛立っているのかを。

武蔵は、常にどちらかの刀を中心に置いている。

その剣に、シグルドは押され続け、苛立ち続けているのだ。

武蔵の身体の中心を表す縦の一本線があるとすると、これを中心線という。同様に、この中心線はシグルドにも存在する。

二つの縦の中心線を繋ぎ、三次元空間上に平面を作る。

武蔵が置く刀は、この面の上に位置している。

自他の中心線が描き出すこの面上に刀を置くということとは——、

自分の中心を刀で守るということであり、

相手の中心からその刀で押すということになる。

その双剣、ここでも攻防が一体となっている。

武蔵はただシグルドの攻撃を凌いでいるのではない。

凌ぎながら攻撃している——押しているのだ。

驚嘆すべきはその正確性。

ミリ単位どころの話ではなく、その千分の一のマイクロ単位で見ても誤差がまるでない。

真に中心を押さえているのだ。

さらに武蔵が今いるのは千刃乱舞するシグルドの刃檻の中。

右で払い左で打ち据え、両手双剣を目まぐるしく動かしている。

それでいて、武蔵は常に片方の刃で中心を取り続けている。

異常すぎる、その技量。

魔神か鬼神かと疑わざるを得ない剣の技。

「チツ——！」

だから、押される。

理由分ならず、焦燥する。

油汗が、出てきてしまう。

武蔵が仕掛けているこの中心の取り合いこそ、人中路、正中線の攻防。

相手に中心を取られたのなら、取り返すため一手仕掛けなければならない。

そうしなければ、押される、押され続ける。

後ろに下がるか、左右に逃げるか——しかしそれは答えではない。

体勢と位置が変わろうとも、武蔵は常に中心を取ってくる。

付け焼き刃は通用しない。

そして、武蔵が中心に置く刀があるからこそ、それがシグルドからすれば武蔵の盾となり、魔剣を射出できないでいる。

何よりも大きいのが、

この正中線の攻防、西洋剣術には存在しない概念。

例えそれが未知なものだとしても、シグルドほどの力量を持つてすれば難なく破壊しよう。

だが、

相手は、宮本武蔵——。

己よりも、間違いなく上の剣域にいる相手。

分が悪い、そういうしかないのか……………。

悪夢でしかない。

北欧最大といつてもいい竜殺しの英雄譚を持つ剣士が、何もできずに押され続ける剣士が存在するなど——。

シングルドは何度も後方へ飛び退き、距離を保とうとしているが、詰める。

武蔵はその距離を詰めてくる。

空間を縮めているかと思まごうばかりの精妙なる足さばき。

下がらざるを、得ない——。

両者の距離が、信じられないことに段々と縮まっていき——、

「疾ッ！」

「——ぐ!!」

▷ □ 「届いた！」 □ ◁

刃が織り成す監獄を打ち砕くよう払われた、力強い右の一閃。

何本もの短剣を弾き飛ばすその刀勢、魔剣でなければ止めること叶わなかった。

あらゆる無駄を削ぎ落とした末に残った、完璧に合理化された体さばき。

そこから生成される剣撃は、最小動作で繰り出されたもの。



されど、刃に乗るその威力——竜の鱗すらも断ち切るほどの力が宿っている！  
投擲準備を終えていた魔剣が中断。

だが、手に握る魔剣の刀身が放つ魔力が、破滅させるべき敵を前にして一段と燃え上がる。

武蔵は、遂に己の斬り間にシグルドを捉え、  
シグルドは、魔剣を両の手で持ち、剣士としての全力のスタイルとなる。

「チッ」

「さーて、お楽しみはこれからよ」

「驕るな。」

馬鹿は死んでも治らないとはどこの言葉だったか。

お前は、オレが、終わらしてやろう」

そして始まる全力対全力、全開対全開。

二本の刀を操る双剣使いと、

一振りの魔剣を握りながら何十もの短剣を意のままに飛ばす剣士。

双方あらん限りの力と技を駆使して激突。

絶人の剣士が二人、死力を尽くす。

その刃で首を刎ねんと何十手先を見据えているか余人には見当もつかない攻防が開幕する。

「ハッ!!」

武蔵!!

凄まじい技の冴え、研ぎ澄まされた業の極み、見切ること困難な術技的な速さ。

それは剣豪として到達可能な頂点の中の頂点にいるからこそ可能となる、最強の一刀。

鳴り散らす刃、弾け飛ぶ閃光。

何よりも——その一振り一振りには鬼神すらも断たんとする凄みがある！

「フン」

刃の監獄地獄は勢いを止めない。

回り続け走り続け、主の悪意を成し終えるまで短剣達には一秒の休息もない。

だが——魔剣の一振りという本来ならば駄目押しの一手持ってしても、

その剣へ、最高の全力を乗せて叩きつけても、

武蔵の双剣を崩せない！

もはや何合打ち合ったかなど無意味。

殺す一、斬り殺す一、終わらせる一をどちらが先に出せるのだから。

「劣勢、か」

武蔵は、押し。

シグルドは、下がる。

いや、下がらされている。

武蔵が刀に乗せる斬撃力が高すぎるが故に、受け止めたシグルドが後ろへ下がらされ

る。

だが、下がるということは距離が開くということ。

距離が開けば——冷徹な剣士の思考が、武蔵に短剣を雨あられと浴びせかける。

「あ———」

ほんとしつこい!!」

冗談のような二刀の操作。

およそ剣に生きる者であれば、一目見てしまえば生涯忘れえぬ光景と映るであろう。

繰り返す。

接近・激突・吹き飛ばし・後退がくるりくるりと繰り返す。

戦闘開始から一体どれくらいの時間が経ったのか。

しかしこの二人、傷らしい傷を未だ一つも受けていないし、与えてもいない。

ダメージで言えば五分の無傷だが、剣の内容は武蔵で押しに押しまくっている。

何度目か分からない接近を、再び、武蔵が仕掛けようとしたその時——！

▷ □ 「……………？」 □ ◁

「あつ——！」

「ガッ——ッ?!」

シグルドの体が、後方へ吹き飛んだ。

武蔵の左の突きを魔剣で首ギリギリで受け止めるのに成功したのだが、両足が地面より離れ、宙を飛ばされる。

分からなかった、カルデアのマスターには何が起こったのか分からない。

マシユほどの戦闘経験を積んだ者でもようやくやく、武蔵が何か仕掛けたらしいとしか見えなかった。

シングルド、虚をつかれたのは事実だが、その仕掛けの種を完全に看破。

二度目を食うことはもう絶対ない。

だが、その刺突により体勢崩され首に穴を開けられるのを寸前で防ぐも、大きく吹き飛ばされる。

当然のごとく追いつがっている武蔵。

両手に持つ二刀を死を告げる鳥のごとく羽ばたかせ——御首を貫いに、駆ける！

今のシングルドの状態を表す言葉は飛足、五輪書が忌み嫌うジャンプ状態である。

飛び上がるには、跳躍前の動作が大きいし、跳躍後の位置と体勢を相手に教えてしま  
う。

人間の関節には可動域が存在する以上、着地する相手の死角に簡単に回り込める。  
ジャンプしながらの攻撃とは、術技的には完全な死に技。

わざわざその場にとどまって攻撃を受けてやるほど、敵対者は優しくなからう。

その飛足で吹き飛んでいるシグルド。

飛ぶ己よりも武蔵の走法の方が速度は上！

つまりシグルドの着地点こそ——、

決して逃れられない絶対の死地となる！！

しかしその刃が、風切り音を残して冬の空気を切り裂いた。

「——フン、ムサシといつたか」

シグルドが、空中で静止する。

己の短剣を呼び寄せて、その腹に足を置き空中の足場としたのだ。

「忘れん、その名」

その台詞一つを捨て置いて、

悪意に満ちた赤い瞳の英雄は、短剣を使い空を走り、去っていった。

「おーわー、器用ねえーあいつ。

ふーん。

あんな使い方もできるんだ」

脅威は去り、

武蔵が手に持つ二刀を鞘に収める。

「久しぶり————っていうほど久しぶりじゃなかったりするんだけどね、私としては。

まさか連続でキミのところに来ちやうなんて、ね。

や———ね———も———!!

それもこれも、運命の赤い糸ってやつ!!」

「!?!」

▷ □ □「ゴゴゴゴゴホ?」

□ □「不束者ですがよろしくお願いします」

□ □ ◁



「せせせ、先輩の左手の薬指には物理的には何の糸も指輪も巻かれていないと申しま  
しょうか何といたしましょうか、ええええと、その、ううううううう」

「もー！ 顔真つ赤にしちやって！

かーいいいなーもー！ うりうりくく」

「あう、ああうううううう………」

「それで？」

「……でもあそこ露西亜と同じ世直しをやってることでもいいのかしら？」

本来ならば、この世界では実現するはずのない再会。

ずれてしまった歯車の回転が引き寄せた、有り得ざる剣の異邦人。  
英雄の花嫁が存在しない異聞帯に転がり込んだ、剣士セイバが一騎。

その剣が斬るのは、

果たして、一体何となるのか——。

(第三話へ続く)

## 第三話 彼女という剣

砂漠にオアシスがあるように、この雪原にも緑はある。  
銀世界に咲いた翠緑の草むらで暖かさを享受できるのは、

「ヴオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」 「ヴオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

!!

「ヴオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」 「ヴオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

!!

「ヴオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」 「ヴオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

!!

「ヴオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」 「ヴオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

!!

「ヴオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」 「ヴオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

!!

「ヴオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」 「ヴオオオオオオオオオオオオオオオオオ  
!!」

体格甚大の力強き巨人だけと決まっている。

その園に、異物が侵入。

「うーうーうーん、でかあああうーうーうーい！」

いっちょやってやりますか。

二人とも、ゲルダちゃんをお願いね！」

ならば生じるのは、闘争。

どちらが正しいのか間違っているのか、そんな問題ではない。

生命が持つべき闘争の最も原始的な形には、綺麗事は一切存在しない。

そう――、

▷ □ 「武蔵ちゃんはそいつらをお願い！」 □ ◁

□ 「マシユ、周囲に警戒を！」  
□ ゲルダと手を繋ぐ

□  
□

あるのは二つ、生きるか、死ぬか——その二者択一から闘争が生まれたのだ。

「ひと、ふた、み……………やつ、ここの、とを、あまりがひと、ふた。十二か。」

柳生の爺様よりは多いけど、お兄さんには足りない、か」

武蔵、腰より双剣を抜刀。

構えなくだらりと刀を下げ、

「気をつけてください、武蔵さん！」

数が多いので、くれぐれも慎重に！

体格の割に、意外と素早いです!!」

「ガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

「ガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

「ガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

「ガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

「ガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

「ガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

「ガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

「ガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

「ガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

「ガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

「ガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

「ガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

戦場を、疾駆する！

向かう先は十二人の巨人の群れ。

もはやそれは筋肉の絶壁と呼んでも良い、圧倒的なマッスル密度。

紛れ込んだ乱入者を叩き潰すべく——

総勢都合十二の塊が、一斉に、武蔵へと、振り降ろされる!!

武蔵が両手に持つ大小二刀が、その切先の先の先まで剣気に満ちる。

「ハアアアアアアアアアア!!」

その剣気こそが空間を斬り裂く断界となり、

巨人達にとって決して逃れられぬ死神となる——!!

「——えっ?」

走り抜けた武蔵、巨人の圧撃を躲すだけでなくその後ろへ抜けている。

確かに見えた美しき剣煌。

世界そのものすら斬り拓くような、宮本武蔵にしか放てない斬線。

時の針の動きを止めなければ、その剣戟が何回だったか数えるのは不可能。

その数、右が六、左が六の、計十二太刀。

それは正しく、己が斬り捨てた巨人達と同じ数。

▷ □ 「

えっ? 「

□

◁

武蔵、双剣を大きく振って血振るい。

同時に鞘に収め——、

鍔が鯉口と接触、そして聞こえる短く甲高い金属音が二つ。

! ? 「 ! ? 「 ! ? 「 ! ? 「 ! ? 「 ! ? 「

! ? 「 ! ? 「 ! ? 「 ! ? 「 ! ? 「 ! ? 「



「!?」

「!?」

吹き上がる鮮血。

断末魔を上げることすらできない、一方的で絶対的すぎる斬殺。

斬り飛ばされた肉体が、重い音を立てて何個も何個も大地へ落下する。

そして、その武威を誇っていた巨人達の体躯が、命なき死骸として崩れ落ちる。

緑の楽園に、血の湖が突如として出現する。

その抜刀から納刀まで、九秒とかかかっていない。

「またつまらぬものを斬ってしまった……………」

とは言えないな。

この人達もこの人達なりに必死に生きていたはず。

それをつまらないものって言っちゃうのは、うん、ダメですとも!!

うーんーんーんーん、何かないかな?

決め台詞的な……………？

う……………ん……………悩まし……………！

秒殺にして瞬殺。

剣の頂を極める剣士の技は、

ある意味、死という厄災の一側面なのかもしれない。

「……………え？」

……………え？

……………え、え？

せ、先輩……………？」

▷ □ 「な、何かな、マシユ君……………？」 □ □

□ 「な、何でござるか、マシユ殿……………？」 □

「ま……………、

ま……………、

……………まじつす、か……………？」

□ 「ま、まじつす、みたい、つす、です……………つす……………」 □

▷ □ 「結果おーらい、だから、ツツコミは、や、止めやめとく？」 □ ◁

「……………。

い、いえす、です、まい、ますた……………」

「第三話 彼女という剣」

空には漆黒。

夜を彩る星達が、今日も輝きを見せる。

ロシア異聞帯と同じく、この異聞帯でも、星々の輝きは——同じように見える。

ゲルダの村で迎えた夜。

村の皆がベッドの上で寝静まる中――

彼女はやはり、剣を振るっていた。

「ほい、終わり」

□ 「パチパチパチパチ」

□

▷ □ 「ブラボー、オオ、ブラボー」 □ ◁

一刀での素振りから始まり、二刀、座居合、立居合、そして二刀居合と一通り終える。それは型と称されるものなのだろうが、武蔵としては格別形式張ったことではない。名前が何の、初伝中伝奥伝が何で順番がどうのと、そんな無駄な形式を付け加えることはない。

己が思う身体の鍛錬法と、双剣の操作技法を、確認・研究し続けているだけ。

だがそれは――

剣士であるならば誰でも、お師匠様弟子にしてくださいと、額を地に打ちつけながら叫ばずにはおられないほどの美しさ。

「ふー……………」

そのため息、長く、そして重い。

▷ □ 「どうしたの？」 □ ◁

「ん、ちょっとね。

こっちか、元のか……………、かあ……………。

キミの歩く道の重みは分かってたつもりだったけど、……………甘かったな、私」

そしてまた、特大のため息が聞こえる。

▷ □ 「それでも、やらなきゃいけない」 □ ◁

「ええ、そうよね……………」

□ 「武蔵ちゃんは、」 □

▷ □ 「もしかして反対？」 □ ◁

「——いえ、これは、キミのいう通り、やらなきやいけない道だと思う。

でも——……………」

その手が腰に差す刀の柄を叩く。

「私にとって小さい子っていうのは、刀で守るべきものであって、刀で殺めていい存在  
じゃなかったから……………」。

だから、かな……………」

▷ □ 「……………」 □ ◁

□ 「——」 □

「そう考えると、自分が情けなくなっちゃって」

▷ □ 「情けない？」 □ ◁

「だってね、私にとつての旅っていうのは——、

どこまで強くなれるのか、

私より強い使い手はいるのか、

いるのであれば、そいつを私は斬れるのか——、

ただ、それだけだったから………随分、安っぽい道だったな、って。

斬られたところで私一人がおっ死ぬだけ終わり。

キミのように、自分達が倒れてしまったら世界全てが終わってしまう——、

そんなものを刀に背負えたのは、

キミと一緒に、旅した時だけだったから。

キミが歩いてきた道の重みを思うと………さ………。

もちろん後悔なんかないわよ。

剣に生き、剣に笑い、剣に死す——って、まだ死んでないつもりけど。

剣士として望みうる最良の人生だった、って、言い切れることはできる。

でも、ね——」

▷ □ 「そんなこと、ないよ」 □ ◁

□ 「人はそれぞれ背負っているものが、」 □

▷ □ 「もともと違うんだから、」 □ ◁

□ 「どっちが安くて、どっちが重いか、」 □

▷ □ 「そんなの全然関係ない」 □ ◁

▷ □ 「大事なものは、」 □ ◁

▷ □ 「自分の信じる道を、きちんと懸命に生きられているかどうか」 □ ◁

▷ □ 「……………じゃないかな？」 □ ◁

「……………」



□ 「僕は、」 □  
□ 「私は、」 □  
□ 「俺は、」 □  
□ 「あたしは、」 □

▷ □ 「武蔵ちゃんに助けられたよ、何度も何度も」 □  
◁

▷ □ 「下総国の時だって、」 □  
□ 「ロシアの時も、」 □  
◁

▷ □ 「武蔵ちゃんが気付いていないだけで、」 □  
▷ □ 「本当は数え切れないほど大勢の人を、」 □  
◁

▷ □ 「その剣は、救ってるはずだよ」 □  
◁

▷ □ 「だから、言わないで」 □  
◁

▷ □ 「安いとか、情けないとか」 □ ◁

□ 「マシユ達と一緒に歩いてきた道も、」 □

▷ □ 「武蔵ちゃんが一人で歩いてきた道も、」 □ ◁

▷ □ 「どっちも同じくらい大切で、尊いもののはずだよ」 □ ◁

□ 「うん、」 □

▷ □ 「百パーセント、保証する」 □ ◁

「……………うん、

ありがとう——。

キミと巡り会えて、本当に良かった」

剣士の顔から、迷いが消えていく。

「本当はね、私はもう終わっているはずなの」

▷ □ 「終わっている？」 □ ◁

「私は——そこに、辿り着いてしまったから……」

本来ならば旅をするんじゃないくて、旅を止め、あるべきところへ行かなきゃいけないはずなの」

□ 「それって、」 □

▷ □ 「つまり………？」 □ ◁

「そう。

それは絶対にここじゃない。

極楽——に行くのは難しいだろうから、地獄………になるのかな？

さしずめ修羅地獄か、他のどこかに飛ばされちやいそうだけど………。

それは、絶対にここではないはず」

▷ □ 「そんな……………」 □ ◁

「だからね、私、露西亜でキミと再会できた時、本当に嬉しかった。

お釈迦様が、最後の御慈悲でお別れを言わしてくれたんだって思った。

それなのに、伝えなきゃいけないこと全く伝えられないままここに飛ばされちゃった  
もんだから、ほんとーーーーーにガツクリきてた。

けど……………」

その瞳が、剣気に燃え上がる。

「露西亜で、あいつを斬った時に分かった。

私は、まだ、終われない。

そこに至った者として、やらなければならぬことがある。

例え今回が最後だとしても——、

それでも！ 何度でも、何度でも！ キミのところへ戻らなきゃいけないんだって！

だって——、

私には、斬らなきゃならない奴らがいる」

▷ □ 「——うん」 □ ◁

「ねえ、私を、キミの剣にしてくれないかな？」

私には、もう、斬れないものは何もない。

鬼も、龍も、仏も、神も、天も、世界や、理すらも——

私の剣は、全てを両断できる、

——そう、キミが、そばにいてくれるのなら」

▷ □ 「……………うん」 □ ◁

「私が、全てを斬り伏せる。

キミの道を遮るものは、何だろうとこの刃で。

だから、キミは、そのままのキミでいて。

いつだって真つ直ぐで、どんな暗闇だって真昼のように照らしてくれる、

そんな、貴い勇気を持ったキミのためになら——、

私は、どんな奴が相手だろうと、絶対に、負けることはないから」

▷ □ 「 うん!! 」 □ ◁

「以前、見せてたけど、正式にはまだだったよね、  
これが私の——、  
劍の、答え……………!!」

(第四話へ続く)

「ほらー、隠れてないで出てきちゃってー！ー！ー！  
もう私一人よー！ー！ー！？」

「……………ど、どうも……………」。

あ、いえ、その、あの、

ねねね寝付けなくて、少し散歩しようかなと、はい。

べべ、別に武蔵さんと先輩のお話を盗み聞きしようとか、そういうのではないです、はい！

ただ単にちよーつと外歩こうかなあと。

だってほら、不思議な、夜空ですし。

月も綺麗じゃないで……………

うエイいいいいいいいいいいいいいいいいいい

!?!?

つつつ、月が綺麗

だ、だめです！

い、いえ！ だめぢやないです！ でもだめです!!

お二人がですね、どういったおつきあいをしようとも、わわわわ私には、ええ、そうですとも、関係ないわけでありませんが、

しかし、先輩の保護者である身としてはええ、とその、なんとかかとか、どうのこのうの、

何と言ってもクラスシールドーですの、はい！ です、から、あああ、あああううう

……………



あうううう………

「ほらもう、こっちこっち。

ここに座って、座って。

ね、一緒にお話ししましょう?」

## 第四話 日本で一番強い剣士は誰ですか？

何事にも、例外はある。

例えるならば、この異聞帯に乱入してきたカルデアの者達。

女王の統治のもと、着実に育つ空想樹を見守るだけだったこの世界に、大きな変化が訪れようとしている。

見くびってはいけない。

彼女は——彼女達は、人理を滅却から救った者達なのだから。

例え魔術師としての実力はこちらが上だろうとも——

潜り抜けてきた死闘の経験値の方が、恐らく、いやきつと、ずっと上にあるはず。

「——それで？」

まだ何かあるのかしら？

「貴方が実体化してまで聞きたいことって、何？」

戦果物の受領、状況の報告、彼女を傷つけるなどという命令を度外視していたことへの叱責。

全て終わったと思っていたが――、

まさかこの剣の騎士が、まるで従者のように自分にそばに佇む時が来ようとは、このオフェリア・ファムルソローネ、思ってもみなかった。

恐らくこれも、カルデアの到来が引き起こした例外の一つ。

「……………あれは、何だ？」

全く何の脈絡のかけらもない言葉でもあるが、無論、誰のことかは分かる。

「ミヤモト  
ジャパン宮本、ムサシ武蔵。

日本という極東の島国において、十六〜十七世紀に活躍した剣士よ。

二刀流、なんだけど、重要な対決に臨む時は武器は一つだった、という伝承もあるわ。

男性のほずだけど――、何があつたのかしら？」

「性別などどうでもいい。

宝具は何だ？」

「……………」

返答を一拍遅らせる。

赤い瞳は——燃えるように輝いている。

その内にあるものは正確に推し量れないが——……………

(やはり……………もう一欠片も残ってない……………)

だからなのかしら……………。

これほど探しているのに、あの英霊の痕跡が何処にも見当たらないのは、やはりこれが原因……………?)

「分からない」

「……………おい——」

その右手に、魔剣が姿を現す。

しかし、紅蓮に燃えるその眼光を、マスターであるオフエリアは正面から睨み返す。

「少し長くなるけれど――、

いいかしら？」

「第四話 日本で一番強い剣士は誰ですか？」

『是非、貴女達の意見を聞かせてもらえないかしら？』

日本という国には、著名な剣士がたくさん存在したと聞くわ。

その中で――、一番強いのは誰かしら？』

『……………』

『……………』

『何よ、その顔？』

私、何か変なこと言った？』

『言った』

『言っちゃったわね』

『言ったよね、ペペ？』

『そこんところを気付いていないのが、どうしようもなくギルティよ、ギルティ。

ね、ヒナコ』

『……………』

ごめんなさい、理由を教えてくださいら？』

『その、誰が一番強い剣豪だったかって、滅茶荒れる話題。』

みんな自分の好きな剣豪が一番だつて押し付けあうだけ。

結論は出ないし、生産性ゼロね、悪いけど』

『なら、サーヴァントとして召喚して戦わせれば？

揃えるのは大変だろうけど、それなら誰が最強か分かるはずでしょう？』

『あ————ん、オフエー————リアー————。』

どうして貴女はそうオフエリアなのかしら？

どうしちやえば、そう連発で！ ヒナコの地雷をカチカチつと踏めちゃうのかしらねえ。

貴女の眼、もしかしてバッドラックを引き寄せる呪いとかないわよね？』

『ペペの茶々はいつも通り置いといて————、

それ、意味ないよ。

サーヴァントとして召喚された時点で、存在が英霊へ昇華されてるから。生前なら到底できなかつたことが、できてるようになってるはず。

そうだね……………縮地かな』

『縮地?』

『縮地?!!』

『中華にも日本にあるけど、実在する、身体からだの操作技法の一つ。

まるで大地を縮めているかのように、動くこと。

例えば、こう、二歩、左前、左前、つてすすつと歩くとするでしょ?』

『圧倒的にエレガントさが足りないわね。

悪いけれど、芸術点はあげられないわよ』

『はい、外野は黙って。  
で、

私じゃ上手くできないからそこは勘弁してね。

一歩目を動いたのに、上体を後ろに残しておいて——

二歩目で、一気に前に持っていく』



『80点！』

その頑張りにも、ペペロンチーノ先生は合格点をあげちやいます』

『……………つまり、上半身を注視させて、下半身の足運びから目を逸らすのね。

上半身から想定する下半身の位置は、相手が思うよりも前にあるのだから、

二歩目で上半身を正常な位置に戻せば、相手からすれば急に飛んできたように錯覚してしまう。

その距離の急激な変化が、相手からすると、さつき貴女が言った、空間を縮めて動いたように見える——

で、いいのかしら？

その、縮地というの？』

『うん、そ。

今の私の説明でそこまで分かるなんて、流石オフェリアね。

考えてみて、この縮地の達人って剣豪がいたとするでしょ？

そいつはどんなセイバー？』

『そうか、そうよね……………』

その伝承が昇華され、空間跳躍を自由自在に扱うセイバーとなる。  
そんなこと、生前はできなかつたはずなのに』

『私達魔術師が一回飛ぶのにどれだけの労力とコストを払っているとしても、  
英霊さんはぱっとやっちゃうんでしょね。』

だからと言って、ヒナコ、貴女のいうことも大概でしょ？』

『そうかな？』

本当の一番を決めるなら、それしかないよ』

『現実性を考えなさいって。』

うーんーんーん、なんだったかしら、こういう時の日本のコトワザ？』

『……………絵に描いた餅？』

『そう、それよそれ!!』

あー……ーん、オフエー……リア、その的確さ、惚れ惚れしちゃう！  
貴女はやっぱりオフエリアなのね』

『え、ええと………。』

ヒナコ、貴女の案って？』

『この子、どうにかして時間旅行しちゃうって、全員拉致って残り一人になるまでデスゲームとか言い出すのよ？』

この世界からラーメンが絶滅しちゃうぐらいありえないでしょうに』

『なるほど………。』

でも、ヒナコの言う通り本当の一番を決めるなら、そんな手を使うしかないのね。

誰が一番強い剣士だったか、誰が一番強いセイバーになれそうか——。

考えれば考えるほど、深みにはまる。  
まるでダイダロスの作った迷宮のようね。

礼を言うわ、二人とも』

『ん』

『お安い御用よ』

『それはそれとして、それで二人は誰が一番だと思うのかしら？

間違っても構わないから、貴女達の意見を聞かせてもらえない？』

『……………戻った』

『……………戻っちゃったわね』

『うん、オフエリア』

『ええ、オフエリアですもの』

『そのやりとりには賛同できないけど……………』。

ヒナコ、貴女は誰だと思う？

貴女の意見を、是非聞きたいの、私』

『私のか』

『それはもう、断つ然！ 宮本武蔵ちゃんに決まってるじゃない！』

『うわー、恥ずかしいほどに丸出しちゃん』

『だまらっしゃい。』

『アンタの推しメンの上泉のぶニャンなんて、うちの武蔵ちゃんが二刀流でボコるわよ？』

『ペペは、宮本武蔵？』

The Book of Five Rings  
五輪書の？』

『読んだことある？』

『ええ、勿論。』

あの時代の刀剣の決闘を生き抜いた人間が書いたものですもの。

当時の斬り合いのリアルを知る上で、とても為になったわ。

日本語は………かなり手こずったけど』

『そっか。』

オフェリア、セイバー志望だったね。

あのレベルの本は———』

『他にないわ。』

神話伝承の類なら見つけれないこともないけど、

魔術的要素が全くない、純然たる剣士の本としては、世界最高だと思うわ。

それが秘蔵されているんじゃないやなくて、売り物なんてね。

日本という国に感謝しましょう』

『もつと褒めて、もつと褒めて！ もオオオオオオオオつと褒めちやつていいのよ！』

その溢れんばかりの武蔵ちゃん愛を發揮しちやつて!!

……………さー……………と!

武蔵ちゃんを一位に押す人間を、ニワカ! と痛い暴言吐いちやうヒナコ大々々先生の講義が始まり始まり〜』

『ま、ありきたりでごめんだけど。

一位、上泉信綱。

二位、沖田総司。

三位、宮本武蔵』

『ええと……………ヒナコは上泉信綱、カミイズミ・ノブツナが一位なのね』

『違う。

一位、上泉信綱。

二位、沖田総司。

三位、宮本武蔵。

この三人が私の思う、日本で一番強い剣豪の、第一位』

『……………。』

……………ペ、ペ？』

『ほーら、だから言ったでしょ？』

この話題は、パンドラの箱なんて目じやない究極の核地雷なのよ。  
迂闊に触っちゃったら、もう爆死しかないの。

ギルティなのよ、ギルティ、誰がどうやってもね。

安心なさい、私も一緒に吹っ飛んであげるから』

『あ、ありがとう、ペペ。』

……………あなたに真剣にお礼を言う日が、まさか来るとはね……………。  
それで……………ヒナコ、解説を、お願い。

私にも、分かるレベルで、ね』

『一位、上泉信綱。』

理由は単純。



「剣聖」という肩書にふさわしい剣豪は、上泉信綱以外考えられないから」

『ソード・マスター  
剣 聖？』

『うん。』

強かったエピソード、凄かったエピソードは探せば色々出てくるけど、そういうのは全部カット。

上泉信綱の真価はそこじゃないから。

この人はね、弟子がすごいの』

『え？』

本人じゃなくて、弟子？』

『そ。』

自流を打ち立てた人がわんさか。

柳生新陰流、柳生宗厳。

足田陰流、足田景兼。

タイ捨流、丸目長恵。

後に直心影流の系譜となる、神影流、奥山公重。

この人は元々やつてたけれど、宝蔵院流槍術、宝蔵院胤榮。

駒川改心流、駒川改心。

孫弟子も入れるとなると――

江戸柳生、柳生宗矩。

示現流、東郷重位。

一応入る、と思う、夢想流、上泉秀信。

ならこつちも入る、かな？ 民弥流居合術、民弥宗重。

日本の戦国と呼ばれる時代に沢山の武術・剣術が勃興したけれど、

上泉信綱に師事して日本の剣術史の最前線に躍り出た人達が、列をなしている。

はつきり言つて、これは異常。

教え子達の、質と数。

後にも先にも、こんな人は上泉信綱しかいない』

『剣術も魔術も、次世代に伝えないとダメでしょ、どれだけ自分が進められたかを。

そうやって、人間は脈々と技術を発達させてきた。

根源に行けなかったら、自分の足跡を加えて次に託す。

例え根源に到達できたとしても、到達した証は自分一人で終わっていいものじゃない。  
い。

だから、私は、たった一人だけしか剣聖と呼べる人がいないとすれば、

——この人、上泉信綱。

アーサー王伝説の魔術師マーリンを、キング・メイカー 王の導き手だとするならば、

上泉信綱こそは剣の教え手、セイバー・メイカー 日ノ本におけるただ一人の剣ソード・マスター 聖』

『そこんところは、武蔵ちゃんフアンの私としても認めてあげなくもないのよね』

『武蔵流は弟子が寂しい、と言われちゃうとね』

『だいたい、それが間違っているわけなの。』

武蔵ちゃんを剣士という枠で測ろうとするからおかしいんじゃない。

武蔵ちゃんは、武蔵ちゃん。

ナンバーワンでオンリーワンの武蔵ちゃんなの!』

『全力で同意かな。』

上泉信綱と宮本武蔵を剣士という同じ秤で測るのは、確かに変。

武蔵は、その枠だと余裕ではみ出てるから。

だからこそ武蔵論争は、常に大荒れなんだけど。

あと一つ、忘れちゃいけないのが、

武蔵非名人説、つてのがある』

『え——?』

武蔵が非名人?

どうして?

私の知る限り、日本で最も多く決闘をして勝った人でしょう?』

『いちゃもん、に近いけど、結構根が深い。』

フィクショナルな逸話が膨らみすぎて、そのエピソードはおかしい、嘘だ嘘だ、雑魚ばかりと戦って勝っただけだ、つてもう大変。

武蔵は好きな人は好きだけど、有名すぎるからアンチも多い。  
有名人料みたいなものだと思うけどね。

とにかく私は、一位上泉信綱』

『上泉、信綱——。』

ありがとう、勉強になったわ。

では次は、ええと、なんて、言えば——いいの、かしら………？』

『二位、沖田総司。』

理由は超簡単。

この人、必ず相手を倒したと伝承される得意技を持つてるから』

『必ず、倒した………？』

ゲイボルグと似たようなもの？』

『大違い。』

ゲイボルグは、魔術要素を含む呪いがベースでしょ？

沖田総司の得意技、三段突きは、私の調べた限り、純粹な劍の技。

それなのに、必ず、倒したつて必殺の太鼓判を押されてる。

日本で劍士・劍豪といわれる人は大勢いるし、劍術流派、武術流派はそれこそ腐る程あるけれど――、

その中で必殺を謳われているのは、沖田総司の三段突きだけ。

ま、抜けがあるかもだけど』

『劍士としての技量で実現させた必殺の得意技が、セイバーの宝具として昇華するのね。

――、これは、みものね』

『だって、ペペ』

『ごめんなさい、ヒナコ。』

あなたのほつぺ、グニヤングニヤンに引つ張つちやっついていいかしら？

なんだかすつごく、私にいじめられたそうにしてる』

『宮本武蔵は無いの？』

沖田総司の三段突きみたいな伝承を持つ技は？』

『……………』

『……………』

『だから何かしら、この空気とその顔？』

『私、予防線張ったつもりだったのに』

『負けない、負けない、ええ負けないわよ……………！』

武蔵ちゃんへの愛は、こんなところでくじけたりしないもの……………！』

『ちよい強引に話題戻し。』

私が沖田総司を押すのは、ソード・ファイター 剣士として一番強いと思うから。

上泉信綱は先生の立場が強いかな。

とはいえ、沖田総司、この人間違いなく、病弱ってスキルがつくはず』

『総ちゃんは、結核で早死にしたって言われてるわね。』

仲間と一緒に敵陣へカチコミかましてる最中に大量吐血で気絶した、なんて話もあるのよ』

『沖田総司Ⅱ三段突き、じゃなくて、』

沖田総司Ⅱ結核で病死、だから。

セイバーとして召喚できても、血を吐きまくって戦いどころじゃない——、  
そうならないとは言い切れない、それが怖い』

『長期戦は難しくても、短期決戦の宝具の打ち合いならば——活路はありそうね』  
『そしてここでやっと武蔵の登場』

『おーそーいーでーすー。』

おーそーいーでーすー。

はい、オフェリアちゃんも一緒に、』



『.....』

『ごめんなさい、悪いのは私』

『三位、宮本武蔵。』

これも理由は簡単なんだけど、

この人、二刀流で間違いなく日本最強だから』

『？』

『どういうこと？』

『私、刀一本と刀二本は、別カテゴリーで考えてるから。』

どっちが強い、じゃなくて、そもそも比べられない。

短距離速い人は、短距離で足速い人、

長距離速い人は、長距離で足速い人。

どちらも同じ足速い人で、短距離の方が偉いとかないでしょ？

刀一本で一番強いのが、上泉信綱』。

刀一本で一番強い剣の技を使えるのが、沖田総司。

刀二本で一番強いのが、宮本武蔵。

だからこの三人が、日本で一番強い剣豪は誰か、というオフエリアの問いへの私の答え、

——かな。

私も五輪書大好きだから武蔵ブッシュしたいけど、それはペペにお任せ』

『それで、ヒナコは三人なのね。

……………貴女、喋る、のね？

貴女がここまで長いこと喋るの、私、初めて聞いた』

『ん？

必要になったら、そりゃ喋るよ。

口はあるし、発声機能もあるから。

無駄なことを喋るのが、嫌なだけ。

静かな方が好きだし』

『普段は本ばっか読んでるフリしてお高くとまってるのよね、ヒナコは。』

私達のカルデアAチーム女子会にも、毎っ回っ、誘ってるのに来てくれやしない。

アンタの化けの皮、私が絶対剥いでやるから覚悟しときなさい』

『フリじゃなく、読んでます。』

ご飯は一人で静かに食べたいだけ。

隙あらば私を邪魔しようとする、フェノスカンディア・カルボナーラさんが一緒なのはちよっと』

『……………屋上？』

『寒いからパス』

『でも、ヤーっぱりね、私どうにも納得できないのよ、前にも言ったけど。』

アナタの論法で行くなら、剣一本で一番強いのは総ちゃんじゃないの？』

『それは前にも答えたけど、ヨーダとメンスどっちが強いつて言われたら、そりゃヨーダ。』

ジェダイ最強のセイバーは、私はヨーダ。  
だつてヨーダだから』

『だ、か、ら！ その、論、法、な、ら！ あのイケメンの方が上じゃない！ 私の知る限り、そういう設定でしょ！ そ、う、い、う、設、定!!』

『……………つまりヨーダ?』

『違うわよ!!』

サミュエル・L・ジャクソンにそっくりなイケメンの方よ、イケメン!!』

『それはヨーダだよ、ヨーダ』

『髪あるでしょ、髪!!!』

メンスはない人！ ヨーダお爺ちゃんはある人!!

『いい加減ヨーダから離れないと、アナタの髪型ヨーダにするわよ!』

『そのヨーダって、セイバーのクラススキルか何か?』

『.....』

『.....』

『だから、何?』

『私、何かまずいこと言ったかしら?』

『.....ペペ、』

『.....聞くしか、ないわよね、こうなったら』

『……………嫌な予感しか、しないけど?』

『……………でも、これを知らずして人理の何が分かってるのか、そういうことでしょ?』

『ねえ、オフエリア、』

『いいかしら、オフエリア、』

『だ、だから、何??』

『いくね?』

『いくわよ?』

『え、ええ、ど、どうぞ……………?』

『Wars or Trek?』  
『Wars or Trek?』

『は?』

ウォーズ? トレック?

ごめんなさい、さつきから貴女達が何を言っているのか、私にはさっぱり、』

『フア———————ック

!!!  
フアックフアックフアックフアックフアックフアックフアック

フアック  
ク  
フアック  
ク、

フア———————

!!!

ああ! もう! 驚きのあまり一秒間に十一回もフアック言っちゃったじゃないの

よ!!』

『これはまずい。』

マシユはしようがないけど、違う方向でまずい。

オフエリアは、やっぱりオフエリアだったか』

『……………ごめんなさい、』

せっかく私の頼みを聞いてもらっているのに、失礼なこと聞くかもしれないけど、もしかして貴女達、私のこと、馬鹿してる？』

『謝らなきゃいけないのは私達の方。』

その答えは、イエスなんだもの——、

だって、

そ—————で

しよ—————うが

スタートレックを知らないで、貴女は人理の何を分かった気になつていっているのよ!!!

人類のこれまでの発展と歴史っていうのは、それこそスタートレックシリーズの発展

のことじゃない!!!!

人理＝スタートレック、

!!!!!!



スタートレックⅡ人理!!!!!!

脈々と続く人理の流れを、ぎゅぎゅつと凝縮してエンタメへと昇華しているのが、す  
たーーーーー！

スタートレック!!!!!!

ウオーズでは、ありません!!!!!!

繰り返しまああす!!  
ウオーズでは、ありまーーーーーっせん!!

これが真理、永久不変の絶対変わらないただ一つの真理!!!!

私達魔術を志す者が目指さなければいけない到達点こそ、

そうよ、そうなのよ!!!!

スタートレックに、きちんと表現されているんですから!!!!

私達カルデア、何をする人？

人理を守る人、すなわちいいいいいいいい!!!!

スタートレックのシリーズを永遠に続けさせる人たち!!!!

2009年から始まったケルヴィンタイムラインを、ダークネスで終わらせない人た

ち!!

2016年に、ビヨンドを!! 絶対!!!! 何が何でも!! 完成させて!!!

アメリカ初日に!! 最前線で見える人!!!!!!

行くのよ、私達は——!!!  
そう!! 宇宙という、最後のフロンティアへ  
!!!!!!  
』

『……………今の話、もしかしなくても、  
真面目に聞かなくて、よかった?』

『それを、聞いてしまう?』

そのこのペペさん、トレツキーさん。

見てよ、オフェリア、超ドン引き。

恥ずかしー』

『そんなこと言ってる場合つつつつつつつつつつつつ?』

私には、信じられないのよ!!

この地球に住む五十五億の全人類!!

生まれて一週間も経てば、ウォーズ・オア・トレック?  
イエス、トレックつて!

みんなちゃんと喋るでしょううううツツつ!!

なのに、どうしてえええええええ、未だにトレックを知らない人がいるのよオオオオオオオオオオオオ  
!!!??"

『……………』

ごめんなさい、確かに知らなかったのは私の過失みたいね。

貴女のいう、とれつく？ が何なのか未だに見当もつかないけど——、  
今夜中に全ての調査を終わらせると、ファミルソローネの名にかけて約束するわ』

『もはやどこをどう突っ込めばいいのやら。

あ——。

おーい、マ——ーシユ、マシユ——。

こつちこつち』

『皆さん、お揃いで。

どうされたのですか?』

『……………』

『きゃー、マシユちやーん。』

『今日も素敵なお髪がお綺麗よ、とっても』

『はい、どうも』

『いく?』

『じゃあ、いくわよ』

『……………?』

『W Wars オオ  
ウオーズ・オア  
r r オア  
s s ト  
o r ト  
r ア? Tr  
レッ  
k ク? k  
ク? ク』

『……………?』



先日、ヒナコさんのお部屋にお泊りさせていただいた時、スターウォーズを観せていただきました』

『え……………つつつ!』

『あら、ヒナコさああん？』

私に抜け駆けして布教活動とか、いい度胸しちやつてるじゃない。

明日の太陽が上がる様、もう絶対に拝めないわよ？』

『人聞き悪いなあ、ペペ。』

人の歴史の勉強がしたい、って言われたから、人理の中で最も輝かしいエンタメ作品を紹介しただけ。

解説あった方がわかりやすいから、部屋に呼んだだけ。

全部見てたら朝になっちゃったから、お泊りになっちゃった、それだけだけど？』

『だったら何で、クルクル剣術なんか見てるのかしらねえ？』

『もちろん、

小難しい物理の話されるより、ジエダイかダークサイドかって方が分面かりや白すいいか  
ら』

『……………泊まったの、ヒナコの部屋に……………?』

『?』

はい』

『……………あら、そう、そうなんだ……………』

『?』

『マシユちゃん！

トレックは!? トレックは一体どうしたの!?!?  
トレックは、ノーチャンスでフィニッシュなの!?!?!?  
!?!?!?』

『いえ、シリーズが沢山あることは知っていますが、なにぶん数が多すぎて、全て見るには、膨大な時間がかかってしまいます』

『あーら、大丈夫。』

そんなマシユちゃんのために、スタートレックの新シリーズ！

これは映画二本しか出てなくて、五時間もあれば全部見れるわ!!』

『それは、』

『マシユ、クローンウォーズ見る?』

『え? それは、なんででしょうか?』

『エピソード2と3の間の出来事のCGアニメ。』

メンス、超かっこいいよ』

┌  
└!



是非』

『ストオオオooooooooooooッ。』

今の紳士淑女協定違反は何かしら、芥ヒナコ？

いい加減しないと、仏のペペロンチーノさんもブチ切れて、アンタをばらっばらのミートソースの塊にするわよ？』

『……………見たいもの、見せてあげればいいんじゃない。』

つまり、

ノー・トレック、イエス・ウオーズ。

ノー・トレック、イエス・ウオーズ。

ノー、トレック、イエス、ウオーズ』

『ヒナコ、

アンタ、今夜サーヴァント召喚しなさい』

『え、ペペさん？』

『』

『明日の正午丁度、トレーニングルームでガチるわよ。』

アンタの思う、最強のライダーをちゃんと召喚しとくように。

私のアーチャー、悪いけど、絶対に負けはないと宣言しておくわ。

ああ、所長には私が言っておくから安心して、

芥ヒナコは、トレーニング中の不慮の事故で死亡しました、ってね』

『なんでもいいけど。』

ペペには悪いけど、私——、

例え地球上からトレツキーが絶滅しても、流してあげる涙、一滴もないから』

『フン。』

そのお馬鹿な勘違いをする救えない貴女へ——、

とっておきの、真紅<sup>レッド・コスチコーム</sup>の死葬礼装をプレゼントしてあげるわ!!』

『そんなネタ、トレッキーにしか伝わらないから』

『キイイイイイ！ お黙り!!』

『オフエリアさん、どうすれば？』

『え、何？』

私？

私に、聞いているの？』

『はい。』

このままだとお二人がとんでもないことになってしまいそうです。  
どうすれば、いいんでしょうか？』

『私、私、私に、聞いているのね……………私に……………。』

コホン、そうね——。

ここは公平に行きましょう。

今夜はペペのところ、すたーとれつく？ の新シリーズ映画を。

明日はヒナコのところで、くろーんうおーず？ のCGアニメを。  
明後日以降は、流動的に。

今から予定を組んでも、とれつく？ と、うおーず？ を見てからのほうがいいはず。  
ルールは一つだけ。

うおーずを見たら、とれつくを見る。

とれつくを見たら、うおーずを見る。

どちらか一方に偏ることはないようにする——  
これで如何かしら？』

『それよ！』

『それです』

『ん、オフェリアだ』

『ありがとうございます、オフェリアさん。』

オフェリアさんのおかげで、ペペさんとヒナコさんが戦うのを止めることができました

た』

『あ、あらそう……………？』

べ、別に、大したことは、し、してないけど……………』

『なんだし、もうこうなったら四人一緒に見る以外の選択肢は、ないわね』

『……………え？』

『……………えー？』

『はい』

『ヒーナーコー、アンタはとりあえず強制参加。

なんなら、アンタの部屋、爆破してでも引きずり出すわよ。

一緒に見るか、お茶会に来るか、さあどっち!?!』

『……………』  
ならトレック見る方がまだましかな』

『あーらら、私、気付いちやった。』

もしかこれ、カルデアAチーム四人娘、初の全員参加イベントになりそうじゃない？』

『あ——。』

『そう、なると思います』

『そこはかたない不安を感じるのは私だけかしら？』

『第一回を前に内紛で空中分解しそう』

『んー、んー、んー……………』

四人、四人、四人——。

四天使、四天王、四聖獣、四將軍——。

ピンとこない、どれもダメ、んーんーんー……………』

『——三銃士』

『ん？』

『？』

『え？』

『この四人なら、三銃士。  
マッシュがダルタニアアン。  
私達は残り三人』

『それ、いただき！』

『三銃士？』

なら——……………」

『自分が誰とか考えなくていいよ。

オフエリアが言った通り、流動的のがいいし』

『来た来た来た来た！

んもー、テンション上がってきちゃったわ！

はい、円陣ーっつっ!!』

『え？ 組むの？ 冗談でしょ——って、うわっ!?』

『やる流れ、なのね、やる流れ。

あ——っ……………」

『隣、失礼します、オフエリアさん』

『え、え、え、ええ……………」



『私達、カルデアAチーム三銃士、絶対に見るわよ』

『何を？』

『私もそれを聞きたいけど……………』。

諦めましょう、ヒナコ。

私達にはもう、頷くしか道はないわ』

『民主主義の二十一世紀に、なんとという横暴。

カルデアって、帝愛グループから資金提供受けてたっけ？』

『2016年！ 新シリーズ三作目!!』

ハリウッドの最前列!! 私達四人娘三銃士が！ 完全占拠、しちやいますつつ!!』

『はい』

『……………はい』

『はあ、はい』

『四人全員で行くわよ？』

宇宙という、最後のフロンティアへ!!

私達人類の最後の希望、U・S・S・エンタープライズNCC-1701「カルデア号に乗って!!!」

『はい』

『……………はい』

『はああああ、はい。』

——うん。

最後までいい、ちゃんとしよつか。

私達の進む未来に、』



「——と、いうわけなのよ。」

「分かったかしら？」

「まるで要領を得ん。」

「つまり何だ？」

「宮本武蔵の伝承を紐解けば、宝具となりそうなのは三つ。」

一つ、宿敵佐々木小次郎を倒した時の、一撃。

ただしこの決闘、不明な点多すぎる」

「違うな。」

そんな下らんものをあの双剣使いが己の切り札とするはずがない。

次」

「二つ、一寸の見切り。」

武蔵の記した五輪書で言及されているもの。

敵の間合いを正確に把握し、最小動作で躲す——そのギリギリが一寸、およそ三センチ。

急所となるポイントを数センチ外してのカウンターね」

「……………違う。」

それは宝具でも、サーヴァントとしてのスキルでもない。

奴は、ただ自然にできていた、そのギリギリの見切りを。

三センチだと？ コンマ三ミリの間違いだろう、それでも大きすぎるぐらいだ。

呼吸と同じように、できていたとも。

当たり前前に行けるものを、誰がありがたがる？」

「なら、最後かしら。」

三つ、空。

「これが、一番厄介」

「聞かせろ」

「そうね、まず空っていうのが、」

「座りすぎて拗らせた屁理屈男のたわごとだろうか？

無、空、それぐらい知っている」

「意外、ね」

「だろうな。」

「シグルドは知らん、オレが知っているだけだ」

「——っ」

「だってそうだろう？」

燃やして、燃やして、燃やし尽くせば、残るのは何も無い。

それすらも燃やし切れれば、ただ、空となる。

フン、知らぬわけがなからう——、この、オレが。

オレが入る空はそれだが、奴の空は、何と謳う？

あの境域をどう表現しているのか、気になる」

「それが、厄介な点。

五輪書とは、十七世紀に宮本武蔵自身によつて書かれた文章をまとめた五巻の書物。

色々な方面へこの五巻の写本が伝わっていたのだけれど、写本の伝搬系統によつて差異が多い。

誤字脱字は当たり前。

写本同士を比べたら、まるで違うことが書いてあるものまであったわ。

時代を考えれば、しょうがないわね。

まるで、魔術師<sup>私達</sup>同士の正当後継者争いの証拠提示合戦を見ているようで微笑ましかつ

たわ。

だって血がね、全然流れてないもの」

「無駄な感想など不要。

結論だ」

「では、私の結論だけ。

五輪書は未完成品。

最後の空之巻を書き上げる前に、宮本武蔵は病死した」

「待て。

お前はその空が宝具の可能性があると云わなかったか？」

「ええ、言ったわ、それが？」

「……………いいかしら、結論以外を言っても？」

「フン」



「その中のある一派、気になる伝承方法をしていたの。」

その他大勢と比べるとここだけだから、異端といえば異端ね。

その派ではこうしている——、

空之巻の序論を書いたところで、宮本武蔵は力尽きた。

そしてこの派の継承者は、自分が考える空について、その後につけ加えた」

「付け、加える、だと？」

「未完だからこそ、自分達で——そんな心持ちでしょうね。」

ずいぶん大きく出てるでしょう？

そうして出来上がったのが、宮本武蔵の空論に始まって、

二代後継者の空論、三代目、四代目とずっと続く、

宮本武蔵の剣を使う者達が考えた、空についての一大論文集。

自分の剣境が高いか低いかが、一目瞭然。

だって比べられるのは、宮本武蔵の空だから。

末代までの恥だし、自分の次が下手なこと書いてたら——

どんな指導をしていたんだと、やっぱり恥。

貴方と戦った女性が、私が調べた五輪書を書いた人物なのかどうかは分からないけど

.....

もし、本当の作者が、あの五輪書達の惨状を全部見たとして――、  
唯一不許可を出さないものがあるすれば、間違いなく、これだけよ。

武蔵が辿り着いた空という境地――

それは、武蔵の剣士達によって書き続けられ、積み重ねられ続けていく、  
その在り方が、宝具になるかもしれない、そう思うの」

「はまった。

全て、合点がいった」

「.....えっ？

分かったって、どこまで？」

「議論は好かん。

結論だけ言う。

オレ一人では、倒せないかもしれない」

「え……………」

「まず宮本武蔵。

恐らく世界はそのあり方をこう定義しているはずだ、

『根源へ到達した人類最強の剣士』——とな。

他にもいくつか言葉が続くが、基本はこれだ」

「……………何を、言っているのか？

あの宮本武蔵は魔術なんて、」

「使わない？

フン。

オレに言わせれば、剣も魔術も何もかも、突き詰めるところまで行ききつてしまえば、  
全てそこに行き着いてしまう。

お前ら魔術師達が何故か有り難がる、根源というやつに」

「……………」

「奴の剣へ、オレは、空位に至った状態で、魔劍グラムを叩き込んだ。

限定解除はされていなかったがな、三つ、あの時点でのオレの全力だ。

だがその三つ全て、奴の右の一刀に弾き飛ばされた。

その威力に、オレは、後ろに、下がらされた。

あの痺れ……………決して忘れられん」

「!?」

待ちなさい、空といえれば日本剣術の中で最高位とされる剣境よ？

貴方が隠していたのは不問に付すわ。

限定状態の貴方では、太刀打ちできないということね」

「違う。

例えあの時、最終解除までされていたとしても、俺の剣は弾き返されていた。

限定解除を最終段まで進め、霊基状態を最終段階まで進化させる、確かにそれはサ―

ヴァントとしての戦闘力を飛躍的に向上する。

だが、剣の技が、都合よく上がってくれるわけなからう？

あの宮本武蔵は、俺の上の上まで行っている、それだけだ」

「……………えっ……………!!??」

本当、なの……………？」

「オレは空から先に行く必要がない、燃やしてしまえば、良いのだからな。

宮本武蔵の剣こそは、削ぎ落とされきった剣。

だから分からなかった」

「……………」

「全ての無駄を削ぎ落とし、ありとあらゆるものまで限界を超えて削り落とす。

それが奴の剣の基本骨子。

ある意味、一芸だけを極め続けている。

なるほど。

それでもなお残るものがあるのなら——、  
極限以上に研ぎ澄まされたその剣は、二つと無い、唯一無二の一なる処、つまり根源へと至るに足りる——可能性を有す。

だが、それがなかったら？

削つて終わつて、本当に何もなかったら、どうする？

俗な言だが、回り道をした方が、という奴だ。

あるのは、頑張りましたけど駄目でした、という惨めな己だけ。

カカカ」

「……………」

「だから、何か足されて続けていなければ、確実に至るとは言えんはずだ。

宮本武蔵のそばで、技か、アイディア、何でもいい、

その背を押し続けるものがなければ、

奴が乗るに足りる足場たり得るものがなければ、

その剣をさらなる極地まで導こうとする光のような何かがあれば、

奴は、至れない。

別にそれは無駄な努力でいい。

要らぬのなら、奴が削る。

それでも残る何かは、奴が元々持ってもいい。

それか、誰かが伝えてもいいはずだ。

例えそれを奴が削り落としまっても、

何度でも諦めず、渡し、示し、導き続ける、

そんな剣の導き手があるのであれば――、

あの双剣は、根源すらも通り越し更なる先まで、行ってしまうかもしれんぞ？

カカカ、それは到底無理だな。

あのカルデアの塵蟲どもなら、百度生まれ変わっても無理だろう。

例えフレイとテュールが雁首付き合わせたとて、

あの宮本武蔵の剣を前に、所詮奴らにできるのは無様極まる敗北宣言だけだ。

せいぜい、『嗚呼、キミという剣の華は実に美しい』、とぬかすぐらいだろう。

カカカ」

「その、何か、が空之巻の追加記述だっというの？」

「然り。」

どうせその書の著者は宮本武蔵となるのであろう？

別に大したことが書かれてなくて良い。

赤子の手が、新たなる剣界を開くものだ。

足し続けるものがあること、それが奴にとって肝要」

「でも……………そんなの、私は認めない……………!!」

認められるわけ、ないわ……………!!

確かにあのセイバーは強かった、強すぎると言ってもいいくらい!

でも、でも——!

私が思う根源という場所は、そう簡単に行けるような処じゃない……………!!」

「だろうな。」

オレの言ったのは、ただの妄想。

あて推量。

やまかん。

根拠などない。



ただそうあれば面白いという話のただの垂れ流し」

「……………ツツツ!!」

「カカカ。」

睨む代わりに一つ答える。

お前達クリプターとやらの企みが、全て成功したと仮定しろ。

最終局面の際まで、一つ残らず成功したとな」

「……………私、さつきみたいな冗談は、嫌いよ?」

「カカカ。」

いいか、

そうなれば、間違いなく宮本武蔵は逆側に立つ。

そこで尋ねる、

お前達の側の中に――、

根源と接続する、剣士だけが放ちうる、魔法すらも凌駕する、最強なる宝具の斬撃、

そんな、出鱈目な絵空事でなければ、決して倒すことができない存在は——いるな?」

「」

「クククククククク!!」

ああそうだ、オマエはまだこんな手を使うのか!!

抑止の輪だの綺麗事をほざきよるが、その実ただの奴隷の捨て駒!!

死にたくない、死にたくない、死にたくない、糞尿撒き散らしながらに泣きわめく!!

星の運命すらも弄ぶ傲慢!! そうであつて当然と何ら省みることのないあり方!!

その通りだ!! オマエは何も間違っていない!!

オマエがいなければ、何も無いのだから!!

全てのモノは、オマエを活かす為存在していなければならぬ!!

良いぞ良いぞ、実に良い。

その甘えきつた態度、実に、良い!!

見ろ………皮を被り縛られているはずが、オレの焰が出てきているぞ!!

ああ、まずいなあ………オマエを思えば！ オレの焰！ オレですら止めらん!!  
今度の兵器は、いつもながら、実に手が込んでいる!!

怖いのだろう、恐ろしいのだろう、震えているのだろう!!

ああそうとも、オレだけではないのだから!!

オマエを殺し、蹂躪し、犯し尽くせるモノは、オレだけに、あらず!!!

兵器が何を思い、剣を磨き、技を高め、誰かの力を借りながら、遂に達し——

オマエが描いた通りに、一回限りの捨て駒として、オマエのために、死んでくれる。

ああ、そうだとも——オマエは何も、間違つてはいない。

だからこそ、オレは、オマエ世界を殺燃やししたくてたまらないのだ」

終焉が、

焰となつて燃え上がろうとしていた。

(第五話へ続く)



その後ろには、やはりまた別の巨人がいる。

また別の、別の、別の、そしてまた、別の巨人が、いる。

「……………かー、つたく。

どうしてテメエらみてえな外道つつー輩共は、

ぞろぞろぞろぞろ、ぞろぞろぞろぞろ、群れを作つて壊しやがる。

民草に迷惑かけねえで生きることが、なんでできねえ？」

ならば、その前に立つ赤髪の青年が肩に担ぐ刃こそは、

一振りの大身槍。

「おう、テメエら全員、儂オレを怨んどけ。

優しい地獄送りなんざ、期待すんじやねえぞ？

地獄の鬼共に、ばらけたテメエらの身体を全部つなぎ直してもらうんだな」

この青年には珍しいはずの大型の槍。

穂長一尺四寸、莖一尺八寸、取り付けたる柄の長さは六尺を超える。

メートル法で言うならば、二メートル五十を優に越す直槍。  
切られし銘は二人。

共に汗を流して鉄を鍛った昔日の友の名と、己の真名。  
重厚な造りのその槍を、まるで斬馬刀であるかのようについと構える。

どんな争いでも、

大元にあるはずの業を断ち切ることができるのならば、

もう二度と、誰も傷つかず、

誰も殺められることはないはずだと、

信じながらも、願いながらも——

只今は、

「おし——、やるか」

人の形をした修羅となり、

戦の鉄火場で、一人、鉄を鍛とう。

吠え狂う刀打ち。

荒々しく全身全霊叩きつけるように、その劍をぶん回し、肉を裂いて血を飛ばす。その勢いこそは、防御を全て捨てたかのような攻撃一辺倒の決死の特攻。自分は代価を支払わないという選択肢は、彼にはない。

後世——、

今はすでに消えてしまった正しき歴史の中で、

『一本の刀も無限の歴史を語る』

と、ある日本刀を称えた者がいた。

そう、そうなのだ。

この鍛冶匠には——分かってしまう、刀の歴史が。

その刃が持つ過去、未来、可能性。

数多の持ち手によって繰り出される、

全ての攻撃、防御、回避、捌き、いなし、弾き、あらゆる戦技、

これまでとこれからの、歴史の全てが、分かってしまう。



ただ刀を鍛えることが、何よりも好きだったはずなのに、  
どうしてなのか………：気付けば鍛冶匠は、そこに到達して<sup>た</sup>いた。

例えその使い方を自分の肉体では実行不可能だと理解していても、

この鍛冶匠には、分かってしまう、見えてしまう、理解してしまう、

何よりも——刃が作る、死という現実。

己が槌を振るっている間も、殺し、殺され、また殺す。

未だ刃とならぬ玉鋼を見ているだけでも——微かに感じてしまうのだ。

やがて刃となるこの塊で、殺められる子供、女性、老人、その今際の際の表情、最後の叫びを。

これは誰かの戦い方。

誰かが殺し、誰かが殺された戦技の数々。

己の意思で歴史をなぞり、この手を血に染める。

割り切つてしまえば、楽だったのかもしれない。



全ての元にある、それを。

戦を終わらせ、悲しみを終わらせ、負の連鎖を断ち切り、殺戮の輪廻を止めるそれが。それをもし断ち切れる刃があるのならば——  
全てが分かり、全てを背負う己でなければ、鍛えられないはず。  
だからその一刀を、この身は今も追い求める。

「ガオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

最後に残った一人の巨人。

一際大きい体躯のそれは、一際大きな大声を張り上げ、やはり一際大きな槍を叩きつけにくる。

仲間を全て殺したこの人間を、決して許さないというように。

青年、槍を左に持ち替え、

一振りの脇差を右に取り出す。

「——唯、空也」

押し潰す敵刃と振り抜かれた短刀が交錯。

「!?」

まるでそこに初めから何も存在しなかったように短刀が走り抜いた。

敵の石槍をその穂先ごとなら抵抗を生じさせず断ち切り、

信じられぬ現実に硬直してしまった巨人の腕を、鍛冶匠が駆け上がる――

剛の旋風が首を刎ね、

血煙吹き上がるよりも早く、投げつけられた大身槍が脳髓を貫き穿つ。

天元の花が咲いた異聞帯。

その花の香りが、一つの縁を呼び寄せた。

鉄を携えやってきたのは、一人の刀打ち。

二つの剣が、再開を果たそうとしている。

第二のセイバー、千子村正——ここに推参。

〔第五話 第二のセイバー、推参!〕

『——う————っし! 上がりだ』

「わー」「わー」「わー」「わー」

「おー」「おー」「おー」「おー」「おー」「おー」

「ねーねー、なんて書いてあるの?」

「なんてなんて」「なんてなんて」

「こいつか?」

「これはな、臨兵闘者皆陣列前行。」

臨む兵、闘う者、皆、陣を列ならべて前を行く」

「はー」「はー」「はー」「はー」「はー」「はー」

「なんなの?」「それなに?」「どんな意味なの?」

「なんかかっこいい」「すごー」「すごー」

「おめえ達をちゃんと守ってください、つとまあこんな感じのおまじないだ」

「りーん」「びよー」「トー」「しや?」「かい」「じん」「れーつ」「ぎいー」「ぜん!」

「かっくいー」「すごそう」「トー」「トー」「トー!」

「こつちこつち!」

「こつち!」「こつちはなに?」

「こわい顔」「こわい顔してるー」「もしかして」

「ぼくたちのこと怒ってるの?」「ええ? 怒ってるの?」「怒られちゃってるの?」

「ははっ、違うって。」

「こいつはお不動サンつつつてな、こーんな怖い顔してお前らを傷つけようとする悪い

奴らを、こつちくんнатて睨み付けてんのさ」

「おおー」「へー」「まあー」「おふどうさんだー」

「んんー、こんな顔? くわっ!」

「こうじゃない、くわっ!」

「こうよ、くわっ」「えー、こうだよ、くわっ!」

「くわっ」「くわっ!」「くわっ」「くわわっ」「くわつくわ!」「くううわああ!!」

「くわっ」「くわっ」「くわわ」「くくく、わわわ!」「くわっ!」「くわっ!」「くわっ!」

「くわっ!」

「ははは、そっくりだぜ、おめえ達」

「ありがとー」「ありがとー」「ありがとー」

「みつかいさまありがとー」「ありがとー、みつかいさま」「みつかいさまありがとー」

「だあーから、<sup>オレ</sup>濃はそんなご大層なもんじゃねえつて。

<sup>オレ</sup>濃は——、カルデアのもんだ」

村を離れ一人、村正は歩を進める。

聞けば、さっきのような村がまだ多数あるらしい。

山に籠つて刀を鍛えたい気持ちもあるにはあるが、

それよりも、子供らの安全がきちんと確保されていることを確かめておきたい。

結界が似たような状況になっている村が、恐らくある。

ほつれかけていた結界を結び、破魔と退魔の印を加えた。

巨人が押し寄せてもあの結界は崩れないし、そもそも近寄ることすらないはず。

何故そんなことが分かるのか、何故できるのか、そもそもここはどこなのか、

そんなことより——

「かるであつて、何だ？」

かるであら？ カルデア？ 華留出阿？



分からない。

何故自分はそんな言葉を知っていたのか、そして何故そう言ったのか。あの場では、そう言うのが自然なように感じられたのだ。

「分からん、まるで分からねえ」

なるほど、英霊、サーヴァント、スキル、宝具。

そういつた由来不明の知識があるにはある。

「分からん」

第一、こいつは誰なのか？

自分はこんな外見の人間ではなかった。

「考えても無駄か。」

鳥頭の儂オレに分かるわけねえもんな」

ならば今は、歩くのみ。

「——ンだあ?」

どれだけ歩いただろうか?

ふと、何かに導かれるように視界を動かすと、異物を捉えた。

「つつつつ?」

それが何なのか理解するよりも早く、  
身体は走り出していた。

地面を蹴り、前へ前へと身体を運ぶ。

早く、早く、速く、速く——!!

走る、走る、走る、走る——!!

自分が見える光景が何を意味しているかなど、まるで分からない。

只今は兎にも角にも走り続ける。

一分でも早く、一秒でも早く、その場所に行かなくてはいけないのだから——!!

音が聞こえ出す。

大気撼わす砲音と、火花散らす鋼の戟音。

それに加わるのは、

「ぜりやつー!」

「きやあつ………!!」

「っ!!!」

生死入り乱れる戦さ場にて、他を打倒せんとする兵士達の声。

号砲炸裂、

「ぎゃああ??  
!!!」

直撃をもちに食らってつしまつた羽の生えた少女、即座に消滅。

対峙しているのは、身長六尺を超える大男。

「おらっ!!!」

否、

この男が持つ内なる輝きと外を照らす光を鑑みれば、大男という表現は的外れか。

これなる男こそ、

「もらったあ!!」

虹の夢を紡ぐ、快男児。

最後に残った少女に対し、砲口がその狙いを核へと定め、轟音と共に射出された砲撃が、吸い込まれるようにひた走り——!

「えっ?」

「ん!?!」

必殺を刻むはずだった砲弾が、空へと消える。

「——おう、大丈夫か?」

間一髪で間に合った村正、死滅するより選択肢がなかった少女を腕に抱き、その死地より救出するのに成功。

彼女を地に下ろすと、その前へ、進み出る。

「——あな、!?」

ぐううう——………!?!」

「しばらく、じっと休んでろ。

あんのデカイのは、儂オレが何とかしてやる」

その両拳に力を込め、

男の目を見る。

こんな輝いた瞳を持つ人間に出会ったのは、生まれて初めてだった。

少女を救い、この男と刃を交えようとも何ら異存はないが、

どこか、心のどこか奥底が、この男と敵対して良いのだろうかと思論を申し立てよう

とじている。

「一つ、尋ねるが、」

「おう?」

「おたく、オフエリアのもう一騎のサーヴァントか?」

「どこのどいつだ、そいつは?」

「いや、お前、サーヴァントだろ?」

俺がいうのも何だが、マスターは誰だ?」

「<sup>オレ</sup>農はその、さーうあんと、つてやつのはずだが、誰に呼ばれたのか分からねえ。

ますたー? さあな。

どんな事情でお前らがやりあつてたのかも、見当つかねえ。

だがな——でもさ、」

髪の色と同じく、その瞳も、燃え上がる。

「目の前で苦しんでいる人がいるのに、それを放つて知らんぷりだなんて——、オレには、絶対にできない」

「フ、

ハハハハハハハハ！

いいこと言うじゃねえか、色男!!

助けたいから助けた、事情は知らん、か。

いいねえ、同じ男として敬意を送るぜ！

つつてもま、こつちはこつちでやらなきゃなんねえんでね、

退けねえ」

巨大なる砲に、魔力が充電され弾となる。

「話が早くて助かる。



じゃ、戦<sup>や</sup>るか」

村正、一振りの刀を喚び、白刃を抜く。

「おっ——!?」

おおおおおおお!!??

その片刃!! その曲がり具合!!

まさか、まさかまさかまさか、まさかツツツ!!??

お前、ジャポンのサムウライか!?!」

「侍だあ?」

悪い冗談やめてくれ。

儂<sup>オレ</sup>は———ただの刀打ちだ!」

洗練には程遠い構え。

しかし、刻まれた記憶が担い手を導くのは、紛れもない戦場の剣。

走る———無造作、大胆を通り越した強引すぎる接近。

「行くぜ、サムウライ!!」

砲兵、弾を散らし距離を取る。

自分よりも大きい砲を抱えているはずが、その敏捷性、高いと言わざるを得ない。

放たれた魔力弾が着弾を繰り返し、爆風を撒き散らし村正の接近を防ぐ。

が、

「うおっ!？」

「ど、——らああ!!」

村正の一刀、いきなり届く。

虚をついた斬撃。

まさかこちらの攻撃をもつとせずただ一直線に突っ込んでくるという特攻は、信じがたいことにこの男の不意をつけた。

しかし、

大きい。

その砲は大きすぎる。

大きすぎるが故に——それは、盾ともなる。

弾く——。

村正の白刃が生じさせる大気のうねりを何度も肌に感じながらも、汗ひとつ見せない。

回り込もうかという村正へ、一つ手を打つ。

小型魔力弾の連射で的確に追い続け、再び距離を取ることに成功。

「意外と器用だな、髭面！」

村正、その身体に負った幾つもの裂傷から血を流しながらも、その声から苦痛は感じられない。

「髭面あ？」

おいおい、困るぜ、サムウライ!

「こない男を形容する言葉はジャポンにもあるだろう?」

「訂正すつか、その三枚目！」

くつちやべつてつと、気付いた時には地獄の一丁目に行つちまうぞ!!」

「ハハハハハ！」

やれるもんならやってみな！

しつかし、こんなケンカ、いつ以来だろうなあ？

おっと、待てよ、サムウライは喧嘩ご法度だったか!？」

「だから、テメエも分かんねえやつだな。

儂<sup>オレ</sup>は刀打ち、鍛治士だよタコ助!!」

一度接近されたことで村正の走力を計れたのか、距離が縮まらない。

いや、それよりも上手い。

次なる村正の行動を正確に読んでいる。

一つ一つの砲撃が、一人の指揮者によつて導かれる楽団の音楽のように複雑に絡み合  
い、導き合い、村正を圧倒していく。

「随分と速えじゃねえか。」

「国崩つてのは、どつしり腰を落ち着けて使うもんじゃねえのか!？」

「ふっ。」

古に孫子曰く! 『兵は拙速なるを聞く』!!

自慢じゃないが、俺の砲は速い。

「俺より速い砲兵なんて——、古今東西どこ探したって、見つからねえと保証する!!」

天秤は、砲兵へ傾き続ける。

勝機を手繰り寄せるには、一手打たねばならない。

何故ならば、

「——がつ?!」

削られている。

村正、敵の砲撃を無傷でやり過ごせていない。

「——あんま調子乗ってつと、」

しかし、

「怪我すつぞ!!」

手なら、ある。

「——は？」

「うおおお!!?」

投げた、刀を。

狙いは甘すぎたといわざるを得なかったが、砲兵は怯み、そこへ鍛冶匠が走り出す!

「おまえ!!」

カタアナはサムウライの魂だろうが!!  
投げてどうすんだ、投げて!!」

「だーからオメエ……………」

例えそれで距離を縮められようとも、  
正確につけられた狙いが、

「百姓だってなあ——、」

砲口を、村正へと導き、

「——持つときや誰だって持つんだよ、刀なんてもんはな!!」

発射!

「っ!!」

「んなっ——!?!」

突っ込んだ、下へ。

砲撃と地面の間の僅かな距離へ、頭から突っ込みやり過ぎす。  
手をつけて跳ね上がり、

「うおおおおおおおおおおおおおおおおお!!」

上げた気炎をそのままに、間合いを零とすべく接近、

空拳の右を固め、砲兵の顎を打ち抜くように、振り——!

だがその鉄拳が激突するより早く、

その砲口が真下を向いた。

「ぐツツツツツ!!」

爆風が、村正の身体を押し倒そうとする。



「悪いな、サムウライ。

奥の手は隠しておくもんだろ？」

発射の衝撃と着弾の爆風を利用し、空へと跳躍した砲兵。

爆風でたたらを踏んでいる村正へ狙いを定め——、  
砲弾が、雨と注がれた。

土煙が、ようやく晴れる。

そこには、仁王立ちする村正の姿がある。

身体中より血を流しているが、重症ではない。

相手が本気で殺す気だったら、自分は既に死んでいることは分かっている。

とどのつまり、相手が言ったように、これは、喧嘩なのだ。

「おう、」

「え？」

「行くあてぐれえあんだろ？」

「ならさつさと帰っちまいな」

村正、砲撃を自分一人に集中させるため回避行動を取らなかつた。

後方で身体を休める彼女が撃たれないように。

ただ、ひとしきり砲弾を浴びた今なら分かる。

相手は彼女を狙う気など、最初からなかつた。

相手からすれば、傷つく女性を捨て置けず盾となつて戦う――

見事な騎士道精神といえよう。

双方同時に倒そうと思えば倒せたが、それは違う。

そういう戦いではない、これは、喧嘩なのだから。

「——オルトリンデ」

「ンあ？」

「オルトリンデ、それが私の名前」

「おるとりんで、

オルトリんで、

オルトリンデ——オルトリンデ、オルトリンデ、

オルトリンデ。

オルトリンデ、か。

ははっ、可愛らしいおめえさんにぴったりがいい名前じゃねえか。

儂<sup>オレ</sup>は村正、千子村正だ」

「千子——村正……………」

村正の名前を呟いた戦乙女、その羽を広げ、空へと帰っていく。

「ムラアマサ……………?」

どっかで聞いた、な……………?」

うーつと……………確かそんな名前の切れ味がすげえカタアナがジャポンにあると—

——ああ!

お前、鍛冶屋か!?  
f o r g e r o n

「はああ……………もう何も言えねえ……………」

「分かってる、

鍛冶屋だつてサムウライなんだから、ジャポンでは!?

だからお前はサムウライ・ムラアマサだ!!

ハハハハハハハハハハハハ!!」

「……………あれだな、つける薬がねえつてやつか」

「と、そっちの真名聞いちゃったんで俺のも伝えないとフェアじゃないな。」

俺はナポレオン。

アーチャー、ナポレオン・ボナパルトだ」

「なほれおん？」

悪りい、聞いたことねえ」

「ぐっ!？」

意外とグサリとくるな、その言葉……………。

それで、どうする？

俺としちやお前さんとやりあう理由がなくなつたんだが……………?」

「あん? —— なめんな。

殴られっぱなしで終われる喧嘩が、どこにあるよ?

悪りいが、もちつと付き合ってもらうぞ」

「いいねえ、いいねえ。

お前に連れられて、こつちも暖まってきたとこだ。

最後まで付き合うぜ、サムウライ・ムラアマサ」

「——ンな抜けたこと抜かして、」

そして村正が、刀を、

「死ンじまっても、知らねえぞ？」

——抜いた。

「は……………?」

——はあああ!?

オイオイオイオイオイオイオイオイオイ!

なんだよ、そりや!!?」

「見りや分かンろ、刀だよ、刀」

「デカすぎるだろ!？」

柄 Poignee がお前の身長よりデカいじゃねえか!!」

村正が両手で持つ刀、

ナポレオンの言葉通り、柄だけで村正を超えている。

その柄長、六尺四寸、約一メートル九十六センチ。

両手で構える、というよりは、地面に置きながら持つているが正しいか。

「鹿島の神様へ刀納めるか、つて若けえ時分に思いたつてな。

聞いた話じゃ、鹿島神宮に納められてるかつのみたまのつるぎ 霊 剣の二代目は、刃渡り七尺超えつて話

じゃねえか。

そんじやま、そいつよりでけえ刀をこさえるかって馬鹿やらかした結果だよ、こいつは。

神サマの刀なんだ、人が振れなくても問題ねえ。

儂オレとしちやあ、この脇差が出来上がったんで、次は大太刀にするかと思つたんだがよ、

錢切れで断念だ、世知がねえなあ。

でかすぎるんで蔵には入らねえ、持ち運べねえ、近所の神社に頼んでも引き取り拒否すつたもんだの大騒動の挙句ボツだ、あー、今思い出しても腹内がきりきりするな。戒めだよ、こいつは。

調子こいて馬鹿やるンじゃねえぞ、つてな」

光を反射して美しい直線を描く刀身は、長く、大きく、太い。

だが、美しい。

目線が自然と吸い込まれるような妖しい輝きがある。

そして、切れる。

ナポレオンの目にもそう映る、誰の目にも切れると映らざるを得ない。

確かにこれは村正のいう通り、武器という兵装ではないのかもしれない。

その刃長は九尺九寸五分、メートル換算で約二メートル九十八センチ。

三メートルにはわずか届かないが、柄を含めた全長では四メートル半を超える。

これを脇差として使うのは、人の身では不可能。

「でもよ——、

さつきつから馬鹿抜かしてて、テメエの面ぶン殴るにはちようどいいクズ鉄だろ、





「お前に最大の敬意を表し、全開でいかせてもらおう！」

砲口は光を蓄えながら、砲手の狙いに従う。

外すはずもない砲撃。

村正の膂力、ナポレオンには見当がついている。

そう、切っ先を見るには顔を大きく傾けないといけないあのバケモノ刀、村正ならどの程度の速度で振れるか試算は終えている。

かつ、今、村正には魔力的な昂まりがない。

つまり、スキル怪力などの太刀行きの速さを上昇させる隠し手はないと判断。

「五」

そしてその常識的な思考を推し進めれば――、

勝つのは自分、どう転んでもこちらの方が早い。

まるでギロチンの刃のように佇むあの刀よりも、早い、絶対にこちらが。

振り下ろすよりも、倒れ込むよりも、間違いなくこちらの砲が早く直撃する。

「quatre  
四」

だが、と言わざるを得ない。

もしかしたらこいつなら何かするんじゃないのか、やってくれるんじゃないか、そんな、可能性を感じるのだ。

それは――、

不可能を可能にし、だからどうした、と言つてのける何か。

「trois  
三」

ナポレオンは己がどういう存在か自覚している。

人理の英雄、可能性の男。

人々の願いと期待に応えるもの。

人が持つ可能性を体現した存在。

そんな自分が――

「二!」  
 「deu  
 x  
 二!」

可能性を感じるのだ。

燃えるようにまつすぐな目をした、村正の面構えに。

ナポレオンが体現する可能性とは、

人々の願い、もしそうあつてくれたらという想い。

村正が内包する可能性は、おそらく違う。

「二!!!」  
 「un  
 !!!」

そして、気付く、

それは、誰かではなく、自分の可能性なのだ。

託される可能性ではなく、自分が望むことを成し遂げる可能性。

その核となるのは、どこまでも追い求める自分自身の信念。

何があつても、どんな犠牲を支払つても成し遂げる己の理想。

それをこいつは必ずやり遂げる——その確信が可能性として感じるのだ。  
他者からなのか、自分からなのか。  
違うようでもどこか自分と似た男が目の前にいる。

——なら、俺らが組めば最強ってことじゃねえか!?  
そう不敵に笑い——!!

ゼロ<sup>z.r.o.</sup>

「どらあああああああああああああ!!!」  
アルク・ドウ・トリオンフ・ドゥレットワール  
『凱旋を高らかに告げる虹弓』 つつ!!

喧嘩の華が、異聞帯に咲く。

(第六話へ続く)

## 第六話 彼という剣

雨降って、地固まる。

「——だから、村にジイさん、バアさんの姿がなかったのか。

胸糞悪い姥捨山だな」

「あつちにも言い分はあるんだろうな。

村で生産できる食料を考えれば、今の人数でぎりぎりだ。

大人は食う、子供よりな。

大勢の大人を恒久的に養えるだけの食料を作るとなると、中だけじゃ全然足りん。それじゃ外はどうかといえば、」

「デカブツの天下、か。

そもそもあの童らは村から外に出るってことをまるで考えてねえ」

「元の世界じゃ、食物連鎖のピラミッドの一番上だろ、人間が。

ここじゃ違う。

最底辺だ。

その上に巨人がいて、次がワルキユール達だ」

「……………」

「そうじゃなければ、生きられない。」

外に出ることを考えてないのは、確かにそうだが、出たら生きられない、だろ？

子供達が互いに争わないってのだけが救いだ。

みんなで仲良く、助け合う。

逆を言えば、戦うという概念がない、抗うという思想がない。

巨人を倒して生活圏を広げるなんて、絶対に有り得ない。

仮に、だ、あくまで仮にだぞ、

俺やお前が最大限手を貸したところで、無理だ。

戦乙女達に潰されるからじゃない、誰も立ち上がらないからだ。



武器を渡したところで、それで誰かを傷つけようとは決して思わない。その発想は、ある意味、見習わなきやいけんのかもしれんが……………子供達を戦いに連れ出そうってんじゃない、あくまで仮定の話だ」

「……………」

「この世界にとつちや俺達は異分子だ。

だからおかしく見えるんだな——、

この世界で、この世界の人間が生きるには、あの子供達がやってる方法しかない、そういうシステムなんだな、ここは。

動かそうにも、歯車が大きすぎるし、噛み合いすぎてる。

誰が考えたか、」

「ナポレオン、」

「ん——ん??？」

「あんた、知ってるんだよな？」

このふざけた世界に君臨している、神様気取りのクソツタレの居場所を」

!!??

……………落ち着け、気持ちは分かるが、まず落ち着け。

俺とお前、正面から行っても、裏口から奇襲かけても、勝てるような相手じゃねえ。玉碎覚悟の特攻なら、いつだって誰だってできる。

やるからには勝つ、勝利以外は認められん。

俺が道筋をちゃんと作り出してやる、だから、その思いはとっておけ。

そうとも――、

俺の辞書に、不可能という文字はないからな」

「……………」

……………何、だったんだ、さっきのあの凄みは……………!?

止まった。

サーヴァントである自分には心臓があるかないか定かではないが、それでも止まった、止められた。

——あの時と同じ……………いや、それ以上だったかもしれん……………!!

『……………私は、ルイ十六世を処刑しました』

そう答えた瞳にあつたのは——、虚無。

それは老いたムツシユ・ド・パリ、現役を引退していた元死刑執行役人。

狂った民衆達がギロチンへ人々を送り続け、その首を落とし続けた人物。

当時皇帝であり人生の絶頂期にあつたナポレオン。

老いた元執行役人と偶然出会い、皇帝の俺の首でも落とせるのか、とからかい半分に問いかけ、

返答したのは、四代目シャルル・アンリ・サンソン。

ルイ十六世やマリー・アントワネット、他、フランス革命の名だたる犠牲者達を処刑した男。

カルデアがアサシンとしての召喚されていることを確認している英霊。

誰であろうと、何者であろうと、必要あれば刑を執行する——その凄み。

——それを超えちまうか!!  
くうくうー!!  
頼もしいぜ、切り込み隊長!!

歩いてきた足が、止まった。

「——誰かが、戦ってんな………」

「どこでだ?」

「この先だ」

「……………見えん。」

この冬景色じゃ、俺は先が見えん。

ここでも俺の前に立ちはだかるか……………っ!!」

「今の儂は目がいい。」

儂達みてえなのが、三人——いや、二人とおまけか？

デカブツが——……………二十二、だな。

羽っ娘が、……………十九、いや十七になった。

オルトリンデは、いねえな」

「おい!? その戦力差は何だ!?

何がどうなってる!？」

「三人対残り全部だ。」

羽っ娘達がうめえこと立ち回ってんな、けど、

……………何だあ、あの傾奇者……………」

「加勢するぞ、ムラアマサ！」

この世界で戦乙女達とやり合うってことは、間違いなく俺達の味方だ！」

「いや……………余計なお節介かもしんねえぞ……………？」

あいつ、桁が違い過ぎる、余裕で全員ぶった切りそうだ」

「ん??」

どっちにしても、だ、ここで手助けした方が後々の交渉に有利だ。

だろ?」

「ああ、だな。

ンじゃ終わっちゃう前に気合い入れて走つか！」

「フツ、ムラアマサ。

俺が誰だか忘れたのか?」

「あん？」

なほれおん・ぼなぼつちよだろ？

ふろーれんつの皇帝の」

「……………俺は、今、とても悲しい……………」

砲兵のアーチャーだ！ 今の俺はな！

任せろ、見えなくともキロ先のミカンにだつて百発百中だ。

距離、方位、風向き、あと大まかな布陣も頼む」

「あつちだ。

敵じゃねえが、おまけがそこにいる、立ちつばで一番動きがすくねえ。

距離は……………つと……………二十六町、と——十間、そんで、」

「……………お前、メートルって知ってるか？」

「夏場の食いもんか？ ここあ冬だぞ！

ンなこと喋ってる場合かよ、なほれおん!？」

下手うちやあつちに当たって大変なことになんだぞ!?  
しやんとしてくれよな、大将」

「……………これがジャポンか……………」。

ん……………? —— つつ!!

ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ!!

そうだ、そうだった!

距離を測る、か!!

礼を言うぜ、ムラアマサ!

今の俺は、アーチャーのサーヴァント! 人理の英霊だ!!

こいつを出すのもうちよい後かと思ってたが、よ」

「ん? 被れってか?」

「切り込み隊長ムラアマサ!

その帽子を被り、観測手を兼任してもらおう!!

今の俺達は英霊だ、なら英霊らしく行こうじゃねえか!!」



「ん……………ああ、なるほどな、なんか繋がってんな。  
正直こんなもんするのは、生まれて初めてだが……………」

「お、お、お、おとおおお!!」

距離が分かるだけかと思いきや、見える、見える、お前さんの視界が俺にもそのま、  
……………は!?!?

な、な、な、何だこのサムウライお嬢オドモアゼルさんは!!!!

人間か!? いや、サーヴァントか!?

段違い、いや別次元すぎるぞ!!」

「あれがほんまものの、侍、ってやつだ」

「あのセイバーより……………上、それも、相当な上。

……………信じ、……………らんねえ……………、いるのかよ、こんな剣士が……………!

……………これがジャポンか……………ツツツ!!

……………。

いける……………な。

例え正面からの力押しでも、あの二人、いや、あの三人と俺達なら……………、女神は間違いなく手を出さない、なら、あっち側の全戦力が集まったとして……………、地の利は圧倒的に不利だとしても、それは……………。

よし！ 見惚れるのは後だ、まずは助太刀と洒落込もう！

ぐずぐずしてたらサムウライお嬢さんマドモアゼルに全員倒されちまう」

「頼むぜ、なぼれおん？」

「任せろ——その期待、百倍にして答えよう!!」

「第六話 彼という剣」

▷ □ 「はかどってますか？」 □ ◁

「……………おめえか」

決戦を翌日に控えたこの日——

シャドウ・ボーダーの屋根の上に二人の姿があった。

沢山のことがあった。

再び巡り会えたことを喜ぶも——

サーヴァントとしてこの地に呼び出された村正に、二人の記憶はなかった。

それなのに、

武蔵の差し料を見る間、腰が寂しいだろうからと差し出したのが、

あの時の刀と同じ銘を持つ、『明神切村正・改』あらため

『気付いたら、いつの間にか出来ちゃってた。』

おめえさんの面見たらピンときたぜ。

ほら、抜いてみな——な、おめえさんに使われたがつてるだろ?』

『凄すぎて私なんかが持つていいか分からない』、そう話す武蔵の手は刀を握りながら震えていた。

どうして、そうなったのか——

ナポレオンへ、ストーリーカーとはなんぞや、という講義が開催された。

場は紛糾する、意見が割れに割れたのだ。

犯罪アウトなのか純愛セーフなのか、どっちなのかと。

五人で話していたはずが、ダヴィンチらカルデアスタッフも加わる大論争に。

名探偵曰く、

『セーフだ、無論だとも。』

何故なら、この世界には二十一世紀のストーリーカー規制法はそもそも存在しないはずだ。

法律そのものが存在しないのであれば、違法行為と認定することはできない。

つまり、ムツシュ・ナポレオンがオフエリア嬢にどんなに醜く言い寄ったとしても——

遺憾ながら、この国、すなわちこの世界では、それを犯罪行為と糾弾することはできない』

名探偵の言は勿論続き、特異点や異聞帯を旅する我々が指針とするべき法とは何か、秩序とは何か、そして正義とは、という大演説に続き、マシユが感動の余り涙ぐみ、村正が大いに頷くというシーンがあつた。

が、  
純愛派筆頭ナポレオン、

『ハハハハハハ！ お前ら全員、俺達の結婚式へご招待だ！ 最前列は、早い者勝ちだぜ？』

と、犯罪派<sup>アウト</sup>を意図せず挑発。

犯罪派武蔵、これにプツン。

『ならそのおち○ち○、私がぶった切ります!!』

劍轟抜刀！ と叫ぶ武蔵を、ダヴィンチを除く全員、死ぬ気で止める。

『ティアマトより怖かったです……………』、とはマシユ。

『頼むから儂オレの刀でんな汚ねえもん斬らねえでくれ……………』、これは村正。

『あのさ……………俺、普通の人間……………』、しかし、誰よりも早くナポレオンを庇ったムニエル。

『ん？ サーヴァントだよ？ どうせ再生できるから問題ないんじゃないかな？』

いや、性欲という因果を斬ればワンチャン再生しないか』、万能の天才は発想が違った。

他にも、

まだまだ沢山のことがあった。

楽しいことも、辛いことも、苦しいことも、悲しいことも————。

沢山の子供達と出会い、そして、別れた————。

それも今日までの話。

明日こそは、決戦。  
勝たなければ、いけない。

「おう、暇つぶしがてらにちいと聞かせろ。

おめえ、前に決めたなぽれおんの策、どう思う？

戦の経験じゃ、なぽれおんや武蔵が上だが、世界を救った経験じゃ、おめえとマシユだ。

言いたいことは全部言ったと思うが、まつ！

確認の意味も込めて、その道の玄人の意見つてのを、頭の悪い偏屈爺にビシイつと頼まあ

鉄を打つ動作とタイミング、生じる音と火花。

何度も何度も叩いているはずなのに、毎回全く同じ現象が繰り返し返されているように映る。

▷ □ 「別にプロとかでは、」 □ ◁

□ 「ないのですが……………」 □

作戦はいたってシンプル。

自他の戦力差、戦場となる城の特異性、

その城主である女王でありこの世界の神、

ナポレオンが提示した策の中から選択したのは――、

『速攻だ。』

玉座の間、それとも謁見の間と呼ぶべきか、とにかく広間が広い城だ。

裏道を使つてそこへ抜ける。

攻められることを全く考えていない、行ける。

そこを戦場にする』

『広さはどれくらいでしょうか？』

『巨人が押しかけて暴れ回ってもなんとかなる程度の広さだ。

でかい、には、でかいんだか、美しい。



我が麗しのヴェルサイユにはちよいと劣るが、ヒュウ、見ものではある』

『うーん、五人で攻めるなら狭い所もありだけど……………、

ナポレオンさんの火砲の範囲制圧力を重視？』

『cast v raiその通りだ、サムウライお嬢さん！

大軍に囲まれても、少女の盾、俺の砲、そして我らの切り込み隊長がいりやなんとかなる。

十人に囲まれるのも、百人に囲まれるのも、まっ！ 大して違いはない!!

とはいうものの、あまりに囲まれすぎると、マスターへのもしもの一発の確率が上がる。

なら俺の砲を有効活用しつつ——、っと何かな、サムウライお嬢さん？』

『……………。』

……………。

……………さっきのやつ最初、も一回お願いします』

『その通りだ、サムウライお嬢さん!!』

『……………、メルシー・ボクー!!  
ありがとうございます

きやく、言っちゃった言っちゃった。

ハイカラなお仏蘭西言っちゃった。

はっ!? いけないわ、心に決めた人がいる人にうつつをぬかしては……………ごめんね  
 ?』

『ど、どど、どうして私に振るのですか……………ええと、そのう……………』

『俺達四人は一丸となって戦う。』

残るサムウライお嬢さん、マドモアゼル あんたは遊兵だ、そしてあんたが俺の作戦の鍵だ。

最優先で、最高速度で、最短ルートで、一秒でも早く、シグルドを撃破してくれ』

『早え話、武蔵に丸投げってか?』

『そうだ。』

最も高い敵殲滅力を持ち、最も高い機動力を持ち、最も高い継続戦闘力を持つ——  
俺達の中の最強戦力、それがあんただ、宮本武蔵。

俺達と一緒に戦うと、あんたの戦闘力が落ちる。

俺達が足を引つ張つちまうんだな、あんたのレベルで戦える奴は誰もいない。  
だから、一人だ。

無論俺達四人、援護はするが、基本的に手は出さない、邪魔だろうからな。

正直、あんたなら戦乙女千人に囲まれても無傷で全滅させちまうだろ？

こつちの最強の駒を最強の状態にして、敵の急所を破壊——すなわちオフエリア  
確保の絶対条件であるシグルドの撃破を遂行する、

これが俺の作戦の基幹だ』

『——、斬れっか、武蔵？』

『ええ、無論』

『待つてください。』

それでは、武蔵さんはシグルドだけでなく、マスターのオフエリアさんとも同時に一

人で戦うことになります。

彼女は、ノウブルカラーの魔眼の持ち主です』

『……………』

『……………』

『……………』

□ 「もしかしなくても、」

□

▷ □ 「魔術の話、分かる人がいない？」

□

◁

『あつ——！！ 通信は今だめでした……………。』

ざっくりですが、他者への強烈な干渉力を持つ魔眼はノウブルカラーとされます。

オフェリアさんの魔眼は、そのランクが宝石、大魔術クラスの魔術でも再現できない  
神秘をシングル・アクション一工程で実行します。

ランク宝石の魔眼といえ、代表的なものはライダー・メデューサの石化の魔眼で  
しょうか。

相手を見ただけで石にするというものです』

『形のない島のゴルゴーン三姉妹末妹の石化か。』

英雄ペルセウスは鏡の盾で頑張ったって話だが、』

『ん？』

見られたら石になるぐらいのことをされるってことよね？

なら何も問題ないわ。

シングルドを斬り、オフェリアさんを気絶させて魔術を使えなくし確保、  
その任務、承りました』

『えれえでかくでるじゃねえか、武蔵』

『……………ほ、本当、ですか？』

『言い出しつぺの俺が言うのもなんだが……………、ハードル高いぞ？』

『お任せあれ。』

私一人でその二人を倒すから、みんなは悪いけど残りを宜しくね」

▷ □ 「流石は武蔵ちゃん、」 □ ◁

□ 「正直、痺れました」 □

「はははっ、そりやな！

儂オレやなぼれおんが言ったところで、馬鹿抜かせド阿呆で終わるだけだしな！

あそこまで言つて、誰にも何も言わせずに全員全部納得させるのは———、」

▷ □ 「宮本武蔵、」 □ ◁

□ 「———ですね！」 □

「はははっ！」

朗らかな笑い声が、鉄が鍛えられる音に乗る。

▷ □ 「村正さん、」 □ ◁

□ 「武蔵ちゃんより、」

▷ □ 「村正さんこそ、大丈夫ですか？」 □ ◁

「……………」。

おめさんには、正直に言っとく。

駄目だ、悪りい、迷惑かける」

『女王は、手を出さない、と？』

『ああ、間違いなく。』

愛するか、殺すか——その二者択一だ。

戦乙女を十人殺そうが何しようが、自分の世界に生きる者、だから愛する。

愛する基準が広すぎて大きすぎて、俺の感性じゃ理解できねえ、紛れなりに神だな。

故に、様子見。

ただし、気をつけるよ。

一線を超えちまったら、全力で殺しにくる。

指鳴らされたら死ぬとかいうレベルじゃねえ、指一本ちいつと動かされただけで、俺達全員アウトだ』

『んー、でも、説得できるのかなあ？

キミの最終目的は、結局のところ、空想樹の破壊でしょ？

それはこの異聞帯の全てを殺してしまう行為。

口先三寸でだまくらかせるような相手じゃないでしょ、間違いなく』

『その通りだ、サムウライお嬢さん』  
best v r a i  
マドモアゼル

『!?!』

も一回お願いしまっす!』

『何度でも言おうとも、



その通りだ、サムウライお嬢さん!!!  
『マドモアゼル』

『メ、メルシー・ボクー!!  
ありがとうございます』

はい!! 一緒に!!』

『メ、Merci beau coup.....』

『あーん、綺麗な発音！

負けたー、くうく悔しーい!!

私の完敗だー.....!!

.....ん？

.....負けた？

.....負けた??

負けた。

——勝負で完敗したのなんて、いつ以来だろ?』

『.....』



かす!!!  
 だめんない!!!  
 しょう……。

!!??!!??!!??

『ごめんなさい、貴女を斬らずしてこの世界から去ること、できなくなっちゃった』

『!? あ……………!?』

『!? う、お……………!?』

『……………おう』

□ 「武蔵ちゃん! お願い! やめて……………!!」 □

▷ □ 「なんでもするから、それだけはダメ……………!!」 □

『もー……! あつははははははは! 本気にしないでよ、みんなっ!!』

冗談に決まってるでしょ、冗談……!!

異国語の発音どっちが綺麗か勝負の決着を、どうして刀で決めますか。

私、そんな野蛮な女の子じゃありません！

そーーという反応されちゃうと、私また今みたいな冗談言っちゃうわよー!!?』

『……………』  
『……………』

▷ □ 『……………』 □ ◁

『えれえ情けねえ顔だな、そこ三人、なんだそりやあ、禪締め直してシャキツとしろっ!!

儂<sup>オレ</sup>らはな、状況によっちゃ、そのカミサマ女をぶちのめすんだぞ、ああん!!

武蔵の殺気浴びたぐれえで動けなくなっただうする？

そいつが武蔵より上行ってたらどうすんだ!?

負けられませんけど、びびっちゃまってやられました、とでも抜かすつもりかツツツ!!!??

キ〇タマ付いてんだろツツ!! 頭の血管ぶっ千切るぐれえ気合ぶっこんどけツツツ

!!』

▷ □ 『!? はい!!!』 □ ◁

『はいっ!!!』

『おう! — うっしやあ!!』

流石だぜ、切り込み隊長、いい一喝だ』

(……………今のつて、突っ込んだじゃダメなところよね、うん……………)

「両方は同時に相手にできねえ、確かにだな。

だから片方だけ叩く、そうだよな。

なほれおんやらほーむずの言う通りだ、カミサマ女とはまず話し合い、つてのが正しい。  
い。

……………。

なあ、この世界つてのは、おめえにはどう見える？  
他にも色々見てきたんだろ？」

□ 「子供達の純粹さを思うと、やり切れないです」

□ 「ただひたすらに悲しいです」

▷ □ 「理屈は分かります、けど納得できません」

□ □  
◁

その答えに、鍛冶匠は鉄を打つことで答えた。

「同じだ、<sup>オレ</sup>儂も、<sup>オレ</sup>オレも。

だからだな、はらわた煮え繰り返ってしようがねえ。

そいつを前にしたら、抑えきれるか………分からねえんだ」

□ 「<sup>オレ</sup>儂と、」

▷ □ 「オレ、ですか？」 □

◁

「おう。

ようやく分かりかけてきたんだがな。  
儂オレに身体貸してるコイツだよ、コイツ。

コイツがとにかくブチ切れまくってやがる——つて風に、儂オレには思えんだ。

コイツがそう思ってるから儂オレもそう思う、んな馬鹿な話じゃねえ。

こちらと捻くれ糞爺だ、あーおうおうそうですかい、だ。

だけどなあ……………」

鉄を鍛える手が、止まった。

「コイツも、おめえも、マシユも、同じ目してやがんだよなあ……………」。

真っ直ぐで、光り輝いて、弱え奴を思いやれる暖かさがあつて、

——背負いすぎてやがる。

死線くぐり抜けたら目なんざ据わるもんだが、んな話じゃねえ。

コイツがいつの時分の奴だか見当つかねえが、少なくともおめえやマシユは、んな重い目をしちやダメなんじゃないやねえのか、つてな……………」

▷ □ 「……………」 □ ◁

「だがなあ……………しなきやなんねえ、背負わなきやなんねえ。」

二つ目なんだろ、ここは？

ンでまだ五つぐれえ残つてんだよな？

一つ目じゃ、ダチもいたんだろ？ 助けてくれた恩人も、いたんだろ？

そいつら全員ぶつ殺しちまったんなら……………、背負つて、生きるしかねえ」

▷ □ 「……………はい」 □ ◁

「なんだが……………」

▷ □ 「……………？」 □ ◁

「濃<sup>オシ</sup>あよ、……………実のところ、諦めてねえんだ」

▷ □ 「……………え？」 □ ◁



「あつちの世界も救つて、こつちの世界も救う——それが、できるはずなんだ」

□ 「いえ、それは、」 □

▷ □ 「……………出来ません」 □ ◁

「そんなうまい話、転がつてるわけがねえ。

できるつてンなら、一つ目でやつてるはずだ、おめえらなら。

他にできることは何もなかったから、おめえ達は殺さざるを得なかった、だろ？」

▷ □ 「……………はい」 □ ◁

「それなんだよ」

▷ □ 「——え？」 □ ◁

「<sup>オレ</sup>儂が斬りてえ業つてのが、まきにそれなんだよ。

<sup>オレ</sup>儂ン認識じゃ、こいつあ力比べ、なんだろ？」

ここの歴史が正しいのか、元の歴史が正しいのか、勝つのは一つ、負ければ消える。元の歴史のおめえらや儂オレからすりや、勝たなきやなんねえ、正さなきやなんねえ、元の世界の連中がもう何十億と死んでんだ、だから——殺さなきや、なんねえ。もし勝つたとして、他の全部を正したとしても、また同じことが起きたらどうする？ 繰り返しじゃねえか。

いつまでたつても、おめえやマシユみてえな若けえ真つ直ぐな連中が、背負うべきじゃねえ重りを引きずりつばなしじゃねえか？

ふざけんじゃ、ねえよ……………!!

そんなの、あつていいわけねえだろうがツツ……………!!

だから、儂は、刀を鍛えてる——あらゆる罪業の元となる大源の、根つこの根つこにある、それを斬るために。

どつちかしか生きられない？ 知るかなもん。

例えそれが世界の理だつてんなら、その理を、オレは斬る。

そのために、儂は、刀を鍛えてんだ。

そこを斬ることさえできるなら、もうこんな争いが起きることはねえ。

どつちかしか生きられないって現実を、変えられるはずなんだ」

鉄が、一つ、強く打たれる。

▷ □ 「……………本当に、できるんですか？」 □ ◁

□ 「村正さんの、その刀なら、」 □

▷ □ 「争いの大元にある業を、斬れるはずだから、」 □ ◁

□ 「この世界を滅ぼさずに、」 □

▷ □ 「元の世界を救う——、」 □ ◁

▷ □ 「それが、可能……………？」 □ ◁

「千子村正——死んだ後も、刀打つてるのはそのためだ。

……………&#x2014;&#x2014;と言いてえんだがなあ……………」

▷ □ 「？」 □ ◁

「なまくら包丁持った武蔵と、なんでも切れる名刀を持った儂オレ、よく切れるのは、どっちだ？」

▷ □ 「……………あ……………！」 □ ◁

「そうよ、例え刀が至ったとしても、使う儂オレが至ってるのか、つて話だよ。刀が出来ても、振れんのか、当てられんのか、斬れんのか、つてことだ」

□ 「なら武蔵ちゃんに、」 □

▷ □ 「……………つて、あ」 □ ◁

「武蔵が斬ろうとしてんのは、おめえの前に立ち塞がる敵全部だ。儂オレの刀が斬るぞと、全く違えとは言いい切れねえが——でも、違う。こいつを武蔵が振っても、どっちつかずで両方駄目になる、間違えなくな」

□ 「村正さんが武蔵ちゃんに剣を習えば、」 □

▷ □ 「行けると思いますが、はい！」

□ ◁

「あ——————ん？」

寝ぼけんな、ぶつ飛ばすぞ、このヤロウっ！

農オシはこれでも刀鍛えんのに忙しいんだよ、クソツタレっ！

こんな出来なのに満足できるわけねえだろうが!!!

人にぶん投げしやがってこんにやろうが。

おめえだ、おめえだよおめえ！

おめえが武蔵から剣を習えばいいんだよ」

□ 「ええええええええええ、」 □

▷ □ 「ええええええええええ!?」 □ ◁

「二刀握つて武蔵みてえに全部が全部出来るようになる必要はねえ。

刀一つで、たった一回だけの一振り——それだけでいい。

まあ……………そういう戦い方じゃねえんだよな、おめえさんの戦いつてのは。

二つの眼でちゃんと見て、しっかりと導いて、支え励まし、共に行く——それが、

おめえさんの戦い方、だろ？

でもなあ、他に頼める奴が誰もいねえ。

それに、今回は……………出来なかったとしても、まだ次がある、違うか？」

□ 「……………!!」 □

▷ □ 「—————!!」 □ ◁

「ま、偏屈爺いの世迷いごとだ。

出来るわけなござねえのに、見当違いの大ホウ信じてるただのど阿呆なだけかも知んねえ。

ただ、もし、万が一、出来んだとしたら……………」

□ 「挑戦する価値は、」 □

▷ □ 「……………きつとある」 □ ◁

「やって、やろうじゃねえか、なあ？」

この世界も、元の世界も—————その他の全ての世界も、全部まとめて救うんだ！

なつてやろう、

——そんな、正義の味方に！」

□ 「……………」 □

「……………」

□ 「……………」は、い？」 □

▷ □ 「……………」正義の、味方？」 □ ◁

「かあああああああああああああああああ！」

何だ何だ何だ何だ!?

何つつつた、何つつた、今、儂オレは一体何つつたああああああああ!?

ド畜生！ 正義の味方あ?? 正義の味方?? 正義の、味方だあああ!?

何、ケツの穴の青臭えガキでもぬかさねえこと、ほざきやがるツ!

コイツか、コイツか！ コイツが儂オレに言わせやがったのかツ!?

間の抜けた面してるだけじゃ飽き足らず、胡散クセエ香具師でも言わねえこと喋らせ

やがって!!」

□ 「でもカツコよかったですよ、正義の味方」 □

▷ □ 「さっきの台詞、なんか決まっちゃいましたし!」 □ ◁

「てええええ………めええええ………ええええ………!」

頭から焔に突っ込んで、刀の材料にしちまうぞ!?

か———!

つたく、ギャーギャー喚く儂がみつともねえ。

うし、仕切り直しだ。

一つ、小話でも頼まあ。

おめえさんが旅した世界の話でもいいし、イカれちまう前の日本の話でもいい」

鉄を鍛える音が、また、小気味良いリズムを作る。

□ 特異点の話をする □

□ 亜種特異点の話をする □



▷ □ 日本の話をする □ ◁

▷ □ 「では、日本の話を。日本は——、」 □ ◁

□ 「平和です」 □

▷ □ 「豊かです」 □ ◁

□ 「エロです」 □

□ 「村正さんが登場するゲームがあります」 □

□ 「二次元に生きています」 □

「いいねえ！ 豊かか。」

あー、言ってたなそいや、このしゃどうぼーだーみたいなカラクリ車があんだろ？」

▷ □ 「車は、大体一家に一台あります」 □ ◁

□ 「少し物が多すぎるかも知れませんが、」 □

▷ □ 「平和ですし、良いところだと思います」 □ ◁

「おおー、言うじゃねえか、物が多すぎる！」

ははっ！ 腹空かせて泣きじやくる赤ん坊をあやせなくて困るのはもうねえってか。そんな日本の礎にちいつとでもなれてたら、文句はねえなあ」

となれば、畳み掛けるには――、

□ □ 政治かな？ 村正さん意外と好きそう

□ □ 刀剣、剣術、剣道。現代の剣の今を伝えよう

□ □ タイガー毒電波を受信！ English Only Go My Way、

オケー!?

▷ □ 春画、そう春画一択！ 現在までの春画の変遷を語る、いや語らして下さい

！ □ □

▷ □ ゲームとか？ スマホゲー、パソゲー、ゲーセン、家庭用、どれにしよう？

□

「……………マジか？」

▷ □ 「マジです」 □ ◁

「大マジか？」

▷ □ 「大マジです！」 □ ◁

「……………おめえ、歳いくつだ？」

あんなもんはガキが見ていいもんじゃねえぞ？」

▷ □ 「(昔の基準なら) もう成人ですので！」 □ ◁

□ 「こう見えて (精神年齢は) 二十歳です！」 □

「その話、ましゆに全部確認取るぞ？」

▷ □ 「ブッハーハーハーハーッ!?」 □ □ ◁

□ 「お代官様、それはあんまりにごぎいます!」 □ □

「ばーたれ。」

あんなもんは一人でこつそり楽しむモンであつて、誰かと語るような代物じゃねえ」

▷ □ □ 「あたっ」 □ □ ◁

□ 「肝に命じます……………」 □ □

こうなれば——!

□ 伝家の宝刀、カルデアあるある小話集、行きます! □

□ 退かぬ、媚びぬ、省みぬ! 春画を押し通す!! □

□ 基本に帰ろう、よし、政治だ □

▷ □ 村正さんが宿つてる、彼が気になる…………… □

□ ◁

□ 言うしかないか……………あの最強セイバー決定トーナメントの真の結末!

□

□ そういえば、村正さんの他に鍛冶匠と呼べる存在を二人知ってる

□

「お」

「やつほー。」

「なーに話してんの？」

「お二人ともこちらだったんですか」

「いやな、こいつがとっておきの面白い話をしてくれてるところだ」

▷ □ 「……………え？」

□ ◁

□ 「その無茶振りは一体!？」 □

「え……………先輩のとっておき、ですか？」

「私、すつごく気になります」

「おー、こいつは期待できるじゃねえか。」

ましゆにも隠してた秘蔵話かあ、さてさて何が飛び出すんだ？」

「じゃ私、みんな呼んできまーつす！」

「あー！ 私もお伴します、武蔵さん！」

▷ □ 「あわわわわわ……………」

□ 「どうしてこうなった、どうして……………！」

□ ◁

集い集まり、宴は始まる。

「よし、先陣は俺が切らしてもらおう！」

これは———栄光と勝利、逆境と逆転、苦悩と決断、そして……………愛の物語だ」

語らい、笑い、共に過ぐす。

「——そうなってしまつては、もう言わざるを得ないではないか、諸君？  
『モリアーティ、お前もか!?』、と!!」

同じものを目指し、同じ時を過ぐす旅人達。

「一つだけ、どーしても一つだけこれだけはつていうのがあるんだよね。

あの映画と本は実は意外に楽しめちゃったけど………これはダメ!

ダヴィンチ丸秘エピソード集みたいなのに纏められてるんだけどさー、本当は違うんだよねー。

仕込んだのは違くて——」

待っているのは、死闘と決戦、血が流れずして終わるはずもない。

「私が戦つた中で一番強い奴は誰か？」

——ん——、選べません！ 多すぎて!!

「ただどね、私が戦った中で、一番長い時間戦ったのは、なら一人います。もーねー、私よく餓死しなかったなって今でも思うもん」

それでも今は、

「実は……………いつかホームズに聞こうかと思つてたことが一つあんだよ。

いつにしよ、いつにしよ、つて先延ばししちゃつててき。

でもなー、これ、ホームズには悪いんだけどさあ……………、

この謎、ホームズお前でも絶対解けないから」

ただ今だけは、

「私の番か、うむ、ついに、ついに私の番が来たか！

ふっふっふっふっふ———！

はっはっはっはっは———！

これは、事件だぞ、お前達！

何故ならば、何故ならばだなあ！



むふふふふふふふ！

この話は、我が、錬金術の大家！ いや、現代魔術における錬金術の頂点を極めた！  
 といつても多分過言ではないと日々隠れてこつそりそうなっておくれと私は一人  
 願つておるのだが！

その我がムジーク家の！ 最大！ 最強！ 至高！ 絶品の！ 魔術刻印!!!

その名も！ 聞いて驚くなよ、腰を抜かすなよ！ 何故なら！ その名前すら本来は  
 言うことを禁じられておるのだ！ そうとも！ 名前を言つてはいけないあの人を真  
 似たんじゃないぞ！ ここは絶対に重要だから決して忘れるんじゃない！ 名前を  
 言つてはいけないあの人の方が、後だ！ きつと!!

本番はここからだからだぞつ！

それこそ！ 『変成鉄腕・極解、鋼鉄鉄器G<sup>ゲ</sup>ムジーク』!! その全てを――、

言えるわけないだろ、バカモンがっ!!!

一族の者でもないお前達に教えてあげると思ったか、バカめが！

んふふふふ、しかし、んふふふふ、私とてTPOを弁えておる大人！

所長たる私の、人間としての、大人としての！ 器と度量の広さをお前達に教えてや  
 ろう！ んふふふふふふふ！

つまりだな、私がこれから！ 特別に！ 特別に!! 特別に!!! お前達に話してやる

のは、その魔術刻印の、」

大切な友との、かけがえのない時間を、

「——それじゃ、長い話を一つ」

心から楽しもう。

「コホン、私の番ですな。

私は、映画の話をさせてください。

今まで見た中で、一番面白かった、ある映画の話です。

その前に………皆さんに聞かなくてはいけないことが、一つだけあります。

Wars or Trek?

またいつか、

こうやってみんなで笑い合える時が来ることを信じて。

▷ □ 話すのは……………、 □ ◁

□ 聖女の話。自らを魔女と殺した人々を守ろうとした守護者の話

□ 皇帝の話。豪華絢爛にして天真爛漫な我が道を征く少女の話

□ 航海士の話。七つの海を股にかける、強敵と財宝を巡る冒険の話。

□ 反逆の騎士の話。世間から怪物と恐れられた者達の奇妙で優しい友情の話

□ 狂戦士と癒し手の話。たった一人で戦争を成す者とそれを根絶しようとする

□ 騎士達と王の話。騎士達が貫いた忠誠と、それに答えた王が掲げた理想の話

□ 賢き王の話。その庇護の元、どんな窮地でも生きることが諦めなかった人々の

話

□ あの人の話。世界を救うため、微笑みながらその命を捧げた勇気ある青年の話



決戦の時、迫る。

(第七話へ続く)

## 第七話 冬の少女は一人想う

女王の城の奥深く、少女は一人想う。

この異聞帯に召喚されるもすぐに捕縛され、行動の自由を大幅に制限されている身ではあるが、激突の時間が迫っていることぐらい感じられる。

二つの陣営、二つの在り方、二つの信念、二つの生き方。

それは決して交わらない。

戦わずして終わることはない。

血が流れ、死が訪れずして決着することはない。

「早かったかな。

もうこの異聞帯が成立するか消滅するかの、決着の時を迎えようとしている。

うーん。

本来なら、そうね、竜殺しの英雄に招かれるように、その花嫁が現界するはずだった。

それが英雄の望みであり、彼女の望みでもあるのだから。どうか、勝算はあるつもりなのよね。

勝てる、見込みはある。

竜殺しの英雄はその花嫁でなければ普通は倒せないといえるけど、あの剣士はすつごく昔に普通を捨ててしまった強さだから。

でも、あいつと戦うことになったら………？

なくはない、勝てるという可能性はゼロじゃないわ。

けれど、花嫁じゃない、つてのは吉と出てくれるのかしら？」

言葉が中断され思考に入る。

感じているのは一つの存在、一つの悪意、一つの終焉。

この異聞帯の状況を鑑みれば現界して当然であるブリュンヒルデ。

大英雄の花嫁がないことから裏付けられる一つの推察。

何よりも、微かに、いやはつきりと感じられる——炎の熱。

勝てるのか、全てはこの質問に尽きる。

しかし、そう叫ぶ自分があるが、そんなことよりも重要なことがあるでしょう、と叫

ぶ自分がいるのも事実。

「……………」

みんなとお喋りしたかったな……………特に、あの人は絶対に。

今回はそんな機会はないみたい。

失礼しちゃうわよね、私に気付かないでこの世界を終わらせちゃうおうとしてるのよ？  
こんな可愛いレディをエスコートしないでほったらかしにしておくなんて、男として  
ありえないんじゃないしら？

むう————、今度会ったらとちめてやるんだからあゝ。

……………怒らない怒らない、お姉ちゃんは怒っちゃダメ。

守ってあげないとね？

この牢を維持できなくなるか、維持している場合じゃなくなれば会えるけど、そんな  
状況っていうのはつまり————」

勝利を、何よりも再会を。

今はまだ祈ることしかできないけれど、巡り会えるという運命の糸はほつれていない  
はずだから。

「汎用人類史の守り手よ、カルデアの者達よ、あなた達の健闘と勝利を祈っているわ。あなた達が守ろうとする明日を、私、見てみたいもの」

「第七話 冬の少女は一人想う」

そして、

戦いの時。



(第八話へ続く)

## 第八話 血戦×決戦

言葉など、もはや何の意味があらうか。

この世界の在り方を善しとするもの。

それに異を唱えるもの、

この世界そのものを認めることができないうもの。

何を語り、何をぶつけ、何を話そうとも、

分かり合えることは、決してない。

結局はそう——どちらが強いのか。

武力、戦力、魔力——何よりも、

自分の信念を押し通す心の強さと、隣に立つ仲間との信頼という絆の強さ。

それが、どちらが強いのかということなのだから。

玉座に座るのはこの城の女王にして、この異聞帯を統べる神。

慈愛に満ちた優しい瞳は、その眼前で刃を構える両陣営へ等しく向けられている。

張り詰められた空気は、沈黙を硬く守る。

この静寂が破られれば、二度と後戻りのできない血みどろの殺し合いが始まってしま  
うと知っているからだ。

展開するのは、ワルクューレの大軍勢。

盾を構え槍を携え、広間の上方を埋め尽くすほどの部隊を展開する。

彼女らの正面に立つのは、カルデアの者達。

戦乙女全騎の殺意を真っ向より受け止め、それ以上の闘志を燃やす。

大盾を、大砲を、心中の刃を握りしめ——その時を待つ。

その中を、一人、武蔵は歩く。

腰に差す四刀を抜かぬまま、一つ、また一つと、歩を進める。

人域を突破するその剣の位。

ただ歩いているだけで、五大明王最強の一尊を背後に従えているかのような剣気を放つ。

戦乙女達、これを見逃す。

これまでのカルデア側との各地の戦闘経験・記録によつて、自分達では宮本武蔵には何があつても歯が立たないと判断している。

もちろんだからといって戦うのを放棄するような戦乙女達ではないが、それが女王の命令とあれば別。

この剣士と戦えるのは——この騎士しかない。

「……………」。

来たか。

今回は、全力だ」

赤瞳より殺意と戦意の焰を滾らせながら、最強の魔剣の主が最強の双剣使いと対峙す

る。

その後ろに控える魔術師、眼帯を外し——魔眼解放。

「——霊基強制再臨・最終限定解除。

立ちほだかる敵のすべてを討ち滅ぼしなさい、我が騎士」

血戦が、始まった。

「第八話 血戦×決戦」

ワルキューレ達が行軍を開始する。

「目標捕捉」「目標捕捉」「目標捕捉」

- 「全騎、戦闘状態へ移行」「全騎、戦闘状態へ移行」「全騎、戦闘状態へ移行」
- 「敵戦力、セイバー二騎」「アーチャー、シールド」「そしてそのマスター」
- 「アーチャー、ナポレオン」「アーチャー、ナポレオン」「アーチャー、ナポレオン」
- 「砲撃は脅威」「直撃は避けること」「密集を避け散開しながら攻撃」
- 「単純な直線的射線だけじゃない」「散弾や小型連射弾もある」「注意せよ」
- 「砲も厄介だけど、」「速い」「機動力は非常に高い」
- 「脅威度、非常に高」「脅威確認」「脅威確認」
- 「手強い」「強敵だよ」「けど私達なら勝てる」
- 「撃破せよ」「撃破せよ」「撃破せよ」
- 「シールド、マシユ・キリエライト」「シールド確認」「シールド確認」
- 「見事な盾ね」「私達のものには劣るけど」「でも凄いわ」
- 「豊富な戦闘経験」「修羅場を潜り抜けた数は私達以上かもしれない」「その推論肯定を保留」
- 「マスターの死守を第一優先目標と推定」「その推定を断定」「その断定を肯定」
- 「彼女を倒さずして、」「マスターへの攻撃は非常に困難」「ほぼゼロに近い可能性」
- 「撃破せよ」「撃破せよ」「撃破せよ」
- 「セイバー、千子村正」「セイバー、千子村正」「セイバー、……………村正」

「刀剣を複数所持」「刀を切り替えながら戦闘」「その数は不明、弾切れは無いと推定」  
「単体攻撃能力しか保有せず」「上空への有効な攻撃手段を保有せず」「地上での剣による攻撃」

「攻撃範囲内に留まってはダメよ」「高高度からの一撃離脱」「複数機での同時連携必須」  
「撃破せよ」「撃破せよ」「撃破せよ……………」

「セイバー、宮本武蔵」

「強い」「強すぎる」「私達では歯が立たない」

「お姉様の想い人に任せましょう」「それしかないわ」「ええ」

「敵マスター」「敵マスター確認」「敵マスター確認」

「オフェリアに遠く及ばない」「そもそも魔術師なの？」「魔力を全く感知できず」

「ただの人間ね」「貧相な」「ただの人」

「私達が迎える価値もないわ」「その判断を肯定」「判断肯定」

「有効な支援攻撃は皆無と断定」「回復補助も微小と裁定」「令呪だけと推定」

「撃破のためにはシールドの排除が必須」「しかし撃破せよ」「撃破せよ」

「全騎各騎へ通達」「全騎各騎へ通達」「全騎各騎へ通達」

「我らが父のために、」「我らが母のために、」「我らが女王のために、」

「勝利を我らに」「勝利を我らに」「勝利を我らに」

「持ちうる全ての力を使い、」「持ちうる全ての力を使い、」「持ちうる全ての力を使い、」「カルデアを殲滅せよ!」「カルデアを殲滅せよ!」「カルデアを殲滅せよ!」「カルデアを殲滅せよ!」「カルデアを殲滅せよ!」「カルデアを殲滅せよ!」「カルデアを殲滅せよ!」「カルデアを殲滅せよ!」「カルデアを殲滅せよ!」「カルデアを殲滅せよ!」「カルデアを殲滅せよ!」「カルデアを殲滅せよ!」「カルデアを殲滅せよ!」「カルデアを殲滅せよ!」「カルデアを殲滅せよ!」

空を疾走する戦乙女達。

その光り輝く槍を手に、勝利と栄光を掴み取るため全騎一斉に攻撃を開始!

「くう——っ!?!」

膨大な数による攻撃の密度と総数は、まるで熱帯雨林に降るスコールのように激しい。

雪崩となって押し潰すように、乱れ飛び交う光の攻撃線。

その一つ一つどれを取っても、終末の黄昏を戦い抜くに相応しい威力が込められている。

圧倒的戦力数による圧倒的殲滅力——だが、



「負けませんっつ!!」

彼女がいる。

その大盾で、自分達に襲来するありとあらゆる攻撃を受け止める。

盾とは本来一方向しか守れないはず、しかし——!

「先輩はあなた達のいう通り、魔術師でも、剣士でも、医師でも、技師でもありません！  
それでも——!」

修羅場と死戦を潜り抜け、絶人の域に達しているのは何も武蔵だけの専売特許ではない。  
い。

マシユの盾さばき、何よりも攻撃の見切りと読み、仲間へ降り注ぐありとあらゆる攻撃全てを自分が受け止めるといふ決意から導かれるその戦技、まるでここに城があるかのように防ぎ切る。

戦乙女全騎の圧倒的物量による圧撃とて、

マシユ・キリエライトという盾を貫くことはできない!

「先輩は——、最高のマスターです!!」

この盾こそは、主人を守り、人理を守る守護の盾。

例え世界を焼き尽くす業火とて、決して滅ぼすことはできない。

——彼女が何度でも立ち上がり、守り切るのだから!

「いいたんかだ!」

その氣勢、指揮官として鼻が高い。

ならこつちもいとこ見せて、オフェリアをさらに惚れさせちまうとするかツツ!」

砲口から一つの魔力弾が発射されるも、ワルキューレ達の回避行動が成

「——キヤア!?!」——「つうう!?!」——「なっ——!?!」——「キヤア!?!」

「——わつつ!!」——「そ、んな——!」——「ガハツつつ!!」——「——く、グウ!」

空中で爆発。

硬化化した魔力の塊が周囲へ飛び散り、砲撃を回避したはずの戦乙女達を切り裂いた。

「ハハハハハハハハハハハハハハハハ！」

魔力がある限り弾切れの心配がねえってのはありがてえが、流星は俺！

地对空砲をこうも見事に決めちまうとはね！」

「あんな使い方もあるのね」「初めてみるわ」「可能性の英霊」

「悪いが、どんどん行くぞえー！ー！ー！っ!!」

爆裂する弾、弾、弾弾弾弾！

衝撃波と破片が、戦乙女達だけのものだった上方という空間を蹂躪する。

ナポレオンの正確無比な戦術眼により導かれる砲撃のコースとタイミングは、いかな大勢の戦乙女達の統一思考として読みきれない。

加え！

「——おおつと！」

速い。

この英霊、ワルキューレよりも素早いのだ。

砲撃を中断させるべく空駆ける戦乙女達の槍撃を、無傷でとはいえないが、一人でさばききつている。

それも戦史を紐解けば納得できようか。

ナポレオンの軍略で重要な位置を占めたのが、砲兵という兵種。

相手の急所を見定め、砲を移動させ、その砲撃で敵を沈黙させる。

砲兵による機動戦こそが、ナポレオン・ボナパルトの真骨頂。

「悪いが、我が軍団を相手にするには——ちつと少なすぎるんじゃないやねえか？」

血が乱れ飛ぶ戦場にあつて——

ただ一人、戦わない者がいた。

千子村正、未だ刀を一本も喚ばず握らず。

自分を貫こうとする戦乙女達の槍を躲し、さばき、前に進む。

しかし、攻撃は確実に当たっているし削っている。

上半身の赤のシミは時が経つにつれ数を増やして大きく広がり、その足跡を流れ落ちた血が彩る。

無言を貫いていたが、ようやく口を開く。

「よお」

「……………」

「こんな形で再会しちまうとはなあ……………」

因果なものだ」

「……………どうして戦わないの?」

全身を削られながらも、ただ防御に徹している。

「その前に、おめえさんに挨拶しとこうと思つてな」

流血や激痛に苛まれているはずだが、眉一つ、顔色一つ変えない。  
だからどうしたといわんばかりに、己の意思を貫き通す。

「私は退かない。

私達は退かない。

それが私達という存在。

だから、」

爆風が、二人の間を吹き抜ける

「戦つて、村正。

私達にはもう、それしかないのだから」

その因果に、鍛治匠は強く拳を握るしかない。

「…………やるしか、ねえか」

邂逅は終わり、逃れられぬ戦いが始まる。

決意が、己の心鉄に火を灯す。

「……………悪りいが、借りつぞ」

そして、この男は誰もが信じられないような言葉を口にした。

「……………体は剣で出来ている」

「——ええっ!!?」

▷ □ □ 「——日本語!」 □ ◁

□ 「英語じゃない!」

□

「血潮は鉄で、心は硝子。

幾たびの戦場を越えて不敗」

「恐らくこれは、宝具でも固有結界でもありません!

自らがサーヴァントとして持つスキルに、何らかの力を加えて展開しようとしている模様!

まさか………村正さんの肉体は、エミヤさんの大魔術の縁者!?

それとも英霊化する前のエミヤさんそのもの!?

「ただの一度の敗走もなく、ただの一度の勝利もなし。

担い手はここに独り、剣の丘で鉄を鍛つ」

前進を開始し、何らかの敵対行動を取ろうとしている村正を止めるべく、ワルキューレ達が殺到。



しかし、ナポレオンの砲口がそれに待ったをかける！

「援護は任せろ、切り込み隊長！

何をしようとしているかは知らんが、一発でかいのをぶちかましてやれ!!」

戦乙女達に切り刻まれ、全身から血を流しながらも、

——詠唱が終了する。

「ならば我が生涯に意味は不要ず。

この体は、『無限の剣で出来ていた』」

しかし、外界を分かつ炎は走らず、冬の城を心象風景が塗り潰すこともない。  
あるのはただ、

「かハアツ!?!」——「!?!?」——「あ——ハアツ!?!」——「ツツ!?!」

「——キャッツ?!」——ア……………カ、ゴ、「ウワ、ア

上から落下した剣の雨に、串刺しにされている戦乙女達の姿。

「スキル陣地作成!

村正さんはサーヴァントとして刀剣を作成する工房を持ちます!

あの詠唱節を加えることで、工房の中から刀剣を保管する『蔵』を展開したんです!

あの刀は、エミヤさんのように飛ばすことはできないはず。

ですが呼び寄せる場所まで落下させれば、ワルキューレ達へダメージを与えることは可能です!!」

それは、お世辞にも無限とはいえない有限の剣製。

およそ半径七メートルほどの範囲内に、村正が作り呼び寄せた大量の刀剣が刺さっている。

己でない己が持つ手札を奇手へと変え、戦場へ叩きつける。

死亡したワルキューレ達が光に消えていく中、

村正、一振りの刀を抜き放ち——吼える。

「いいかおめえら、一度しか言わねえから全員耳の穴かっぽじって聞きやがれ、

——テメエら全員そこをどけ、用があるのはテメエらじゃねえ」

疾走する——！

冬の城を、一人の刀鍛冶が修羅となつて駆け抜ける！

「どけええええええええええエエエエエエエエエエエエツツツ！！」

特攻としか形容できないその勢い！

ただ一人でも前へ前へと突っ走る！

させまいと戦乙女達、迎撃する人数を増やして迎え撃つ。

剣閃が走り、血煙が吹き上がる。

村正の身体を何度も何度も戦乙女達の槍が傷つけるも、信念、ただその信念一つだけで突き進む。

ただ前へ、もつと前へ、さらなる前へ！

一度火がついてしまったこの男、止めることはもはや何者にもできない。己の刃を手に己が進むべき成すべき道を切り開く！

「ムラアマサ！ 突っ込みすぎだ！

いくら切り込み隊長とはいえ突出しすぎてるぞ！

無謀な特攻はやめとけとあれほど言っただろう!!」

「村正さん、心中お察ししますが、今は退いてくださいー！」

「ああん？ アホ抜かせ。

退けるわけ——ないだろ」

血にまみれながらも剣を振るう勢いは決して衰えることがない。

いや、一步また一步と進む度に己の激情全てを乗せて叩き込まれる一刀は力を増しているー！

「女の人に手を上げるのは趣味じゃない、けどさ………」

この血戦が始まる前に、交わされた言葉があった。

『それがこの厳しき世界で生きるということ。

汎人類史のお前達に口を出す謂れはない』

その言葉に——心が、信念が、爆発。

「てめえの自分勝手な正義を振りかざして子供達を殺しおきながら、

そのどこが悪いと平気な顔してる奴を前に、誰が引き下がれるっていうんだ!!」

犠牲を容認しそれを最小限に抑えることを第一に考える英霊ならば、女王の言葉に異論は挟まず納得しよう。

しかし、万人を救う何者かになりたいと願う青年にとって、その言葉は到底納得できるものではない。

「あんた神だろ!? 神サマなんだろ!? 神サマなんだよな!?

変えちまえよ、こんな世界！

変えてみるよ、誰もがちゃんと生きていける世界へ！！

変えられるはずだろ、誰もが最後まで自分の意志で生きていける世界に！！

神サマだったら、変えなきやダメだろこんな世界！！

それが、できないってんなら、あんたは神じゃない。

そんな偽物、ぶっ飛ばさないわけにはいかないだろうが！！」

それは絶対の宣戦布告。

ワルキューレ達、女王への敵意をむき出し未だ前進を続ける村正を優先撃破目標とする。

「ふふふ、ここまで跳ねっ返りが強いか。

愛いやつ、愛いやつ。

手の掛かる子ほど、可愛さが増す。

見えておらぬが故に青臭い。

見た上でそれでも星を掴もうとする。

よいよい、よいよい。

どちらへ転ぼうか。

そんなお前も愛そうか」

女王は、動じず。

「マスター、このままじゃ——っ！」

□ □ 村正を援護する

□ □ この隙にワルキューレを一人でも多く倒す

▷ □ □ 村正と一緒に突撃する

□ □ □ □  
◁

「先パ、いいいいいいいいいいいい!!」

止まる、その全力ダツシユに。

この場にいる中で、正真正銘ただの一般人。

それでいてカルデア側全サーヴァントのマスター。

いふなれば、それは死点。

突かれれば必ず負けるといふ決定点。

チェスや将棋でいえば、キングがナイトやビショップの守る自陣から抜け出し、最前線のポーンへと走る行為。

そんな悪手を見逃してくれるほど、彼女達は甘くない。

「同位体、顕現開始」「同位体、顕現開始」「同位体、顕現開始」

戦乙女達が空中に輪を描いて集結する。

大神より授かりし槍が大いなる光に包まれていく。

「同期開始、照準完了」「同期開始、照準完了」「同期開始、照準完了」

女王への悪意を向けるセイバーと、その元に走るマスター。

双方共にこの一投にて殺しきらんと戦乙女達が——真名を解放する!!



「ラグナロク・リーヴスラシル終末幻想・少女降臨!!」 「ラグナロク・リーヴスラシル終末幻想・少女降臨!!」 「ラグナロク・リーヴスラシル終末幻想・少女降臨!!」

一斉に投擲された光の槍。

それが一本の巨大な槍となつて襲いかかる!

しかし!

チエスも将棋も、王キングが動けば——、

「真名、凍結展開—— 『モールド・キヤメロットいまは脆き夢想の城』 つ!!」

戦局が動く!

「ぐぐうううう————ツツ!!」

マスターを追い越し村正の前へと躍り出たマシユ、

己が持つ宝具を展開、投擲された光の槍をその城壁で受け止める!

身体の芯まで慄わすその衝撃。

けれど、彼女の盾は、動くことあらずそのままに立ち続ける！

「同位体顕現数増加を承認」「同位体顕現数増加を承認」「同位体顕現数増加を承認」

カルデアが相手にしているのは、ワルキューレではない。

大軍のワルキューレ達。

この機に死点を破壊しきるために、大量のワルキューレ達が天輪に加わっていく。

「追加同位体との同期開始」「追加同位体との同期開始」「追加同位体との同期開始」

「全照準完了、真名解放せよ！」「全照準完了、真名解放して！」「全照準完了、真名を解放！」

さらなる大量の光の槍が、夢想の城へと投げつけられる！！

「誰か忘れちゃいないか？」

アルク・ドゥ・トリオンフ・ドゥ・レトワール  
『凱旋を高らかに告げる虹弓』 ツツ！！

宝具を放つため空中で静止していたワルキューレ達を、ナポレオンの虹が撃ち抜く!!

「ヒュウ、宝具合戦に横槍を入れるのは無粋の極みだが、悪いなこれも戦争だね。

……………流石は統率個体だな、致命傷にはまだ足らないか」

▷ □ 「ナイス宝具、二人とも！」 □ ◁

□ 「サンキュー、マシユ、ナポレオン！」 □

□ 「愛してる、マシユ！」 □

□ 「結婚しよう、マシユ！」 □

押し上げた戦線に、四人が集まる。

リスクの高い強引な手ではあったが、押し通すことに成功した。

「マスターの指揮官突撃か！」

ハハハハハ！ こっちまで熱くさせてくれるじゃねえか！

ここぞつて時に指揮官自ら突撃するのは戦の常道だが、いい思い切りだ!!

勲章ものだけ、新兵!!」

「宝具を展開し、敵宝具を受け止めましたが、損傷想定範囲内。  
マシユ・キリエライト、問題ありません」

「おめえら……………」

▷ □ 「勝つ時は、みんな一緒です」

□ 「二人でいいカツコするなんてずるいですよ」

□ 「ピンタ一発入れたいのは、村正さんだけじゃないです」

□ □ □ ◁

「……………おう、分かった。」

んじやいつちよ、儂オレら四人で派手にかますかツツ!!」

戦局が動き出す。

もう一つ、戦いが繰り広げられていた。

いかな超常の存在たるサーヴァントであろうと、この二人の剣戟空間に入り込むことはできない。

片や、宮本武蔵、日ノ本最強の二刀使い。

片や、シグルド、頂点たる魔剣を操る竜殺しの大英雄。

全ての限定を解除され、霊基最高状態であるシグルド、力・速度・耐久性・魔力、戦闘に必要な各項目が最高の状態。

そして何よりこれは一対一ではない、一対二。

シグルドの背後には、遷延の魔眼を全開にするオフエリア・ファムルソローネがいる。

二人の剣士の再戦にして最終戦、本来ならば魔眼合戦となるはずであった。

武蔵の魔眼は天眼。

それは目的達成の手段をただ一つだけに絞る力。

天眼が見定めれば、無数の可能性の中からたった一つの最適解を選び攻撃することができる。

武蔵が天眼の魔眼を使うことで、武蔵の攻撃はたった一つしか存在しない、相手を斬るための最適解となり、その他全ての可能性を捨てることができる。

オフエリアの魔眼は遷延。

それは発生する未来を見るだけでなく、その未来が到来するのを留める魔眼。

発生確率が少ない未来は見出すのが難しいし、留めておくことも難しいが、相手が望む、相手に有利な事象を、先延ばしすることができる。

天眼と遷延、この二つの魔眼がぶつかればどうなるか？

天眼が攻撃点を見定めれば、武蔵の行動はただ一つの最適解となる。

このため、例え遷延の魔眼でも他の可能性を見出すことができず不発となる。

ところがオフエリアからすれば、『武蔵が天眼を使う』というのは武蔵が取る行動の可能性の一つ。

故に、天眼を使う可能性はピン留めすることができなのだ。

天眼の使用を抑制・または延滞できるのであれば、武蔵は天眼が導く最適解の攻撃が  
できなくなる。

準最適解の攻撃ができたとしても、相手はシングルド、魔剣グラムを持つ大英雄、それが  
通じる相手なのかという問題が出てくる。

つまり、これは早打ち勝負。

武蔵が天眼で見定め最適行動を取るのが早いのか、  
オフエリアが遷延で留めて最適動作をさせないか。

これは一対一の戦いではない、一対二なのだ。

マスターが付いているから一対二という単純なものではない。

オフエリア・ファムルソローネは宮本武蔵を殺し得る存在である——だからこ  
そ、この勝負は一対二となる。

そう、魔眼合戦となる

は。ず。で。あ。っ。た。

シグルドの世界が、城の中に出ていた。

靈基最終段階での全方位殲滅投擲攻撃。

乗る魔力は猛々しく、打ち出される投射速度は視認など欠片も許さない。  
全ての短剣の全動作を見切ることなど、一体誰ができるのだというのか？

世界、そう称する他はないか。

嵐と呼ぶには、激しすぎる。

豪雨雷鳴が奏でていい音量は大きく突破している。

結界と呼ぶには、この絶人の剣士の技量を過小評価してはいないだろうか。

空間そのもの全体全域を行き交うように短剣の刃の軌跡が埋め尽くしているのだ。  
埋めるだけではない、切断して行く。

例え竜種がいたとしても、五秒と持たせず塵とする——それほどの殺意と凄みと



技量が疾駆する短剣一本一本に込められている。

それだけに終わらない、オフエリアが武蔵を見るための経路も確保している。

その視線の経路とタイミングを武蔵に読まれないように、短剣を散らしながら飛ばしているという用意周到っぷり。

賞賛するしかないこの投擲術の冴え。

刃嵐、刃獄——いやそれよりも、シグルドの投擲殲滅世界、刃界とすべきか。

焰をはき散らす魔剣の一閃が、世界を割る。

それはシグルド全力の斬撃でありながら、このシグルドによる真の一撃。

グラムが秘める太陽を、このシグルドの焰が侵食することで、破壊力が更なる天井まで上昇、世界が悲鳴を上げているのだ。

この世界を統べる女王の体内ともいえる城内ではある、すぐ修復されるが……………、

再度、魔剣が通り過ぎた軌跡にヒビ割れのような赤黒い爪痕が残る。

空位に達した剣士が最高の魔剣で放つ絶閃。

加え、投擲され走り続ける短剣達が織り成す刃界。

「……………」

また、血が上った。

初めの血はとうの昔に床に流れ落ちている。

吹き上がった血流は三秒と持たず短剣によってかき消される。

刃は止まらない、敵対者の命を破滅させるまでは決して止まることはない。

刃界にあつて、剣と剣が鳴り散る音は途切れない。

加え刃と刃の衝突に際し生じる火花閃光が、瞬間瞬間、まるで太陽の爆発のような眩しさを放つ。

だがそれがあるということは、魔剣の敵対者はまだ死していないということ。

振り払われた剣が、肉を裂いた。

切り返した刃が、さらなる血肉を吸う。

激痛、だが痛みにも気を取られている暇はどこにもない。

「ツツツ!!」

嗚呼、またしても、血が吹き上がった。

剣でつけられた恥辱に心煮え繰り返る時間もない。

動き続けなければ振り続けなければ、物言わぬ骸となるのは自分なのだから。

この日最高の斬光が、一際強く煌めく。

当然続くのは、

「!？」

間欠泉のごとく噴出する鮮血と、悲鳴上げることままならない激痛、そして、

崩れた態勢へと繰り出される、勝負決する一撃。

武蔵対シグルドとオフエリア、この戦い、

「ガハアツツツ!!」

「シグルド!」

——武蔵が圧倒していた。

シグルド、半死半生の状態。

鎧はズタズタに斬り裂かれ、その五体、無傷な箇所を探す方が難しい。

優秀な魔術師であるオフエリアからの魔力供給・治療のサポートがなければ既に地面に横たわっていた。

武蔵、ほぼ無傷。

かすり傷はそれこそ無数にあるが、しかし、食らったといえる直撃は未だもらっていない。

(ありえない、ありえない、ありえない、ありえない！)

何よこのセイバー!!

剣の技量という一点において、軽く神域まで行つてそうじゃない!?)

『武蔵非名人説、つてのがある』

(この化け物のどこが非名人なのよ、ヒナコ!?)

こんな化け物より強い剣士なんて、いちやだめでしょう!?) 上泉信綱!?) 沖田総司!?)

武蔵一人を止めるために、クリプター<sup>私</sup>が二人以上でかからなきゃダメじゃない!!)

この勝負がこうも一方的になってしまったのは、この戦いが魔眼合戦ではないからだ。

武蔵が斬つた者の中に、

柳生宗矩という剣士がいた。

江戸における柳生新陰流、通称江戸柳生の開祖であり、

武蔵が五輪書を書いたように、宗矩は兵法家伝書を書いた。

日ノ本で一番出世した剣豪としても知られており、

政治家としての側面を描かれることが多いが、れっきとした剣士である。

その柳生新陰流の中に、水月という教えがある。

それは、一つの問いかけから始まる。

『夜、月を写す水がある。

その水の心境やいかに？』

水は月を写したくて写しているのではない。

写す意図があつて写しているのでもない。

ただ写すのだ。

水は月をただ写すから、その水面に月が写るのである。

そこに水の意図や意思や願望は全くなく、写すのに必要な時間遅延もないとされる。

月が変化すればどうなるだろうか？

水はただ写すが故に、水面の月は既に変化し終わっているのだ。

さてこの水とは何か？

明鏡止水の『水』である。

自らが心中にはる水面に相手の意図を写し取る。

水が月を写すように、相手の心をただ写す。

月の変化を水がただ写すように、相手の変化をただ写す。

さすればその変化に応じ、相手の打とう打とうの「う」を、斬ろう斬ろうの「き」をただ打つことができる。

傍目からみれば、信じられないような反応速度で繰り出される的確極まるカウンター、と見えようか。

相手の機先を完璧に制するこの術技、流派によっては先々の先としているし、五輪書では枕をおさえると記している。

この水月の教えから導かれる術技を、柳生新陰流では水月移写と呼ぶ。

武蔵は斬った、

この水月移写を極めた宗矩を。

武蔵、その時の心境をこう述べている。

『貴殿の水月を破るには、神域に入る他なく。

すべての読み合いの先の先——

たった一つの『当たり』を見いだす。

——即ち、決して砕けぬ天元を叩つ斬る』

こうして武蔵は、己の太刀の奥義である伊舎那大天象を開眼した。

ところが、ここで一言及されていないことがある。

この時、武蔵は天眼を捨てた、いや捨てねばならなかった、正しくは自然に捨ててい



た。

宗矩を斬るため、武蔵は一つ上の位へ行かなければならなかった。

しかし、例えそこに行つたとしても、見よう見よう、斬ろう斬ろうとして攻撃していったのでは、宗矩に斬られていた。

宗矩の剣域の高さは武蔵も認めるところ。

そう、武蔵を追つて宗矩も上へ至る可能性があつたのだ。

例えその位に到達していても、見よう見よう、斬ろう斬ろうとしていたのでは、追つて達した宗矩に写し取られて、見ようの「み」、斬ろうの「き」で両拳を斬り飛ばされ、首を刎ねられていた。

天眼でそこを見よう見よう、そしてそこを斬ろう斬ろうとしていたのでは、

—— 斬られていたのは、武蔵であつたのかもしれない。

武蔵は宗矩を斬つた時、天眼を捨てていた。

捨てたというより、自分にはもう無駄なものだと自然に削り落としていたのだ。

天眼を使わずとも、天眼が見定める天元を斬つたのだ。

天眼が導くのは、最適解。

相手を殺す、相手を斬るという無駄が絶無の正解動作。だがそれは、未熟者だから正解が分からないといえる。

だから捨てるでも問題はない。

全て極まった究極の剣士であれば、全ての動作は最適解になっている。

天眼で見ずとも、自然に「そこ」を斬っている。

ただ斬るといふ何気ない動作が、天眼が導き出す最適動作と全く同じになる。

そう、水が月をただ写すように、武蔵がただ斬れば、そこは天元斬れている。

戦った宗矩から言葉なく刀で教えられた、武蔵流の水月。

武蔵の動作は既に、全てが最適解になってしまっているのだ。

その武蔵を、遷延の魔眼で見た時のオフィリア・ファムルソーネの驚愕を何とすれば表せるのだろうか？

この戦い、初手から異次元だった。

武蔵、抜き打ちの一刀でオフェリアの魔眼の視線を斬った。

英霊や神域の存在に日頃接しているとはいえ、刀剣の一閃で魔眼の視線が斬られるとは理解に苦しむ事態。

その勝負、最初は拮抗していた。

武蔵がオフェリアの魔眼の視線を斬りながら戦っていたからだ。

そして気付く、シグルドが窮屈そうに戦っていると。

オフェリアの魔眼と自分の剣を共生させながら戦っていたのだが、武蔵の剣にはそれが歪みとなって写った。

相手を見ただけで石にしてしまえば、それだけで勝負は決する、魔眼を決めるために剣を振るうはず。

ところがシグルドの剣はそうは語っていないなかった、武蔵には普通に戦っているように写った。

そしてシグルドが魔眼を考慮して戦っているとは、シグルドから見てもオフェリアの魔眼は有効なものはず。

なればと洞察。

魔眼は勝負が決するほどではないが有利を取れる。

相手の行動を低下させるか抑制させられ、有利状態をとれるもの——だろうか、と。

魔眼についてあたりをつけた武蔵、何とオフエリアの魔眼に全身を晒した。

どうだ見てごらんなさいよと言わんばかりに、ずいとその視線を全身に浴びた。

武蔵を見たオフエリア、全身の血液が音を立てて凍りついた。

天眼を削り落とした武蔵、全ての動作が最適解であるが故に、可能性は一つしかない。その遷延の魔眼を持つてしても、何の未来も可能性も、写らなかつたのだ。

異常すぎる現実。

武蔵を万華鏡で見てもみれば、鏡には何も写らず、ただ武蔵一人だけがいるというありえない事態。

だが——、

それは、読める。

敵のあらゆる動作が最適解であるならば、こちらの攻撃にどう反撃するかは読めるはず。

敵の反撃は最適であるから隙をつくのは難しいだろうが、その一手を読めれば――

「がアアツツツ!？」

その結果が、これ。

シグルドと武蔵、剣境に差がある。

シグルドが想定する最適動作と、武蔵が実際に取る最適解にズレがある。

だが、

オフェリアの魔眼とは一種の未来視である。

武蔵の可能性が全く一つだけしかないが故に、見えるのだ、武蔵の未来が。

時間にしておよそ一秒、二秒には程遠い一秒であるが、その未来は確実、違えることはない。

ならば！ シグルドとのパスを強化し、自分が見せる一秒後の武蔵を遅延ロスなく伝えれば――、

シグルドほどの剣士であれば、武蔵が取る動作だけでなく、二刀の軌道・速度・機・その重さ、およそ斬り合いに必要な全ての項目が分かる。

そこをつけば――！

「――ツアアアアアアアアアアアツツ!!」

それで、この惨状。

分かっているはずなのに、知っているはずなのに、喰らわざるを得ない。それこそ神速という速度、神域という精妙さ、神斬という斬撃。

相手に自分の全てを晒しても、何もさせずに斬り倒す――それが、武蔵が今いる位。

シグルドの刃界にいながらも、天元の華は、美しく咲く。

唯一、威力。

破壊力という点ではシグルドの魔剣が上をいつている。

だが、衝突点をつくるのではなく軌道を逸らす、運足の妙でかわす——武蔵の剣が上をいつてしまうのだ。

宝具に逆転の可能性をかけてみても、両者互いの刃の届く範囲内にいる。

起動できる隙がないし、距離を取ろうにもぴったりついてくる。

シグルドとオフエリアには何の瑕疵もない。

シグルドほどの強さを誇るセイバーは数えるほどしかなく、支援するマスターとしてもオフエリアは唯一無二の魔眼を持つ高水準の魔術師。

この宮本武蔵が異常すぎた。

英雄がその花嫁と睦みあっている間、

武蔵は戦っていた、自分より強い相手と戦っていた、そしてその強敵達を自分で剣で叩き斬っていた。

その戦闘の生を振り返れば、弱い相手など一人もいなかった、いや、自分より強い相

手ばかりだった。

戦闘経験の量だけでなく質——自分より強い相手に勝利することを幾度となく繰り返す、これはどんな英雄や神々ですら持ち得ない、この宮本武蔵の最強たる因子。

(負けない……………負けられない……………負けることは許されない……………!!)

全てが限界を超えてフル回転している。

自分もシグルドも、最善を超える最善の戦いをしている。

それなのに、嗚呼、それなのに——!

(私は、どうしても負けるわけにはいかないのっ!!)

「ガアアアアアアハアアアアアツツ……………ツツツ!!?」

特大の血柱が天へと伸びる。

致命傷、心臓の霊核に決して無視できるわけもない大きさの斬線が走った。

武蔵の二刀が首と心臓を破壊すべく——!





「えっ?」

特大の血柱、しかも二つ。

武蔵の二刀、まるで荒れ狂う竜の尾のように踊り舞ったそれはシグルドの刃界を斬り破り、

完全修復したばかりのその身体に、秒持たずしてより深くより強い致命傷を二条、刻み込んだ。

「——先輩!!」

ナポレオンの指揮・作戦の通り、カルデア側の第一目標はオフエリア確保のために絶対必要となるシグルドの撃破。

あらゆる世界で幾度もの修羅場と死線を潜り抜けた二人ならば、この絶好のチャンスを見逃さない!

▷ □ □ 令呪を使って一気に押し切る! □ □ ◁

□ □ 武蔵ちゃんを信じる

□

□ 敵マスターを確保する

□

▷ □ マシユの城壁なら

□

◁

□ ナポレオンの砲なら

□

□ 村正さんの刀なら

□

「イエス、マスター!!」

使用される一画目の令呪。

主人の命を受け盾のサーヴァントが、その宝具を打ち立てる!

「変異展開——『モールド・キャメロットいまは脆き夢想の城』!」

「な——に……………?」

壁が、シグルドを囲んでいた。

マシユが展開した城壁が円形状にぐるりとシグルドの周りに展開。

未だモザイクがかかったように確たる姿を掴められないマシユの宝具であるが、その  
靡げであるからこそ令呪による強化があればこのような展開も可能！

壁に囲まれたシグルド、逃げる場もかわす場もない。

(まずい、これじゃ私の視線が通らない！)

城壁の上には無論のこと、

「やるう〜」

剣の死神。

勝負の決着をつけるべく一直線に走り下りる！

「令呪に以て命ずる、禍を引き起こせッ！

武蔵を撃破しなさい、シグルドオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

「絶技用意ッ！ 太陽の魔剣よッ！ その身で破壊を巻き起こせエエエエエエエエエエ!!」

令呪により強化された破滅の流星群が、天の頂きをも穿ち抜かんと武蔵へ打ち込まれる！

シグルドにかわす場がないのは事実だが、それは武蔵も同じ!!

「悪いんだけどさあ、」

「破滅の黎明ツツ!! 『ベルヴェルク・ゲラム壊却の天輪』ツツツ!!」

「バレバレなのよ、あんたのその投擲宝具術!」

刃と刃が、一瞬に交差する。

勝負の天秤が冷徹なまでに告げるのは、強いものが勝つという非常なる現実。



西欧における剣の英霊の中で間違はなく五本の指に入る、最高の魔剣を持つ大英雄の全身全霊の宝具が、手刀一つで完全にさばかれたなど、一体何の悪夢か!?

しかし！これは偶然ではない、必然の結果！

武蔵はこれまで相手の奥義を破って勝ってきた。

源頼光の童子切安綱。

柳生宗矩の水月。

佐々木小次郎の燕返し。

敵の奥義を破るただ一つの未来を掴み取り、強敵達を斬ってきた。

そして、敵の奥義を破ってきたという経験において武蔵と並ぶものがある。

そう、何を隠そうそれはマシユ・キリエライト、カルデアの盾である。

敵の宝具をその大盾で受け止め、耐えきり、決して倒れないという盾の英霊としての

方法で、敵の奥義宝具を破ってきたのだ。

シグルドは下手を打っていた、本人はそれと気付かずに、しかも致命的なまでに。

マシユに『壊却ベルヴェルク・グラムの天輪』と同じやり方で、短剣と魔剣を投擲していたのだ。

しかも二度も。

マシユ、シグルドの宝具投擲の呼吸、宝具の拍子リズムのようなものが読めた。

もちろんそれと悟られないようにシグルドは散らしていたが、短期間に二度も防いだ

ため、臆げながら何かを掴めた。

当然、シグルドを仕留める立場の武蔵にそれを伝えている。

象徴的な説明でしかなかった。

くるるるーからのどどどんどん、その時に呼吸がぐおーんと高まっていき、マナがどどどどんどどんどん………、これで分かれというのは難しい。

が、教えられた武蔵、通じた。

共に数多の奥義宝具を乗り越えてきた者同士、通じ合えた。

抽象的で感覚的な擬音の連続も、武蔵には痛いほどよく分かったのだ。

この時点で武蔵は当たりをつけることに成功。

実際に全開状態のシグルドと戦い、当たりは確信と変わる。

マシユから伝えられ分かったのだ、その呼吸、その拍子！ シグルドの宝具

『ベルヴェルク・グラム壊却の天輪』とはそういうものであると！

分かっているのならば！

武蔵は、敵宝具を破る道筋となる宝具撃破の最適解を自然に身体がとつていく。

それは短剣という流星群と魔剣という彗星の、軌道を見切り、逸らし、ずらしながら、逆につっ込んで間合いを詰め、硬直を斬るというカウンター。

もしオフィリアが見ていたのなら、武蔵に全部さばかれる可能性があることをシグル



ドも認識していたが、マシユの築き上げた城壁がその視線を遮っている！

とどのつまりこの勝負、一対一でも一対二でもなかった、二体二だったのだ!!

盾の少女が体得していた敵宝具への分析力が、尋常ならざる宝具破りを成功に導いた

!

魔剣、破れたり——ッ!!

「ムサシイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ!!」

——識<sup>し</sup>ってるわよ、スルト。

その名が何を意味するのか分からないが、そこにいるのを識<sup>し</sup>っている。

シングルでなくスルトこそが、己が斬らなければならぬ相手であると。

ならば——斬るのみ!!

「南無天満自在天神、仁王俱利伽羅衝天象——っ」

それは一人で戦っている間は決して味わえなかった不思議な感覚。

キミの、ためなら、

キミが、いてくれるなら、

キミが、いてくれるから、

私の剣はどこまでも果てなく行くことができる。

きっと天元すらも突破して、どこまでも、どこまでも——！

「劍轟・四連抜刀ツ!! —— 伊舎那大天象・大咲乱ツツ!!」

抜即斬!!

両腰より放たれる四連の居合抜刀連斬、それでいてただ一つの太刀、即ちこれぞ伊舎

那大天象。

地水炎風を象る降魔の利剣すらも超える刃は、己が斬るべき相手の天元を確実に捉えている！

最後の一刀こそは空の太刀。

ここまでの剣境にいなながらもさらなる上を目指すが故に永遠の未完成となる一撃。

もはや刀を握っているかなど武蔵には関係ない、私という剣、キミのための剣、宮本武蔵という存在こそが空の太刀となる剣なのだから。

例え未完成であつても、キミが足してくれる。

例え届かなくても、キミが背中を押してくれる。

私がつつと剣を修行していたのは、きつと、キミと出会いキミの剣になるため。

私を照らしてくれる、キミの貴い勇氣こそが、私に足りなかったもの。

だから、私という画竜はキミという点睛を得て完璧になる。

キミと一緒になら、無二なる一の更に先、零すらも通りこしてちやうつて、確信してる。

キミが一緒なら、私にはもうできないことは何も無い。

そう、だから――、

—— 例えその身スルトが神仏天魔であろうとも、我が刃私とキミにて一刀に両断せんツ!!

「!!!」

叩き込まれた空の太刀。

シグルドの中シグルドにいるものは、

その一刀に、

—— 確かに、神を見た。

「ぐううううううう!!」

衝撃で城壁が掻き消える。

煙幕と魔力嵐がゆっくりとはれていく。

その場所には――、

「……………いな、い……………?」

いるべき勝者の姿はなかった。

首から下全てを斬滅させられた敗者の頭が転がっているだけだった。

□ 「まだきつと終わりじゃない、」 □

□ 「別の世界に行っただけだって、」 □

▷ □ 「――そう信じる!」 □  
◁

「――はいっ!」

「倒された?」「倒された?」「倒された?」

「お姉様の想い人が?」「お姉様の想い人が?」「お姉様の想い人が?」

「首だけ残ってるわ」「消滅は時間の問題ね」「シグルドの脱落を確認」

「敵セイバーの所在不明」「敵セイバー、感知できず」「索敵範囲内に反応なし」

「相打ちと推定」「結論保留、戦闘続行を優先」「思考ではなく行動を優先」

「攻撃せよ」「殲滅せよ」「撃滅せよ」

「破壊せよ」「勝利せよ」「打倒せよ」

「敵全戦力を攻撃破壊せよ!」「敵全戦力を殲滅勝利せよ!」「敵全戦力を撃滅打倒せよ

!」

(——まずい、まずいまずいまずいまずいまずい!!)

シグルドが、負けた。

シグルドが、死滅した。

つまり、それは……………

「ハハハハハ! まさかオレの核まで傷つけるとはな!! しかも、この深さ!!」

オマエという剣士は！ オレが燃やす価値がある!!

認めよう！ その熱を!! 讃えてやろうとも！ その熱を!!

オマエの剣と！ オレの剣!! どっちが上か確かめねばならんなあ?!!?

だが、何処へ行つた!?

やつとオレの番だというのに、何処へずれた!?

まあいい、全ての世界を燃やしていけば、いずれオマエがずれた世界へ辿りつこう」

狂声が、戦場に木霊する。

(……………ああ、……………スルトが……………!!)

その声が告げるのは、

血戦の終わりと——決戦の始まり。

「俺が死んだぞ、オフエリア?

さあ、オレと共に、

真ゲッテルデメルングの神々の黄昏を始めよう」

終焉が、  
始まりを迎えた。

(最終話へ続く)



## 最終話 狂焰之巨人王と三人のセイバー

「やめろ」

魔眼をくり抜こうとするオフエリアの右手を、村正が止めた。

「おめえみてえな先も華もある娘っ子が、自害なんざ選んじやいけねえ。

いいか、死ぬのはなあ——、

儂オレやなぼれおんみてえな、もう人生終わっちまつてる奴の仕事なんだよ。

第一、おめえなぼれおんの嫁だろうが？

あの野郎、勝手に逝オシつちまいやがった。

儂オレらを残して、指揮官が先にくたばってどうすんだよ、なあ？

これあな、弔オシい合戦なんだ、あいつのな。

嫁のおめえが仇オシとらねえで、誰オシが取るってんだ、ああん？」

現界したスルトの炎剣の一撃が下された。

牢屋に拘束されていたが自由となったシトナイ、その彼女を守る巨人が受け止め、スカハハスカデイが神鉄の守護を施すも――、

マシユが決死の覚悟でその盾でスルトの炎を防ごうとする寸前、ナポレオンがその宝具でスルトを砲撃した。

限界を超えることで消滅という代償を支払いながらも、スルトに深い傷を与えることに成功。

この世界に虹がかかり、

彼の声と思いを知り、何よりもその虹を見たオフエリアは、一步、足を踏み出した。

「なら、どうするっていうの？

ごめんなさい、策があるのなら聞かせてくれないかしら？  
ないのよ、そんなものは」

『スルトの在り方は、神霊というよりはサーヴァントだ。

例え令呪がなくなろうとも、サーヴァンには現界するために楔が必要だ。

楔、いや、要石か、その存在をこの世に留めるためには。

その要であるミス・オフエリア、いや失敬、ミス・オフエリアの魔眼を破壊すれば、奴の戦力は大幅に低下する。

我々でも——、十分勝てる程度に』

「ふざけたこと抜かしてつと、おめえから先にぶつ飛ばすぞ、ほーむず」

「ええ。

私はミス・オフエリアよ、ミス。

ミセスじゃないわ。

magari間違つてでも、ミセスなんて呼ばないでくれる?」

「儂<sup>オレ</sup>はなあ——もう、オレは、誰にも、死んでほしくない。

そんなことは、もうごめんだ。

誰かの犠牲がなきや成り立たないものに、もうオレは、乗りたくない。  
このみんなで、誰一人欠けることなく、スルトを倒す」

「だから理想論じゃなくて、現実を、」

「——策ならある。」

あの燃えごぼうをぶつ倒すための策ならな」

そうして、

千子村正は、

「——その、とんでもなく馬鹿らしい、夢物語を語った。」

「アハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ！」

『フハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ！』



『そうだ、そうだぞう！』

その女と同じ意見なのは癪に触るが、

第一その女は、自分の意思で、自分から魔眼を摘出する気だつたろうに！

死にたい奴には死なせとけ！

何もせず黙って死なすんだ、そそそ、そうでなければあんな化け物、勝てるはずなからう!!』

『コペルニクスの転回とはお世辞にも言えまい！』

夢想家とその夢想を垂れ流しているか、妄想病患者の鬱的な妄想が重なったものだろう。

論理性の欠片も無い主張ではあるが、ハハハハハハハハハ！

だからこそ面白い話ではないのかね、諸君!?!』

「……………先、輩?」

▷ □ 「行けるような気がする、」

□ 「気のせいじゃないと思うけど……………」

□ □ ◁

「やっぱり……………!」

「確認せねばの、」

「、の前に……………」

……………できんのか？」

「残念ながら、可能という他ない。

それがルーンというものの在り方なのだから。

ちと、渡る橋が心許ないが、できる。

二つほど、話しておかねばならぬことがある。

一つ、オフエリア、お主はスルトと繋がっておるな？」

「……………はい。

それに、スルトに侵食されている状態です。

私という自我を保っていますし、問題はありません。

ですが……………

スルトの、炎だと思いますが、が、私の中に、少しですが、入っています」

「し、侵食!?!」

「であろうな、諦めの悪いあやつならそれぐらいの芸当はしよう。

——が、それはどうでも良い」

「……………え?」

「お言葉ですが、スカサハ||スカディさん、スルトの、炎ですよ?」

そんなものが体内にあつたら、オフエリアさんは……………」

「あやつを殺せばよい。

そして奴の本体の中にある核を粉々に壊せし、消滅させればよい。

炎の通り道があるなら核をおぬしへ移すことは理論上は可能だが、そんなことをされれば人間としての肉体と精神と心魂が保たぬ、すぐさま崩壊し灰燼と消える。



オフェリアへ流し込まれた炎から新たなスルトが生まれるということはない。  
あやつを殺し、おぬしは内にある焔を御する魔術師になればよい、それだけのこと」

「そんなこと、私には……………」

「できぬか？」

これなる場合は、何をしている場か？

スルトを殺し、この世界を、そして遍く世界を救うための場である。

本来ならば刃交えなければならぬ我らが、共にあるとはそういうこと。

全世界の救済と比べれば、そんなことぐらいできて当然、泣き言を言うでない」

「……………」

「二つ、これが一番大切なのだが……………」

「シトナイ？」

「ふふふ。」

ええ、そうよ。

同意するわ。

とんでもないデタラメよね。

でもそれこそが人という種がもつ可能性」

「オフエリア、スルトは弱っているな？」

それも、かなり。

致命傷とはいかぬかもしれぬが、それに等しい程の傷を受けておる、違うか？」

「ナポレオンさんの宝具が、クリティカルに決まっただけのことですか？」

「……………いえ、違うわ。」

あの人じゃない、武蔵よ」

▷ □ □ 「!?」

□ 「流石武蔵ちゃん！」

□ □ ◁

『——！—— そうだったのか！—— ミス・宮本!!』

神代を終わらせるには、あの炎では熱量が足りていないと思っていたが、ミス・宮本のあの一撃！

その刃、合理的疑いの余地が入る隙間がないほどに、シグルドの中のスルト、スルトの中の核、それだけに留まらず、核の中にあるべき存在という大元へ届いていたのだから。

弱かった—— そう、あの一撃はスルト本来の力からすれば、弱すぎると言わざるを得なかった!』

「とんでもない使い手ね。」

武蔵がスルトに負わせた傷は、まだ癒えていない。

自分という存在の大元への傷、そう簡単には修復できないはずよ」

□ 「ということは、」 □

▷ □ 「できるってこと?」 □ ◁

「……………できるんですか!?

オフェリアさんが死なずに、スルトを倒すのは、できるんですか!!」

「ゼロではない、という程度にな。

第一、我らでは火力が足りぬ。

ナポレオンの砲、シグルドの魔剣、そして、あるならばブリュンヒルデのルーン、か。どれか一つでもあれば、であるが……………」

「それは……………なくはない、手ならある、と言っておくわ、ふふふ」

『みんな、みんなー。』

もしかしたら気付いてないのかも知れないから確認するけどさー。

オフェリアの魔眼を潰して、村正の策を実現する——これが一番勝率高い作戦なんじゃない？

言いたくないけどさ、こんなことー。

でも、誰かが言わなきゃいけないから言うけど……………、

オフェリアには気の毒だけど、彼女には死んでもらった方が、作戦成功率は高くなる。救わなきゃいけないのは、スルトが滅ぼすありとあらゆる全ての世界の命、これを忘

れないで』

「私は、村正さんの作戦にかけてみたいですよ!!」

もし、成功すれば、もし、できるのなら、オフエリアさんが死ぬ必要はないんですよ?  
ね?

だったら………私は、かけてみたいです、その可能性に!」

「でも、それはね、マシユ、」

「私は、私達は、カルデアは! もっと絶望的なピンチを何度も切り抜けてきました!

それでも勝ってきた、守ってきたんです!!

そうしなければ、ならなかったから!

そうするのが正しいことだと信じていたからです!!

でもこれは、オフエリアさんに犠牲になってもらうのは、私は、私は、絶対納得できません!

道はあるんですよ、道が、あるのなら、私がそれを切り開きます、私がスルトの炎を全て防いでみせます!

だからお願いです、お願いします、私は、あるんです、オフエリアさんにお聞きしたいこと、お話ししたいこと、たくさんたくさん、いっぱいあるんです！

オフエリアさんと同じ時間を一緒に過ごすチャンスを、私にください!!  
やらせてください、行かせてください、その道を!!」

「私もシロウの案に賛成！」

ふふふ、本当にいつつもバカなこと考えつくんだから」

「勝てるんだったら、バカでいい。」

「それでも勝算は十分あると思うけどな」

「だーかーらー、それが無謀だっていうの。」

もうちよつと大人になりなさいっていつも言っただけでしてあげてるでしょ?」

「イリヤには言われたくないな。」

「イリヤこそ、牛乳飲まないといつまでたつても大きくなれないぞ?」

「それは迷信。

ミルク飲んだぐらいで大きくなれたら世話ないわ」

「そうか？」

桜がそんなこと言ってたとか聞いたけど？」

「!?」

スケベ！ バカ！ 変態!!

私をそんな目で見るとかあり得ないんだから！

去勢するわよ、このペドフェリアロリコン変態シロウ!!」

「ほほほ、何やらお盛んじやの。

じゃが時間がない。

決めるか」

この場にいる者は、  
決断しなければならぬ。

確率の高い道を行くか、夢物語を追い求めるか、それとも——？

マシユ・キリエライトは盾を握り、

千子村正は刀を執る。

スカサハスカディはただ静かに皆を見つめ、

シトナイは嬉しそうに村正の側にいる。

オルトリンデ、ヒルド、スルーズは残る戦乙女達と一緒に女神の決定を待ち、

オフェリアはただ力無く首を垂れる。

ナポレオン、シグルド、ブリュンヒルデは、この場にはいない。  
そして、

□ 「みんな、」

□

▷ □ 「あの虹を見て」

□

◁



「？」

「虹ですか？」

『ムツシユ・ナポレオンの宝具か。

対象物となったスルトが弱っていたせいか、未だ残っている。

だが……………」

「薄い。

あちら側が透けすぎておる。

もう限界ぞな。

例えスルトが触れなくとも、すぐにでも塵と消えようか」

「よく保ってるじゃない、褒めてあげなきや。

消滅してなきやおかしいのに、まだ残ってる。

よっぽど、この世界が気になるのね。

ふふふ、この世界じゃなくて、この世界にいる誰かよね、きっと」

□ 「オフェリアさん、」 □

▷ □ 「何が見えますか？」 □ ◁

「.....」

□ 「僕には、」 □

□ 「私には、」 □

□ 「俺には、」 □

□ 「あたしには、」 □

□ 「スルトを倒した、」 □

▷ □ 「みんなが見えます」 □ ◁

□ 「オフェリアさんも、」 □

□ 「マシユも、」 □

□ 「村正さんも、」  
□ 「シトナイも、」  
□ 「スカサハ||スカダイさんも、」  
□ 「ワルキューレのみんなも、」  
□ 「全員一緒です」  
□  
◁

「.....」

□ 「だからみんなで、」  
□ 「行こう」  
□  
◁

□ 「終焉を越えて、」  
□ 「明日へ——！」  
□  
◁

「最終話 狂焔之巨人王と三人のセイバー」

□ 「でかーーーーー!!」 □

▷ □ 「メラメラだーーーー!!」 □ ◁

近くに行けば行くほど実感せねばならない。

生物としての違い、内包する力の桁が違いすぎてどうにもならないのだと。

だが、そんなことで諦めてしまつては、

カルデアの者だとはとてもとも言えない。

「この戦、超短期決戦となる、心せよ！」

村正よ、お主の申す大ボラを真と実現させるか！」

「頼むぜ。」

つても、あんたには張り手の一つでもかまさねえと収まりつかねえ、やっぱな。

終わつたら頼む」

「此の期に及んでもまだ申すか。」

ふふふ、愛い奴、愛い奴」

「むー！ シロウを誘惑しちゃダメー！」

シロウつてば綺麗な女の人にはすぐころつといっっちゃうんだから」

「すまねえな、シトナイ。

おめえさんと漫才やりたいのは山々なんだが——今はマジだ、後でな」

「はいはい、ちゃんとサポートするわよ。

でもこの霊基だとルーンが上手く使えないのよね」

顔を見上げなければ、巨人王の表情をうかがい知ることはできない。

分かるのはそう、肌を刺すような殺意の塊の熱気。

冬の大地と天空が、スルトが発する炎により塗り替えられていく。

その悪意——頭がおかしくなりそうなほどの量を、世界にぶちまけている。

この戦いは、一度始めたら後戻りは決してできない。

たが——、

進まなければ、戦わなければ、未来は、明日は、決して掴むことはできない。

□ 「行こう!!」

□

▷ □ 「勝とう!!」

□

◁

□ 「ぶっ飛ばそう!!」

□

「——はい！」

「おうー！」

「うむ」

「うん！」

「……………」

「命令を承服」「命令承服!」「命令承服」

村正、空拳に戻り、

目を閉じて、内なる呼び声に集中する。

シトナイ、

村正の胸板に両手を押し当て、

「……………」

「……………」

この世界、最大となる戦いが、

—— 始まった。

「体は剣で出来ている」

「I a m t h e b o n e o f m y s w o r d」

「守りの要となるは、マシユ！」

吐いた大言、飲み込むでないぞ、己が盾を持つてして真としてみせよ！」

「——はいっ!!」

「血潮は鉄で、心は硝子」

「Steel is my body, and fire is my blood」

「攻めの要となるは、村正！　そして我が娘ワルキューレ達！

最も激しい消耗が用意される。

だがあえて命ずる、死ぬことは許されん、一人も欠けることなくスルトを倒せ！」

「任務了解」「任務了解」「任務了解！」

「幾たびの戦場を越えて不敗」

「I have created over a thousand blades」



「心せよ、村正が倒れば全てが終わる。」

「そこなカルデアのマスターが倒れても終わるは終わるが、我らの道、村正がいなければ切り開けぬ！」

「はいっ！」

「任務了解」「任務了解」「任務了解！」

「ただ一度の敗走もなく、ただ一度の勝利もなし」

「Unaware of loss, nor aware of gain」

「オフエリアよ、村正らと共に上へ行くとはスルトと直接対峙するということ。」

「その覚悟、あろうな？」

「……………この作戦が失敗すれば、すぐさま私は魔眼を破壊します。」

「スルトの存在を弱らせることで、再起に繋ぐための撤退の時間を稼ぐことができるはず。」

そのタイミングは、戦闘を直接見た方が良い、違いますか？」

「ならば、何もいうまい」

「担い手はここに独り、剣の丘で鉄を鍛つ」

「Withstood pain to create weapons, waiting for one's arrival」

「勇士達よ、戦乙女達よ！

お前達が挑まんとするは、神々の黄昏！

あらゆる神々が死滅し、世界は焔に包まれ、神代の世界が終焉を迎えるもの！

我らはその終焉を生き残りしもの、齒車が狂ったが故に生き残ってしまった者!!」

「ならば我が生涯に意味は不要ず」

「I have no regrets. This is the only path」

「我らでは、乗り越えられぬであろう。

所詮は生きながらえただけの、命ゆえに。

だが——！

我ら共にあるは、カルデア、人理の守り手達！

その守ろうとする人理、我らの人理とは決して相容れられぬものなれど——！！

この者達と、我らであれば——！！！」

「この体は、『無限の剣で出来ていた』」

『Unlimited Blade Works』

「乗り越えて行けるとも、この神々の黄昏を——！！！」

詠唱が終わり、

世界が展開された。

シトナイの補助により、完成した詠唱節。

しかしそれは、固有結界にあらず、宝具にあらず。

結局のところはそう、鍛冶工房という陣地展開。

雪原に、一面の剣が咲き乱れる。

その広範囲、見渡す限り全ての大地に刀が刺さっている。

「ほう。」

どれもこれも、惚れ惚れするほどの冴えを見せておるではないか。

やはりこれならば——足りる。

スルトの体軀刻む刃足りうる」

それは、千子村正という刀鍛冶が作り出す刀剣世界。

冬の雪広場に、どこまでもどこまでも刀がある。

千子村正が鍛えた刀剣達だが、村正が鍛えたのではない刀が多数混じっている。

何故ならこの刀達は、千子派と呼ばれる刀鍛冶の一派が作成した全ての刀剣。

村正の名とは、代々千子派に継承される名前なのだ。

そう、二代村正も村正を名乗り、初代村正が目指したのと同じ刀を鍛えようとした。

斬味鋭い刀でもなく、刃紋美しい刀でもない。

あらゆる罪業を斬り断ち終わらせる刀——その刀こそ村正の名を冠する我らが

目指す刀。

だからこそ、村正ではない村正達が鍛えた刀達が喚ばれている。

千子村正という英霊は、この村正だけなのだから。

しかし、どの刀も同じ。

同じ理想を掲げ、同じ夢を追い求め、同じモノを斬ろうとしている。

その刃へ、

スカサハ||スカデイの杖がルーンを刻む。

指揮棒のような杖が動き踊るたびに、刀の刀身一本一本に原初のルーンが刻まれていく。

千子村正が鍛える刀とは、魔術的な特性を持たない。

そんなものに頼らずに、ただ刀を鍛えるところで、そこを斬ることを目指しているのだから。

刀剣に宿った心中、スカサハ||スカデイには、非常に心地よい。

なるほど、もし影の国の魔女がこの場にいたのなら、自分が招く勇者達にこの剣を与

えたいから全部くれないか、と無理難題を言い出していただろう。

筆が乗る、杖が走る、ルーンが踊る。

刃が目指す罪業の清算、そのためにはスルトを撃破する刃が必要なのだ。

なれば、刀工が鍛えた刀を、魔女にして女神がさらに鍛える——そう、これならば届くはず、スルトの撃破という大将首を討ち取れる刃へと！

「征くがいい、勇士達！ 戦乙女達！

我がルーンが与えた空駆ける翼にて、スルトの首を殺<sup>と</sup>つて参れ！」

戦乙女達が、原初のルーンが刻まれた刀を手に、空へと登っていく。

「私が上へ、刀を上げるわ。

貴方達はスルトの撃破にだけ集中して！」

その杖が止まることはない。

描き続け刻み続け、刃を刃を刃を、刃を——神すらも屠る剣へと変貌させんとす

る！



戦意が、炎となつて爆裂する。

空中が何度も何度も爆発する。

スルトの悪意と戦意が、この世界を終わらせようと爆ぜ狂う。

衝撃と熱量、凄まじいことこの上ない。

このスルトこそは、スルトⅡフェンリル。

終焉の時において、フェンリルを喰らい込み、焔だけでなく氷の権能も有するモノ。

神霊の域に達している存在は、ただそう思っただけで、外界に破壊の爪痕をばらまいていく。

その攻撃の熱波が、

スカサハⅡスカディとシトナイが練り上げたルーンの防壁とぶつかり合う。

この威圧感と迫力——！

かつて対峙したどんな超級の存在よりも、はるかに熱い!!



「くうううう!!」

先輩、オフエリアさん、大丈夫ですか!」

□ 「なんとか!」

□

▷ □ 「マシユこそ平気!」

□

◁

「この人の心配はしないで、マシユ。

貴女には遠く及ばないけど、一人ぐらいなら」

「はい! 先輩を頼みます、オフエリアさん!」

「……………っ!!」

オレは! オレは! オレの意思を持って動いている!

星が押し付けた役割でも! スルトとして定められた事象でもない!

くだらぬ作り物でオレという存在を歯車とする世界すら不要不要!



▷ □ 「入った!!」 □ ◁

村正の一刀、スルトの纏う焰を斬り裂いて——血を流させた。それだけに留まらず、傷口が見える。

スカサハ||スカデイの原初のルーンと、『千子村正』が鍛えた剣の冴え。

何よりも信念、己の信じる道をどこまでも不器用に押し通す鉄心が、焰を裂き氷を割り、

スルトの体躯に大きな、村正の刀の大きさを考えれば信じられないような、大きな傷をつける!

己の何十倍以上も巨大な氷焰の巨人を前にしても、

この男、千子村正、どこまでも大胆不敵、豪快にして豪胆。

「スルト||フェンリルへのルーン強化刀による攻撃、入りました!!」

斬り跡、目視で確認!

焰の体躯にも、氷の体躯にも、どちらにも傷を与えています!」



再度斬線が走り、  
巨人の体軀を斬り裂いていく。

そう、これなる千子村正という英霊こそは、

「やっばぶつた切るなら、薩摩の太刀やり方がピカイチだな。

一太刀、いや二太刀までは保ってくれるか。

おう、悪りいがじゃんじゃん下から飛ばしてくれや。

——こいつは、オレが仕留める」

——『あらゆる罪業の根源の天元を断ち切る刃を鍛える、正義の味方』

□ 「速攻だ!!」

□

▷ □ 「急速再生が始まる前に！」

□

◁



その巨人が、行動を開始する、反撃を開始する。

ただ見ただけで、熱線が飛び、爆発する。

ただ呼吸をただだけで、熱風が炸裂し、燃やし吹き飛ばす。

腕を振りまわせば、その軌跡に大量の炎と熱を残し破壊が空を埋め尽くす。

紅蓮が、雪崩となって押し寄せてくる。

全てを飲み込む炎に、逃げる場所など存在しない。

「真名、凍結展開——呼応せよ、『モールド・キャメロットいまは脆き夢想の城』っ!!」

空に打ち立てられる、尊き城。

スルトが自然発生させた暴焔の嵐から仲間を守るため、打たされてしまった宝具。

「ぐうううう——————ッッ!!」

それは生物としての差。

デカイとは、これほどまでの差となるのだ。

だが、マシユが宝具解放という魔力を支払って得た小康状態。  
戦乙女達が、進軍を開始する。

「攻撃態勢を維持」「攻撃態勢を維持」「攻撃態勢を維持」

「状況を」「状況を」「状況を」

「敵戦力、スルトⅡフェンリル」「スルトⅡフェンリル確認」「スルトⅡフェンリル確認」  
「スルトの炎と」「フェンリルの氷」「どちらの権能もある」

「近くに行つてはいけない」「至近距離への接近を禁止」「距離を維持」

「あれは神代を終わらす炎」「神殺しの終焉」「神性を殺すもの」

「でも、」「でも、」「でも、」

「攻撃を開始」「攻撃を開始」「攻撃を開始」

「生存優先指令を理解」「生存優先指令を了解」「生存優先命令を承諾」

「でも、」「でも、」「でも、」

「最優先目標スルトⅡフェンリル」「スルトⅡフェンリル」「スルトⅡフェンリル」

「自己の生存を考慮し、」「自己の生存考慮！」「自己生存を考慮し、」

「スルトⅡフェンリルを撃破せよ！」「スルトⅡフェンリルを撃破せよ！」

「スルトⅡフェンリルを撃破せよ！」「スルトⅡフェンリルを撃破せよ！」



「スルトⅡフェンリルを撃破せよ!」「スルトⅡフェンリルを撃破せよ!」  
「スルトⅡフェンリルを撃破せよ!」「スルトⅡフェンリルを撃破せよ!」

その手にあるものは、大神より授かった槍にあらず。

『千子村正』によって鍛えられた刀を原初のルーンで強化した、スルトを傷つけ得る刃。  
戦乙女達は、スルトが発する爆熱暴風をあざ笑うかのように、空を滑空。  
大空を回り、勢いをつけ流星となり——手に持つ刀を、投擲する!

っ!!

何十もの刃によって、一瞬にハリネズミと化すスルト。

「離脱成功」「離脱成功」「離脱成功」

「流血を確認」「流血、確認したよ!」「流血確認」

「敵の損、」「敵の損、」「敵の損、」

何本もの刃に貫かれながらも、

—— スルトが、嗤った。

「くう——————!!!」

「ぐオオオううう!!」

「!」回避行、!」「回避、キャア!!」「!?!?」

ただそれだけで、マシユを除く全ての戦力が、吹き飛ばされた。

「ううう—————、なんて、バケモノ……………!」

人形すらもオレを傷つけるか!!

クハハハハハハハ!!!

良い！ それも良いぞ！

スカデイ！ 貴様だな!? ここに顔を出さぬが貴様なのは知れている！  
随分手の込んだルーンを刻んでいるな？

オーデインより受け継いだものか。

実に貴様らしい！ 無価値なゴミクズだな!!

そうとも！ だからどうしたというのだ!!??

オレの核は！ ここだ！ ここにあるぞ！ 塵芥!!!

オーデインの真似事をすれば！ オレがくたばるとでも思っているのか!!?

オレが殺した老いぼれの技で！ オレが死んでやるとでも考えるのか!!?

そんな熱で！ このオレがくたばるわけなからうがアアアアアアア!!

そもそも、スルトは、生物として強い。

例えその両眼をくり抜かれたとて、忿怒の核熱をたぎらせながら、  
だからどうしたのだと、終焉を始めるだろう。

勝負は劣勢、大幅な劣勢。

開始わずかで村正の攻撃が綺麗に入ったが、敵対行動を開始したスルトの焰に一つ踏み込めない。

スルトが喚ぶ焰は攻防一体。

敵を焼き尽くすと同時に、敵からの攻撃を燃やし尽くす。

確かに、攻撃は入っている。

全身を焼かれながらも村正、さらなる鋭さを以ってしてスルトの体軀を斬り刻む。スカサハスカディがルーンを施し、シトナイが上空の戦場へ運ぶルーン強化刀。

斬っては捨て、斬っては捨てるを繰り返す

戦乙女達には、もう脱落者が出ている。

確かにその投擲攻撃は、スルトに通じている。

決死の特攻で、己の命と引き換えにスルトの体軀を斬り裂くものもいる。

だが、

だが——！！

(決定打が足りない……………!!)

それを打つための布石の段階とはいえ、私達の布陣、圧倒的に火力が足りない!!  
スルトの急速再生が始まってしまえば、また最初からになる!

村正の刀も戦乙女達も、数には限りがある! 無限では決してない!!

もし、ここに——武蔵が入れば……………!!)

それは思わざるを得ない If。

シグルドを殺した宝具の一撃。

あれならば、本当にこのスルトを真つ二つに両断していたはず。

(もし、シグルドが、私のサーヴァントとしていてくれたなら……………!!)

その宝具、『ベルヴェルク・グラム壊却の天輪』で、スルトの体躯に大穴を開けていただろう。

「……………くっ!!」

……………ん、……………あんだあ?」

(もし、ブリュンヒルデが現界して、私達の

え?)

▷ □ 「わわわわわあああああ!!」 □ ◁

「——あ……………きやつ!」

▷ □ 「ど、ど、ど、ど、どこ投げるんですか、村正さん!」 □ ◁  
▷ □ 「おおおおお、オフエリアさんに当たるところでしたよ!」 □ ◁

「悪い、外すよう投げたつもりだったが、むずいんだよな、刀を投げるっつーのは。どうにもうまくいかねえ。」

おう、綺羅目娘、目ん玉見開いてよっつく聞け。

昔々、あるところにだな、正義の味方になりてえっつー、ど阿呆がいた」

▷ □ 「村正さん、今、スルトと戦ってます!!!」 □ ◁

□ 「三行にまとめるの、お願いして良いですか!？」 □

「すぐ済む。

そいつは、まあ、頑張った。

頑張って頑張って頑張って……………頑張った。

どうなったかは——別にどうでもいい。

いいか、オフェリア」

「……………えっ?」

「そいつは、さ、泣き言を言わなかった。

アーサー王のエクスカリバーがあれば、スルトを倒せるのに、とか、

クーフリーンのゲイボルクがあれば、人を傷つける悪者を倒せるのに、とか、

ギルガメツシュの蔵があれば、その中のものでたくさんの人が助けられるのに、とか、

自分の力が足りずに、助けられなくて死んでいった人達を思いながら、すまない、す

まない、何度も何度も心の中で涙をずっと流しながら、

それでも頑張った、そいつなりに、正義の味方っていうのを、目指し続け、歩き続け

た」

村正が、刀を構える。

「大事なものは、最初の一步なんじゃないか？

一步踏み出せれば、二歩目が出る。

二歩歩ければ、三歩、四歩、次々出てくる。

そうなれば、もう、走り出すんだよ、止まらない、もう何が起ころうと。

目指すものが遠かったって、高みにありすぎて届かなくなつて、そんなの全然関係ないんだ。

もっと速く走ればいい、もっと高く飛べばいい、できるんだ、できるんだよ、君がそう、諦めないで挑み続けて走り続けければ、きっと手がそこに届くんのだ」

その刀は、この世界ではないどこかで、

武蔵に貸し与え、武蔵が振るつた刀と同じ銘を持つ明神切村正。

「君は、もう、踏み出しただろう？」



あいつが、自称君の旦那のナポレオンが、君を引つ張つて歩かせてくれたじゃないか。だから行こう、君が目指すべき場所へ。

一緒に行つてくれるやつだつて、いるだろ？

クリプターの連中は、置いとくとして――、

そつちの道ではないところへ、歩いて欲しいんだけど――、

マシユは、君と一緒にいきたいつて、言つてくれるんじゃないか？

例え道を違えたつて、ピンチの時には助け合おう、それが友達だろ？」

「はい、オフエリアさん!!」

私達の道は、もう二度と交わらないかもしれないかもしれせん!

オフエリアさんが、何を思つて、私たちの歴史汎人類史を抹殺し、空想樹を育てているのか、お聞

きしなければならぬことは山のようにあります!!

私達には、戦うか、死か、それ以外の道はもうないのかもしれないかもしれせん!

ですが! それでも! 私は、あの時! 皆さんと! 私達三銃士と一緒に過ごした

時間は!

絶対嘘なんかじゃなかつたつて、思いたいんです!!」

「……………」

「ほらな。」

「だからさ、オフエリア、」

そして、

「……………  
トレース・オン  
投影開始」

魔術師の全工程が、始まり終わる。

本来ならば、できるはずがないその魔術。

だが、シトナイの助けで村正の刀を喚んだことで、体内の全回路がオールグリーン。  
ならばこれより始まるのは——、

「南無天満大自在天神、仁王俱利伽羅……………ツツ！」

▷ □ 「そ、そ、そ、その技は——!?」 □ ◁

神域へと到達した剣士の最終奥義。

握るはあらゆる怨恨の源にある業を断つ刃。

そして何よりも！

人々を傷つける悪を討つ、正義の味方の一刀！

「劔轟抜刀！——伊舎那大天象ツツツ!!」

大上段より真つ向から振り下されたその一刀！

例え宮本武蔵に至つていなくとも、それ以上の狂おしいほどの理想への願いが刃へと宿る！

その絶閃、雷光すらも遅いと叫ばんばかりに刹那の内に疾り斬る!!



「好機！」

戦線を押し上げます！

ワルキューレの皆さん、例のものを!!」

「好機到来」「好機到来!」「好機到来」

「畳み掛けるわ」「畳みかけよう」「畳み掛ける」

「あれを」「あれを!」「あれを」

村正が切り開いた血路へ、

マシユが走り、戦乙女達が走り、

地上にいるスカサハハースカディも、シトナイも、前へ前へと動き出す。

理由は皆それぞれ違う、目指す先だって決して同じではない、

おそらくそれは、きっと、戦わなければならないことぐらい分かっている。

それでも走る、そう走るのだ。

勝利へ、

その先へ、行きたいから。

皆を導く一刀を放った村正も、走り出す。

「……ついで来れるよな？」

微笑んだのは彼女へ向けた一瞬だけ。  
戦士は前へ、そう勝利へと、ひた走る。

▷ □ 「オフエリアさん！」 □ ◁

□ 「さあ、行こう!!」 □

「……………つつつ……………!!」

二歩目から先は、  
もう数えなかつた。

▷ □ 「って何ですかアレー……」  
!!!?? □  
◁

「あー、アレな。」

「農<sup>オシ</sup>がなほれおん張っ倒すのに使ったクズ鉄だ」

□ 「あんなので殴られたら、」 □

▷ □ 「死んじゃいますよ、普通！」 □  
◁

「ま、生きてたからいいだろ」

「……………凄いいルーンの刻み方するわね、流石は神代。」

あなたは近づかないで。

死んだほうがマシな体験というのをしたいのなら止めないけど」

「標準決定」「標準決定」「標準決定」

「コース確定」「コース確定」「コース確定」

「推力確保、」 「推力確保、」 「推力確保、」

これが、戦いか!!

あの木偶の坊達を殺戮しても味わえない充実感!

神というやつは! ただの! 穀潰しか!!

だからよく燃えたか!!

クハハハハハハハハハハハハハハ!!

赤髪! オマエなら! これくらいはするだろう! して当然だとも!!

ああ! あったまってきたぞ! オレが! オレが! オレになる!!

おもちやで遊ぶ気か!?

ならば! オレも! 燃やしてやるとしよう!!

戦乙女達が、超巨大な脇差を担ぐ。

その刀身、可視化されているだけでも何個のルーンが刻んだか分からないほど、多数にして精妙なるルーン文字が刻まれている。

「



『それが下にあるものの中では大ききでは最大の代物。

あてよ、なるべく深くまで。

ただし、狙いをつけ、そこに当てよ。

そこ以外には当てるでない。』

「命令了解」「命令了解」「命令了解」

「攻撃開始」「攻撃開始」「攻撃開始」

しかし、スルト、未だになおも健在。

傷口が醜く開き、未だその血流が落ち続けているというのに、焰を、更なる焰を喚び出そうとする。

「チッ。

随分元気に育ったごぼうだな。

効いてねえってのか？」

「いいえ、効いてるわ。

あなた達の攻撃は確かにスルトを傷つけている、削っている。

けど、耐えているのよ。

その耐えられる苦痛やダメージの量が、私達人間やあなた達英霊とは次元が違うだけ」

我が焰の贄となれ……………ツ!!

」

特大の焰の前に、

マシユが――、

村正が――、

「あなた達はまだ手を出さないで、魔力を温存して！

戦乙女達、今よ!!」

「同位体顕現開始」「同位体顕現開始」「同位体顕現開始」「同位体顕現開始」

「同期開始照準完了」「同期開始照準完了」「同期開始標準完了」「同期開始照準完了」

数多のワルキューレ達が、空に一つの大きな輪を描く。

狙い定められる、スルトへと。

大神を灼き尽くし、神々を焼滅した張本人。

塵と燃えろオオオオオオオオオオオ!!

「

大伸より授かりし槍が、一斉に一点へ――!

「終末幻想・少女降臨!」

「終末幻想・少女降臨!」

「終末幻想・少女降臨!」

「終末幻想・少女降臨!」

「終末幻想・少女降臨!」

「終末幻想・少女降臨!」

「終末幻想・少女降臨!」

「終末幻想・少女降臨!」

「終末幻想・少女降臨!」

「終末幻想・少女降臨!」

「終末幻想・少女降臨!」

「終末幻想・少女降臨!」

それは何本もの槍でありながら一本の槍！

スルトの発生させた極紅蓮の焰壁へと注ぎ、その奥にある核を穿ち抜かんとする！

カカカ！ 笑えぬ冗談!!

紛い物が効くとも思っているのか!?

オレは！ 本物の！ 大神宣言の直撃すらも耐え切ったのだぞ!!

「

「最優先目標を優先」「最優先目標を優先」「最優先目標を優先」「最優先目標を優先」

「生命転換、限界突破」「生命転換、限界突破」「生命転換、限界突破」「生命転換、限界突破」

「この身を大神の槍とし」「スルトIIフェンリルを撃破せよ」「女神へ謝罪を」「しかし勝利を」

「——あれは!?

自分の全てを注ぎ込んで——！！」

戦乙女達は、己の残された全てのマナを光へと変換し——特攻。  
スルトが持つ焰の防壁を貫き砕き、勝利のためにその生命を捧げる！！

ならばよしいいイイイ！！！！

┌

その光に負けぬ焰を、いやそれ以上に輝き熱い焰が、  
スルトに喚ばれ作られ、光と化した戦乙女達を飲み込み喰らう。

「ワルキューレの皆さんが！！

でも、でも——！！」

届かない、ならば！

戦乙女達が次々と光の槍となり、スルトへと特攻する。

対するスルト、巨大な腕を振り回し、防壁を作り、光に貫かれながらも——！

何故ないつつつ!?

我が焔を超えようとする熱量も!!

我が氷を凍らせようとする殺意も!!

腹立たい！ 故に!!

叫んでいるぞ！ 我が剣が!! 狂い始めているぞ！ 我が剣が!!

呑み込もうとしているぞ！ 我が剣が!! 始めようとしているぞ！ 我が剣が!!

オレの意思こそ我が剣！ オレの存在こそ我が剣!! オレこそが我が剣!!!

オレこそ

—————  
ガッアアッ  
!!!??

┌

▷ □ 「入った———!!」 □ ◁

！  
千子村正が鍛えた中で最大の大きさを誇るその脇差が、スルトの胸へ突き立てられる

が、

何度言えば分かるのだ!? 塵芥!!??

足りぬ足りぬ足りぬ足りぬ足りぬ足りぬ足りぬ足りぬ足りぬ足りぬ足りぬ足りぬ!!

分からぬならば! 教えてやろう!!

本・当・の・宝・具・の・使・い・方・を・!!

もどき!! 枷をかけられていたオレはオマエへ見せられてなかつたな!?

┌

「——っっ!?!」

「皆さん下がってください!!」

「やべえぞー！」

魔劍擬似展開!!

┌

それは宝具。

かつてその内にいた英霊が扱った、投擲し焰を撒き散らす破滅の剣戟。シグルドこそ己であったが故に実現される擬似魔劍の投擲。

本来の魔劍は太陽の力を内包する。

なれば、スルトによって展開されるその太陽とは——!!

我が焰！ 太陽を篡奪せり!!

┌

スルト自身であり終焉を始めるもの。



ありとあらゆる太陽の中で、最も強烈で、最も高熱で、最も危険極まりない最悪の太陽！

□ 「マシユ！ 宝具で耐えるんだ！」 □

▷ □ 「ダメだ、今はまだ使っちゃ!!」 □ ◁

灼熱地獄の門のように開け放たれたスルトの口から——！

先の戦乙女達の決死の特攻よりも、遙かに上を行く数の焔弾の超大軍勢が出現・射出、マシユの盾を砕き散らそうとする！

その数！ その速さ！ その多さ！ その重さ！ その圧力！ その焔!!

「ぐぐぐぐ————————っっ!!」

爆発する!! 爆裂する!! 爆轟する!! 爆砕する!!

スルトが吐き出す火炎の大海原。

英霊シグルドが使う短剣の投擲よりも、数え切れないほどに危険な焔!!

打ち出され、射ち出され、撃ち出され！

リボルバーの回転速度が上昇に次ぐ上昇！

「がつつつつつつつ！！」

まだ宝具は使えない。

シングルドの宝具、短剣の投擲は本番ではない。

最後に投擲される魔剣の一投こそが最強、その後に魔剣へ叩き込まれる全力の拳こそが最強。

ここで宝具を使ってしまったては、持たない。

その火炎地獄の雨あられば、宝具を使わないで凌がねばならない！

そして！

炎の剣がスルトの右手より離れ宙に浮き、

超極大の最悪の焔を生じさせながら右腕引き絞られ——！！

ベルヴェルク・ケラム  
『壊却の天輪』 ツツツ！！

「事象、シユフエン・アウフ照準固定！」

私は、Ich will es nicht einmal sehenそれが輝くさまを視ないっつ!!」

「——オフェリアさんっ!?!」

□ 「つなぎ、」

□

▷ □ 「留めたあ!!」

□

◁

遷延の魔眼！

その瞳が、スルトの擬似魔剣が放たれるのをつなぎ留める。

その神秘が、何よりもその決意が、スルトの焰に待ったをかけた！

「

「私のサーヴァントの分際で、ふざけたことするじゃない……………ツツ!!

誰の許可を得て、こんなことしてるのかしら……………ツツツ?!

私の! と……………と、とと、と、ととと……………!!!

私の! 戦友へ!! 誰の許可を得て宝具を放つつもりだったのかと聞いているのよ!!!」

□ 「戦友という漢字には、」

□

▷ □ 「ともだちという字が含まれます!!」

□

◁

「はいっ!!」

「……………!!!」

おお! オフェリア! おお!! オフェリア!! おお!!! オフェリア!!!

オマエもあがらうか!!

ならばよし! それもよし!!

オマエにまずは空の境域を見せるも一興か!!

おお！ オフェリアよ！ だがなあアア!!?  
オマエは何を留めているつもりだ!!?

「

「ぐうううー！ー！ー！ツツツ!!?」

「そんな、まさか！ 一度成立した魔眼を、強引に力でねじり切るなんて!!」

我が焔こそ終焉！

我が焔こそ黄昏！

我が焔こそ！ 我そのもの！ 我自身!!

神ですら！ できなかったのだぞ!!?

神々ですら！ オーデインですら！ トールですら！ あらゆる神々ですら！

オレの焔は留められなかった!!!

オレという終末は！ 留められなかったのだ!!



当然襲来するはずの終焉を、引き延ばす！

「ここまでのようね」「ここまでね」「……………え？」

「あとはお願い、オルトリンデ」「お願いね、オルトリンデ」「なら私も！」

「それはダメよ」「それはダメだよ」「……………！」

「あれを止め、」「最後の二画を完成させる」「……………」

「だから私」「そして私」「……………」

「そんな顔をしないで、」「また再会できるんだから」「うん」

「その時、聞かせて頂戴」「スルトをどうやって倒したのかを」「……………うん！」

「機体出力限界突破」「機体出力限界突破」

「最優先目標の撃破に全力を」「最優先目標撃破に全力を」

「全生命活動機能の維持停止」「生命維持機能全停止」

「過剰暴走から超限界暴走へ」「過剰暴走を超え超限界暴走へ」

「全てをかけ、飛翔せよ、攻撃せよ」「全てを乗せて、飛翔せよ、攻撃せよ」

「敗北は認められない、失敗は認められない」「勝利しか認められない、栄光しか認め

れない」

「我ら大神の娘、ワルキューレ」「我ら、大神の娘、ワルキューレ」







再生ではなく、作成に近いその強引き。

戦乙女達の決死の特攻はスルトに確実にダメージを与えている！ これでもまだ足りないのか！

だが、

その体躯に刻まれた文様が淡く輝き出し一つの魔術を形作る！

それこそ――、

又ウウウ!?? これは何だ!?

ルーンか! オーディンのルーンか!!

なるほど! 知恵だけは回るな!! スカディ!!

貴様がルーンを刻んだ刃だからこそ! その傷跡を! ルーンの刻跡としたか!!

だが何だこれは!?! 恐怖のあまり頭がいかれたか!?!

これは還繁のルーンではないか! ユグドラシルから生まれた原初のルーン!

生命樹を祝福するがごとく! 誕生! 成長! 繁栄! 斜陽! 終焉!

それは一つの輪をなす生命のサイクル! それを実現する祝福と呪い!

強化！ 後に劣化へと転ずる呪いの枷！

斜陽終焉を迎える前に！ オレはここだけでなく！ 三つは世界を滅ぼしてしま  
うぞ！

「

「ま、さ、か……………!!」

「本当に……………!?!」

「で、だ、」

▷ □ 「スカサハ||スカディさん!」 □ ◁

『まさか……………本当にできてしまうとはな。

成立しておる、スルトの焰や氷に負けず、あのルーンは成立している』

「つてことは、」

「なら………！」

『うむ。』

だが、気をつけよ。

先に話した通り、スルトの申した通りだ。

樹木という生命還を模したルーン。

強化という祝福を得るが、それが終われば弱化という呪いを受ける。

のちに代償を伴う短期即応的な強化、本来そういったルーン。

我らに弱化を待っている時間はない。

強化の幅は抑えてはいるが、それでも奴の焔が、氷が、強くなっていることに変わり  
ない』

□ 「村正さん！」

□

▷ □ 「マッシュ!!」

□

◁

「イエス、マスター！」

必ず、私が村正さんを守り抜きます!!」

そして、

鍛冶匠が、

その刀を握る。

「不思議なものだな、世の中つてのは。

妙なところで繋がってやがる。

だから儂オレが呼ばれたンだろうが、ンなことはどうだつていい」

残る戦乙女全騎も集結。

マシユが盾を構える中、村正の刀を握る手に力が入る。

「ユグドラシルとは世界樹と呼ばれる世界、大いなる生命、九つの世界が存在する宇宙の樹。

ユグドラシルを語るには、三という数がなくてはならない。

三つの根、三つの泉、九つの世界——すなわち三と三の世界。一つでも効果を發揮するが、同じ刻印三つを組み合わせた方が良い、ユグドラシルという存在が、三つの数が絡み合つて支えているようにね」

「農あな、それらしいやつを書いてくれればよかつたんだが、

まさかドンピシャなもん描いてくれるとはな。

あの城で吐いた御託は撤回しねえが、やるじゃねえか、すかさはⅡすかでい」

村正が、鞆を払つた。

「その傷はな、同じなんだよ。

こんな辺鄙なところでぼちちしてたテメエは知らなくて当然だろうが。

農オレもましゆ達から教えてもらった口だ、でけえことは言えねえ。

そいつはな、

小さな国の領主の息子に生まれ、

人質生活で苦難を味わうも成長し、

天下をテメエで統一しちまうつー花を咲かせ、

二百五十年以上も泰平の世を作り繁栄し、幕末だったか、動乱の時代が来て斜陽を迎え、明治となって、終わっちまった、その証とそっくりなんだよ」

「それは一つの還繁の形。

このルーンこそは、世界樹の恵みを象徴する葉の一枚を表す。

一つでも効果を発揮するが、一番は三つ、三枚描いて重ねる時だそうね。それが本来の使い方。

私には、そのルーンが神代の魔術の印にしか見えないけれど、

——日本人には違うんでしょう？」

「はい、その証こそ——っ!!」

□ 「三つ葉葵！ 葵の御紋!!」 □

▷ □ 「徳川幕府のシンボル!!」 □

◁

「つまりテメエは——、  
——今、徳川のもんつてことだ」

「真名、凍結展開!!」

「同位体、顕現開始!」

「かつて求めた究極の一刀。

其は、肉を断ち骨を断ち命を絶つ鋼の刃にあらず」

知っていたぞ! 赤髪!!

オマエは! ムサシと同じ程に危険なヤツであると!!

ムサシと同じく! オレを殺して当然の力を持っていると!!

オマエ達の中で! オレを殺し得るのは!! 赤髪!! オマエだけだということ



!!

終焉の巨人であるこのオレが！ オマエの放つ終わりの香りにきずかないはずがない!!

!!!  
星よ！ 終われエエエエエエ………!! 灰燼に帰せつつつつつつつつ

」

□ 「スルトの宝具が！」

□

▷ □ 「早すぎる!!」

□

◁

「スルトにとつてすでに終焉は始まっているもの！」

宝具の展開が早いんじゃないわ、もうすでに準備を終えているのよ!!」

「これは多くの道、多くの願いを受けた幻想の城！」

呼応せよ——!!」

「同期開始、照準終了！」

「我が業が求めるは怨恨の清算。

縁を切り、定めを切り、業を切る。

——即ち。宿業からの解放なり」

『太陽ロブトを超ルえて輝レけ、炎ギャの剣ルン』ツツツツツ!!!

「

「その炎！ 私は、それが輝くさまを視ic h w i l l e s n i e m a l s g l ä n z e n s e h e nないつつ!!」

オレの炎の剣が！ たった一種類の斬り方終わらせしかないとは思うまいな!? オフエリ

ア！

!!

その事象ではない！ 炎宝の剣具こそが!! これだアアアアアアアアアアアアアアアアアア

「

その炎剣こそは、ありとあらゆる生命に対する絶対命令権。  
即ち——終焉を迎えその灯火を焼ね失せよ!

▷ □ 「二画目の令呪を使う!」

□ ◁

□ 「二画目の令呪を使うしかない!」

□

□ 「二画目・三画目の令呪を同時使用!」

□

□ 「いや、それでも……………」

□

▷ □ 「マシユ……………」

「 □

◁

□ 「村正さ……………」

「 □

□ 「ナポレオ……………」

「 □

『モールド・キヤメロット  
いまは脆き夢想の城』 つ!!!!  
『ラグナロク・リーツスラシル  
終末幻想・少女降臨』 つ!!」

それは遙かな昔、理想掲げる騎士達が辿り築いた城。

永久久遠の輝きは、人々がその騎士達へと思い願った尊い光。

それは大神の忘れ形見、己が持つ機能を全て攻撃に転じた一投。  
残る全ての戦乙女達の全機能全身全霊をかけた光の槍投。

令呪による強化。

盾が掲げようとする理想の城、夢想の城が未だ完璧でなくても、  
彼女へ込める思いが、その穴を埋める。

スルトの炎の剣、凄まじく。

熱量、温度、殺意、密度——ありとあらゆる項目で極大。

星がスルトに神代を終わらせるために与えた神造兵器。

それを氷炎の巨人王が振るとどんな厄災となるのか——全ては死ぬ。

一つ、誤算があるとすれば、



炎が、全てを、飲み込んだ。

ハハハハハハハハハハハハ!! 燃えたか!! 燃えたか!! よく燃えた!!!

「 スルトの高笑いだけが、冬の世界に木霊する。

「!!」

「 !、 !

!?

!!

「さっさと起きなさいツツツツ!!」

▷ □ 「おぐうううー」!?!?」 □ ◁

「まだ終わっていいない!

まだ終わってないわよ!」

オフエリアのビンタ話で、飛んでいた意識を取り戻したカルデアのマスター。

▷ □ 「みんなは!」 □ ◁

「ぐ……………く……………負けない、負けない……………私は、負けちゃ、……………!」

彼女が、立つ。

己の意思で、戦場に再び立つ。

盾を携えながら、苦痛をこらえ、歯を食いしばり、煙を上げる身体を奮い立たせ、

「まだ………まだ、戦えます！ マスター！ オフェリアさん!!」

マシユ・キリエライト！ まだ、………ぐっ！ ……戦えますっ!!」

決して諦めない！

絶対に——立ち上がる!!

戦乙女達は大部分が炎に飲まれ散っていった。

残るはもう、両手で数えられるほどしかない。

「———なんで、だ!？」

なんでだ、オルトリンデ!？」

炎に飲み込まれた村正を、一人の戦乙女が救い出した。

だが、村正の両腕と右足の膝から下が燃え尽きた。

スルトの宝具による炎により存在が停止<sup>焼失</sup>させられた。



だけど、彼を救い出した戦乙女の身体の損傷はそんな比ではなく……………

「……………だつて、」

そう言つて、彼女は、

「村正、私を助けてくれた。

だから、今度は私が、村正を助ける番」

その長い生で、最初で最後の、心からの笑顔を彼に見せ、光に包まれ旅立っていった。

「スルト……………テメエエエエエエ……………!!!」

▷ □ 「村正さんの刀は!?!」 □ ◁

□ 「刀はどこ!?!」

□

「あの剣は!？」

下に落ちたのかしら——!？」

ここは空中の戦場。

スカサハⅡスカダイのルーンで地上と同じように戦えているが、その手から離れたものは重力に従い自由落下する。

「先輩、上です!!」

□ 「見つけた!」

□

▷ □ 「取れる!!」

□

◁

諦める者など、どこにもない。

スルトの体軀には、未だ還繁のルーンの灯が残っている。

ならば、

まだ残っているはず。

自分達が作り上げたスルト撃破への道は、まだ潰えていない！

▷ □ 「よし取れた!!」 □ ◁

回転しながら落下する刀を取るといふ離れ業。

本人は無我夢中で気付くよりもなかったが、五指全てが切り落とされても仕方なかった。

オレは！ 今！ 実に！ 爽快な気分だ!!

オレの痛みが！ 熱を喚んだ!! オレの怒りが！ 熱を喚んだ!!

オマエたち塵芥どもが！ 熱を喚んだのだ!!

まだいける！ まだいけるとも!! もっと熱を!! さらに熱を!!

炎を!! 炎を寄越せ！ 塵芥!! キサマらの生きる意味はオレの薪となること！

炎を!! 炎よ呼び寄越せ!! 灰燼すらも残さず！ 全て燃やし尽くしてやろう!!

「

□ 「この刀を村正さんに渡せば——！」

□

▷ □ 「覚えてる、村正さんがあの城を斬った時のこと！」 □ ◀

□ 「他に手はないか、何か他の手は——！！」

□

スルトの宝具で両腕を消失させられた村正。

□ 一つでも刀を握りスルトを斬る気だが、そのようなことスルトが許すはずもない。  
己で村正の刀を握ったカルデアのマスター、？

▷ □ 「って、あれ……………？」 ■ ◀

刀が、？ 手の内で脈打つ、？ ？

▷ □ 「なんだ……………、これ……………？」 ■ ◀

「先輩——？」

先輩！ 一体どうしたんですか!?!」

▷ □ 「熱い……………!!」 ■ ◀

声が聞ける、誰かが話している、自分が話している。

何かが見える？ 景色が見える？ 誰かが見える？ 何かが見える？

誰かが見える、何かが見える、どこかが見える、ここが見える、

▷ □ 「頭が……………!?! 胸が……………!?! 手が……………!?!」 ■ ◀

接・続・終・了、同・調・完・了、  
共・生・低・下、顕・現・開・始、

神劍接続 神武降臨 靈基上書 体再構成 英靈劍基 対魔騎乗

武神劍神 神劍一如 白鳥變化 寧猛剛勇 耐毒耐性 無刀無転

武雷合一 現人神在 人理継続 宿業斬断 性別変換 快刀強盜

雷刀喚神 赤心丸橋 天元突破 入水風面 西征東征 一刀無頼

日本無双 神殺神断 切落合打 万理卍拔 断葵村正 超空草薙

そして、一つとなる。

□ 「僕は、誰……………？」  
 □ 「私は、誰……………？」  
 □ 「俺は、誰……………？」  
 □ 「あたしは、誰……………？」

▶ ■ 「違う……………っ」

■ ■ ■ ■  
 「私、僕……………だ」  
 「私、私……………だ」  
 「私、俺……………だ」  
 「私、あたし……………だ」  
 ■ ■ ■ ■

「……………何よ、これ……………!?!」

その変貌にいち早く気付いたのは、最も近い場所にいる魔術師のオフエリア。

変化している、いや、単純な変化という言葉で片付けていいものなのだろうか？

ありえない、ありえない。

遷延の魔眼が見せる可能性が、ありえない、ありえない、ありえない、ありえない、ありえない！  
こんなこと、起こっていいはずがない！

けれど、一つ、この事象の変化を説明できる言葉は一つしかない。

「貴方……………擬似サーヴァントだったの!?!」

「え……………?」

二十に遠く及ばなかった回路本数が今はどうだ。

三十四十を超え、いや、この数え方は正しいのだろうか？

メビウスの輪のように曲がりくねって回路網が構築され、それが動的に変化している。

それはまるで三次元空間を通過する四次元超立方体のよう。

現代魔術ではこんなデタラメな回路は存在しないし、数えることすら困難。

こんなものは、神代か超古代、加え、神の血統でなければ説明ができない。

「先、輩……………？」

分かる、オフエリアの言っていることが分かる。

霊圧が違う、何よりも霊基と肉体が変わってしまっている。

正真正銘さつきまでただの一般人だった自分のマスターは、人間が持つレベルを超えて、英霊クラスへと至っている——それも、かなり高位の存在！

どうして自分はこの人を先輩と呼んだのか。

敬意に、値する人だから——果たしてそれだけだったのだろうか？

もしかしてそれは、身体に英霊を宿す先人であることを無意識に感じ取っていたのではないか？



「ああ、そうか、なるほどそういうことか」

誰も理解できない話が勝手に進んでいる中、その刀の銘を知り、日ノ本の刀工であるが故に、村正、全てを悟る。どつかりを腰を下ろす——後は全て託したといわんばかりに。

「おめえさん、刀を失って全部失ったんだよな。

つまり、こう言いてえんだろ？

刀さえ取り戻せれば、自分本来の力を取り戻せる。

そういう話か」

カルデアのマスターの剣を握るその姿が、英霊のそれとなる。

「嬉しいねえ。

こう言ってくれてるわけだろ、

——おめえさんが失ったあの神剣と、儂のそれが同等、つてな。

まさか、日ノ本の武神サマからお墨付きをもらえるなんて思わなかったぜ」

そして、

——構える。

「後は頼ンだぜ、ヤマトタケル!!」

その者——、

女として敵の宴に忍び込みその首長達を殺害し乱を平定した。

つまり、男性から女性へ、女性から男性へ、任意のタイミングでの性別変換が可能。

旅の最中——、

毒気を放つ神が旅人に危害を加えているのを見つけこれを殺害、水陸の経を開く。

つまり、耐毒性を有する。

その英雄譚、

神劍によって九死に一生を得るも、その神劍を手放したことで命を失ってしまう。

『嬢子の、床の辺に、我が置きし、つるきの大刀、その剣はや』と歌い、死全してしま失う。

この英霊、

剣を失ってしまったが故に、剣がない状態で召喚される。

しかも、

剣と共に全てを失ったがために、剣がなければ英霊としての要因は何一つない。

力、スキル、記憶、技術、兵装、肉体、何一つない真正銘ただの一般人と同じ。

ところが、

クラスセイバーとして召喚されるが故に、神剣ではない違う剣に由来するスキルは低

ランクながらも発動している状態となる。

つまり、一般人としてでも性別変換、耐毒性は使用可能。

そして、

失ったその神剣を取り戻すことができれば——

英霊としての力を存分に使う、サーヴァントとなる。

その者、寧猛なる剛勇を誇るだけでない。

日ノ本最強の武神にして雷神武甕雷タケミカヅチより伝えられた無数の剣技を持つだけにとどま

らず、人の身でありながら武神・劍神として祀られる存在。

その英霊が手にしている刀こそ、千子村正が鍛えに鍛えた秘の一刀、銘を都牟刈・神獸の体内より取り出した劍と同じ銘を持つ。

その劍こそ、天叢雲劍。

この英雄が成し遂げた劍業により、草薙劍と呼ばれるに至る劍であり、英雄が失ってしまったために命を落とした神劍こそ、都牟刈。

ここに、失った神劍と英雄が長い時を経て邂逅を果たす。

その身体が、真白い光に包まれ、

黒の極地用カルデア制服が、

日ノ本最古の劍の英霊が着るべき純白の戦衣へと変貌する。

最後のセイバー、ヤマトタケル、降臨。

その庄！ その剣気！ 雷を纏いながらに立つ威風！

宮本武蔵にも迫ろうかという剣勢！ 戦友より借り受けた神剣が闘志に煌く！

その神剣を掲げ、

——言い放つ。

▶ ■ 「こいよ、スルト」 ■ ◀

▶ ■ 「お前に——」、 ■ ◀

▶ ■ 「本当の剣の振り方ってやつを教えてやる」 ■ ◀

小癩！ 猪口才！！ よくほざく！！ その熱！！ オレが燃やそうか！！  
 神の血あれば！ 神とでもぬかすつもりか！！ その神性ゴミカス未満！！  
 オレの前に！ 神もどきとして立つ愚劣愚臭！！ 燃やせば只のカスカ！！  
 熱熱熱熱熱！！ オレが！！ 全て！！ 平らげてやろうツツツツツ！！  
 星よ終われ！ 灰燼と化せ！！ ただひたすらに燃えるオオオオオ！！！！

■ ■ 最後の令呪を使う！ ■ ■

■ ■ 最後の令呪を使う！ ■ ■

▶ ■ ■ 最後の令呪を使う！ ■ ■ ◀

■ ■ 「令呪を以って我が身に命ずる！ スルトを斬り滅ぼせ！」 ■ ■

■ ■ 「マシユ！ スルトの宝具を今度こそ耐えてくれ！」 ■ ■

▶ ■ ■ 「もう一度最高の夢を見せてくれ、ナポレオン！」 ■ ■ ◀

■ ■ 「行くぞ、マシユ！ 必殺のツープラトン合体攻撃だ！」 ■ ■

「せ、先輩、一体何を!？」

「——えっ!？」

ナポレオンがかけた虹の橋は未だ消えていない。

もはや虹なのか色のついた霧なのか、消滅したのか、していないのかという有様。加え、スルトが暴焰を撒き散らす影響で、虹は刻一刻と色を失っていた。

しかし、マスターには、感じられるはず。

その快男児、未だこの世界を離れていないのだと。

際の際にかじりついている状況に違いないが、未だ、いる。

仲間の行く末を気にしているのか、惚れた女を一秒でも長く見ていたいのか、それは分からずとも、

令呪が輝く!

もう一度、もう一度だけ、存在が消える直前だった虹が七色を取り戻す。

ナポレオン・ボナパルトは、  
人の想いに応える英雄である。

この世界に来たのは、オフエリア・ファムルソーネの願いを叶えるため。

想いを寄せられ、想いを叶える、それがナポレオンをいう英霊の在り方。

ならば、共に戦う者達にとっては、何だったのか？

彼は、将兵・戦友達へ最高の夢を見せてくれる存在だった。

願いに応え、期待に応える。

そしてどこまでもどこまでも昇っていく。

彼が叶えてくれる夢を、可能性を、もつともつと見てみたい。

自分のこの夢を共に叶えてくれないかと願いたいから。

どこまでもどこまでも、戦友たちは集まった。

だから、見る。

その夢を、見る。



その宝具は人の想いを叶えるものであり、

人の可能性を見せるものであり——共に戦う仲間にも最高の夢を見せるもの。

「あ……………」

それは七色の虹の可能性がほんのわずかに見せた、彼女の可能性の一つ。

人理の守護者としてある自分のマスターと、

誰よりも近い場所に立ち、盾を携える自分の姿。

しかし、これはほんの一瞬のこと。

ナポレオンが見せてくれる可能性は、無限に輝いているのだから。

「Ich will es nie verlieren sehen  
私は、その輝きが失うさまを視ないっつ!!」

彼女が遷延する、彼が見せてくれる彼女の夢の一欠片が消えてしまうのを留める。

それは模範解答から途中の計算式を逆算するようなもの、

いや、未来の英霊化した自分の盾から、己が進むべき未来を決めるようなことか。

「……………そう、だったんだ……………」

これは、

彼女が進むかもしれない、未来の可能性の一つ。

「悠久の時の中、永遠に輝き続ける夢想の城、理想の白亜。

集まり語らい、戦い歌い、笑って泣いて、されどここにあるは永久不変の我らの家。

誓いをここに、

我らカルデア、この光輝なり不壊の壁となり人々を守る城となる。

絆をここに、

我らカルデア、数多の英霊と共に遍く果てまで人々を護る城となろう！

決意をここに！

我らカルデア、この誓いと絆を以って人理を守護する城とならん!!」

スルトの炎剣と、  
その盾が——！

『太陽を超えて輝け、炎の剣』  
ツツツツツツ  
!!!!!!!

「人理よ、久遠の城と永遠へいけ」  
ツツ!!」

ぶつかり合う！ 熱と城壁、殺意と決意！  
霊基外骨骼を分離・射出させ、打ち立てるのは理想の城、人理の城。

熱が、熱が、熱が、炎が!!

傷はある、武蔵に付けられた傷、ルーン強化刀による無数の傷、右腕の切断及び作成



喚ぶ！

「ぐぐウウウウウー……！！！！」

その盾が築き上げる城は理想の城、想いの城。

人理と共にある守護者たる英霊達の憩いの場、再会の地。

カルデアという存在こそが、彼女が辿り着いた、絶対不倒の守り手としての答え！

「負けない——、負けません……！！」

私は——ぐ、ぐ、ぐ、ぐ——でも、でもっ！！！！

炎が城を焼く。

ありとあらゆるところを。

この炎とは、世界を、そして生命を、終わらせる炎。

何故だ!? 何故!? オマエは!? これほどまでに終わらない!?

スルトは知るよりもないが、マシユの掲げる盾こそは人理滅却した炎すらも耐え抜いた。

倒れない、もし倒れても何度でも立ち上がればいい。

諦めない、私が諦めてしまったら全てが終わってしまうのだから。

終わらない、そう、終わらない!

この決意は、どんな宝具でも燃やすことはできない!

人理は滅びない!

その守り手達が何度でも何度でも修復する。

その気高き在り方こそが、最強の盾。

そして、滅んではならない。

いつかこの星や太陽が消滅する日が来ようとも、

地球という青い惑星に誕生した人という生物種が、

出会い、笑い、助け、教え、導き、愛し、産み、育て、

憎み、罵り、蔑み、戦い、裏切り、殺し——それでも、

手を取り合って、懸命に生きたことは、永遠に伝えなければいけないのだから！

「だって、そうじゃないですか——！！

です、よね、先輩——っ!?!?」

護り手とは、常に誰かを庇いながら戦う。

人理、汎人類史、少女が背負うには重すぎるのかもしれない。

だが今は、

己の主人と友達が、自分の後ろにいる。

スルトはオフエリアを殺さないだろうから、という理屈は彼女には通じない。

「私の、大好きな、先輩も………っ！」

私の、大切な、オフェリアさん友達も………っっ!!

傷つけ、させません——、何一つ、何一つッッ！ だって、だって私は!!  
この炎を全て防いでみせますと!! この盾に誓ったんですっっ!!」

だから、守る。

だから、護る。

大切な二人を、必ずこの盾で守り抜く！

「——うあああああああああああッッッッ!!」

城は、崩れない。

炎を浴び、巻き起こった暴炎嵐に何度も襲われようとも、崩れない！

「負けちゃ、いけないんです——!!

今を終わらせることしか考えてないあなたに、

明日をつかもうとする私たちは、絶対負けちゃいけないんですッッ!!」



だから負けない。  
だから倒れない。

だから――！

「ダメ、足りない!!」

スルトの宝具を、ここまで耐え切ってるのは奇跡に近いけど、でも、足りない!!」

「ぐぐぐううううううウウウウウウウウウウツツツ!!!」

彼女が選んだのは、カルデアという城。

だが、カルデアとは、人理を守るだけの組織ではない。

「オルテナウス霊基外骨格、兵装展開！ 構築せよ!!」

彼女から弾け飛んだ外骨格が、変異変形、集結。

右肩から右腕全部にかけて装着され組み上げられたそれは、一つの形をとる。

「劍よ、ハッハッ！」

其は、岩に刺さりし選定の劍、

最も気高き王に抜かれ、我らが円卓に集いし始まりの劍。

劍よ、ここに！

其は、泉の乙女より授かりし黄金の劍、

最も勇壮なる王の手により、我らに約束された勝利を賜る願いの光。

劍よ、ここに！

其は、人理と共にある守護の劍！

最も久遠なる人々のため、我らの敵へと振り下ろされる理想の刃!!」

そしてできたのは、一つの砲。

魔力が収縮する。

城を展開しながらも、その砲口の内へ、尋常ではない量と密度の魔力が集められていく！



この盾の英霊が持つ宝具は、一つではなく二つ！  
その二つの宝具が、スルトの炎界とぶつかり合う!!

「そうか！ あの砲撃はこの城と呼応している!!

城へ襲いかかる魔力を交換し、あの砲へ送り込んでるのね！  
盾で受け止めた力を、砲で飛ばす！

スルトの宝具は全方位、一ミリも隙がない。

だからこそ、最大量の魔力が生成され、砲撃となっている！  
でも、変換にも受け止めるのにも、限度はある！

それを超えられては——!!

だが、

相手は、スルト。



崩壊が留まる、留められる。

焼け落ち始めた城、炎の海へと消えかけた砲。

訪れるはずだった消滅という可能性が留められ、その未来が到来するのが留められる

！

「その未来、私が、永遠に来させない……………ツツツ!!」

まだ立ち続ける、人理の敵の攻撃で朽ち果てまいと。

まだ発射できる、人理の敵を滅ぼすための攻撃を。

その時、

ようやく初めて、

拮抗した。

神剣を手に持つ剣の英霊が、

その刃の中へ、己の内へ、奥へ奥へと埋没する。

この刃が断ち斬るべき、あらゆる非業、罪業、宿業、全ての悲哀の、その源へ、其処を斬るためにこそ、我が刀、我が術技、我が存在が、あるのだから。

▶ ▶ 「かつて求めた究極の一刀」  
 ■ ■  
 ▶ ▶ 今なお求める究極の一刀」  
 ■ ■  
 ◀ ◀

この身は見てきた。

ありとあらゆる時代の、あらゆる英霊達を、その剣を、見た。

▶ ▶ 「其は、肉を断ち骨を断ち命を絶つ鋼の刃にあらず」  
 ■ ■  
 ▶ ▶ 其は、魂を断ち魄を断ち命を絶つ戦の刃にあらず」  
 ■ ■  
 ◀ ◀

聖女を見た、そして、魔女を見た。

己を破滅へと追い込んだ人々を、守る彼女と殺す彼女。

彼女の勇気と、彼女の憎悪——。

その腰にある剣の重みを、忘れてはならない。

▶ ▶ 「我が業が求めるは怨恨の清算

▶ ■ 我らが業が求めるは遙か貴き理想

■ ■

◀ ▶

皇帝を見た。

我儘で自分勝手、美と芸術が何よりも大好き。

黄金のように明るく、マグマのように情熱的。

その帝政がどのようなものであれ、まさにその剣の如く、

星すらも知り得ないような、希望と共に笑う。

▶ ▶ 「縁を切り、定めを切り、業を切る

▶ ■ 争いを切り、戦いを切り、修羅を切る

■ ■

◀ ▶

航海士を見た。

仲間と、冒険と、宴と、強敵と、財宝。

重責に押し潰されそうな旅の中にあつて、



その船にいる時だけは、その重みを忘れることができた。  
あの強敵の見せた剣技、あの輝きこそが、剣士が目指すべき剣という可能性。

▶ ■ 「即ち。宿業からの解放なり」

▶ ■ ——— 即ち、戦乱からの解放なり」

▶ ■ ◀ ◀ 叛逆の騎士を見た、人々から恐れられし怪物達を見た。

その友情ははたから見たら不思議かもしれないけれど、とても暖かかった。

ただしその剣、赤雷を纏う太刀筋は、武の本質の一側面。

ただ強く、ただ勝利する、その在り方こそが、剛の大剣。

!? 何だ!! これは!!? 何が!? どうなっている!!?!

吸取されていく!!? 俺の炎! 俺の宝具! 俺の終焉!! 俺が吸われるだ!!?

塵芥! 何をしたア!!? ゴミムシ! 何をしたアア!!? 肉袋! 何をしたアアア



▶ ▶ 「千の刀、万の刀を象り、築きに築いた刀塚  
 ■ ■ 千の刀、万の刀を象り、築きに築いた屍山血河」  
 ■ ■ ▶ ▶

騎士達を見た、そして、その王を見た。

王の掲げた理想は、やっぱどこか歪で、賛成できないけど、

ただ王のため、王の理想のため、王が庇護する民のため、何よりもただ王のため。

王へと誓う絶対の忠誠、決して崩れることも揺らぐこともない剣、

彼らこそが、騎士と、呼ばれるに相応しい人達だった。

▶ ▶ 「此処に辿るはあらゆる収斂  
 ■ ■ 此処に辿るはあらゆる聚斂」  
 ■ ■ ▶ ▶

王を見た、その民を見た。

聡明で傲慢、傍若無人で理路整然、賢いのか暴君なのか。

どんな窮地にも、常にその思考と判断は正しく的確だった。

世界を手にした王の一番輝かしい財宝は、その民だった。

絶望にも下を向かない、明日のために今日を精一杯。

そんな人々の暮らしと笑顔を守るために、剣は、作られたはず。

▶ ▶ 「此処に示すはあらゆる宿願

■ ■ 此処に示すはあらゆる理想」

英雄達を見た。

人々の未来を掴むために、人々が明日を生きるために。

数多の時代から、この旅を助けてくれた、あらゆる英霊達が集まってくれた。

かつての怨敵と肩を並べて武器を揃え、己を殺した相手に肩を貸して助け合う、

みんながいたから勝つことができた、みんなと一緒にだったから乗り越えることができた。

その恩は、まだ、返しきれてない。

▶ ▶ 「此処に積もるはあらゆる非業

■ ■ 此処に積もるはあらゆる悲哀」

■ ■ ▶ ▶

あの人を、見た。



コ、カツ、ハ、キユ、プ、ア、ゴ……………!?  
 何だ、何が、起きている……………!?

炎剣だけでなく、オレも、オレすら炎も、すオレが、吸われ炎がてくい……………!?

—

「紀に曰く！

その剣技はな、炎という厄災に遭遇した神剣が、するりと抜け出て災い丸ごとぶつた斬ったって代物だ。

だからこそ、草薙！

平定された炎、跡形もなく消えた厄災が、ただ斬られた後の世界から分るだけ——

—その世界こそが、草薙！

テメエがどれだけモノ燃やしてえか知らねえが……………、日本舐めんな。

それ以上に！ 儂ら日ノ本の民は！ 炎のように全てを飲み込み破壊する戦を憎み

！

斬り払われた後の世界！ 即ち！ 火種が全てなくなつた平和がずっと続くように

と！ その神剣へ何千年も願いをかけ続けているんだよッ！

つまり、分るか？ —— テ・メ・エの、詰みだ、スルト」

終わるは神呪、始まるは神楽。

剣の担い手は、一人、内なる二つを重ねて神剣へと宿す。

残すは一つ、成すべきは一つ、その唯一つだけの神行こそ —— ツ!!

▶ ■ 「剣の鼓動、此処にあり —— !

▶ ■ 剣の心魂、此処にあり —— !

彼女という剣の辿り着いた答えこそ、そこを斬ることができる術技。彼という剣が追い求める刃こそ、そこを断ち斬ることができる刀剣。

人域を超えた二つの剣、それを己という剣にて一つとし!

あらゆる業業の天元を<sup>斬り捨てる</sup>終わらせる、ただ一刀の神威を成さん!!

▶ ■ 「くらえ、」 ■ ◀

神劍の切先が、天を差し、

▶ ■ 「これが、私達オレの、」 ■ ◀

無念無想の更なる先、空の彼方の果てなる上が剣を運ぶ。

▶ ■ 『都ツム牟ム刈カリ・村ムラ正マサ』、重ねて——つ！ ■ ◀

定めるはそこ、己が斬らねばならぬそこへ！ 悲しみを永遠とわに終わらせるために！！



▶ ■ 『都牟刈・草薙』だ——ツツ!!

三人の人神が鍛え極めた神武の一閃、

天元すらも突破し、森羅万象の因果業源たるその

を断と斬塵する。

まるで、世界の時が止まっているようだった。

それほどの速さの瞬斬。

ありとあらゆる斬るべきものを、既に斬り終わっていた。

真つ二つに両断されたスルトが、消えていく。

断末魔の眩きすら許さないその一撃は、身動き一つすることすらも拒絶させる。

光に消え去る氷焰の巨人王は、憤怒の表情を貼り付けたまま――、  
しかし、どこか満足げな顔をして、消えていった。

『……………終わったか。』

終わったか……………』

スカサハⅡスカデイの声が響く。

『スルトの撃破、よくやってくれた。

やつに殺された神々、散っていった我が娘達へ、良い報告ができる。礼を言う、カルデアのものよ。

見事な、私ですら見たこともない、見事な一撃であった。

……………ふむ、シャドウIIボーダーとの通信はもうしばし戻らぬか』

「……………報告、ですか？」

それはどういう？」

『オフエリア、我らの負けだ。

空想樹が、すでに斬り滅ぼされておる』

「えっ!？」

ど、どうやって!？」

「ここからなら距離も、」

『斬られている、そして、もう死滅している。』

つまりは、この世界も、消えゆくということ。

納得するしかあるまい、認めるしかあるまい。

あのような、法外すぎる、神ですら理解に苦しむ一刀を、見せつけられてはの。あらゆる災いを斬り捨てる一刀、いや、その元の元の、更なる元を、斬る、か？ 私ですら、その真価、理解できておらぬが、オフエリア、体に相違ないか？』

「体——？」

……………。

……………じよ、冗談でしょう……………？」

「まさ、か……………」

『言つたであろう、スルトの撃破、よくやってくれた、と。

さて、では私は失礼させてもらおう。

この世界が消え去る最後の時まで、しばしはあろう。

愛らしい我が子らと過すごすとしよう。

ワルキューレ達よ、お主達は自由だ。

これまでよく仕えてくれた、最後の時は各自好きにするが良い』

「……………」

『そうか、自由が分からぬか。』

ならば、子供らの元へ向かってくれぬか？

スルトやら巨人やらで、怖い思いをしておろう。

最後の時に、そのような恐怖を持たせないように頼むぞ』

「任務了解」「任務了解」「任務了解」

生き残った最後の戦乙女達が、空を駆けていく。

「そんじゃ、喧嘩の決着は、次回へ持ち越しか」

『うむ。』

すまぬが、そなたをかまってる時間がない。

次あらば、ふふ、茶の一つでも入れてやろう』

「——時間、か。」

ひよつとしなくても、なんだけど、な……………」

『オフエリア、最後に、こちらを向いてくれぬか？』

「え？——」

『ふむ、良い顔をしておる。

もはや何も心配することはない、そのまま、行くがよい。

では、壮健でな』

そして、彼女も去っていく。

「よお、やるじゃねえか、正義の味方」

▶ ■ 「刀、ありがとうございます」 ■ ◀

■ 「刀、壊しちゃってすいません」 ■

「ははっ、我ながら見事な壊れっぷりだ。

おめえに壊してもらえるなんざ、刀打ちとして最高の報酬だ。

次はよ、おめえさんだけの都牟刈を鍛えてやるよ」

■ 「またみんなで一緒に、」 ■

▶ ■ 「正義の味方、やりましょう」 ■ ◀

「言うねえ。

………つと、時間か」

『シーーーーー……………』 □ 『!!』

「ごめん、イリヤ、オレもう消える」

『あ——————!!』

「小言は全部まとめて後で聞くから。  
じゃあな」

『う——————!!』

シロウのバカ!! もう知らない!!!』

「……………え、消滅??」

「なんで、……………だ??」

「それは私達に聞かれましたも……………」

「細げえことは、置いとくか。

今度こそ、そんなじゃ、」



「ごめんなさい！ 最後に一つ、答えて、くれ、ますか？」

「——ん？」

「その人は、どう、なったのですか？」

「どんな、結末、を迎えたのですか？」

「どんな最後、だったのですか……………？」

「ああ、そいつか。」

「——星を掴んだ、」

「えつ、星？ ま、まさか……………星、を……………!!？」

「つて、噂をどつかで聞いたな。」

「案外そこらへんでやってるんじゃないか？ 正一義の味方」

「青年は、一人一人へ笑いかけ、光の中へ消えていった。」

そして、三人が残る。

「つて先輩——————!!??」  
 それは一体どういうことかですか——————!?!」

■ 「自分自身、」

▶ ■ 「何が何やらさっぱりで」 ■ ◀

「ダヴィンチより前に召喚された第一号、恐らくそれが貴方じゃないかしら？  
 思うに、」

「思うに？」

▶ ■ 「思うに？」 ■ ◀

「貴方、ヤマトタケルの子孫なのよ。」

召喚の触媒は、あなた自身の血とあの神剣、その両方でしょうね」

「？ でもあの剣は村正さんののでは？」

「なんていったかしら、源平合戦、だったわね。

それで草薙剣が沈んだんでしょう？ 壇ノ浦？

本物じゃなくて、レプリカが。

でも日本神道だと、レプリカにも真神を宿を入れるから本物と同等同質なレプリカ、かしら？

とにかく、龍神の元へ帰ったとか、星へ還元されたとか、諸説あるけど……………。

ひきあげたんじゃない？ 海か、どっかから」

「あ！ それなら、ヤマトタケルを召喚しても、神剣は、ある……………!?!」

「ええ。

一石二鳥ね。

ところが、事故があった。

きつと、召喚の余波で草薙剣が粉々に砕けたのね」

「ということは、先輩は、先輩のまま、ですが、

実は体内にヤマトタケルがきちんと召喚されていた、と？」

「貴方は、最大の成功例であると同時に最悪の失敗例なのよ。

草薙剣なんて、二本目を用意できるわけじゃないじゃない？

だから、記憶を消して元の生活へ戻した、監視付きでね。

カルデアはマスター候補を探すため、広く人材を募ったでしょう？

いるじゃない、どう調べても一般人のはずなのに、常時マークされてる凄い人間が一人」

「神剣がなければ何も無い、しかしあれば……………」

「原則ね。

スルトの炎とあなたの草薙が、相性が最高に良かったからというのもあるけど、

一発よ、一発。



「ええ、元の状態へ戻るだけだから、何も起こらないわ、きっと、多分、クスツ。  
聞きたいことがあるば、聞いたら？」

ヤマトタケルとしての知識や記憶、それに能力はこの状態じゃないとないわよ」

「ええええ!？」

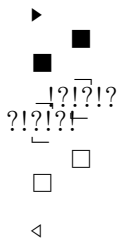
先輩に、聞きたいこと、先輩に、言いたいこと、先輩に、教えてもらいたいこと、  
そもそも今の先輩は先輩なのか、ヤマトタケル先輩なのか、先輩ヤマトタケルなのか、  
ヤマトタケル、ヤマトタケル、それとも先ヤマトタケル輩、ううううう!」

「あら、何か見えたわ。

ふうくん、そう。

『先輩、抱いてもらってもいいですか!?!』  
ですって」

!?!?!?!



「否定しないのね、意外」

「その、言い方は………!? まさか、オフエリアさん——!?」

「ええ、冗談。」

「ごめんなさい、貴女達って付き合ってるのかしら、と思つてね。  
期待させてしまったなら、謝っておくわね」

「オーーーーーフェーーーーリーーーーーアーーーーさーーーーん!!」

「フフ、さて、ご一緒していいかしら？」

「投降するわ」

「そうやって話題を逸らすんですか!!」

「でも悪いわね、私から話すことは何一つないと思うけど……………」  
それでも、受け入れてくれる？」

▶ ■ 「分かりました」

□ 「さつき見えた可能性については是非！」 □

□ ◀

「そんなごまかしに、私は——、ぐっ、ツツ  
!!??」

「マシユ!？」

「へ、平気です……………あたたたた。

何やらいつぱい無理しすぎていたのが、いたたた、全部いっぺんに来たみたいですよ……………」

「大丈夫？」

ほら、肩貸すから」



「ううう、ありがとうござい——って、オフエリアさ——ん?!?!!」

「近い、大きい。」

流石の私でもうるさいと言うわよ?」

「血が! 血が出てます! 魔眼から!!」

「ああ、これ?」

いつものことよ」

「それでも! 魔眼からそんな大量の血が出るのはまずいのでは!!!  
早くダヴィンチちゃんに見てもらわないと!」

「だから大丈夫だってば。」

流血なら、貴女が一番危ないでしょう?

見すぎて、留めすぎると、こうなるの。」

魔眼使いの宿命よ。

さ、まずは大地へ降りましょう」

「……………はい」

「ねえ、」

「はい？」

「……………。」

スルト、強かったわね」

「はい」

「……………。」

スルト、暑苦しかったわね」

「はい」

「……………」。

スルト、大きかったわね」

「はい」

「……………」。

私、ね、」

「はい?」

▷ □ (!?) あだだだだだだだだアアアアアアアア!? ) □ ◁

□ (反動だ! 反動!! 完全に元に戻ったから、) □

□ (反動が、いたいいたい! や、やば痛い!!) □

▷ □ (そりゃ一般人ではスルトは斬れませんですけど!?) □ ◁

「あなたが……………その、ね……………」

……………って、言ってくれて、……………」

「……………」

□ 人間としての限界を超える痛みなので、誰かに担いでもらう □

▷ □ 二人の時間を邪魔したくないので、死ぬ気で堪える!!!! □

◁

「……………私、すっごい嬉しかった……………」

「私が、何と、ですか？」

「だ、だからね、……………その、言ってくれたでしょ？」

私を、大切、な、と、と、とと……………とも、だ、

ち、  
」

役目を終えたことを悟った虹が、消えていく。

——  
日曜日。嫌いだ。だった少女は、もういない。

(エピソードへ)

## エピローグ その者達は、

「——こうして、その旅人達は帰っていった。」

終わりを告げる巨人を倒し、本来ならば、死滅するはずのこの世界をも救ったのだ。上書きされることも、漂白されることも、剪定されることも、無くなることもない。全く新しい異なる世界へと、我らの世界を斬り飛ばし、この世界が無くなるあらゆる未来を斬り捨てた」

「おー!」「おー!」「おー!」「おー!」「おー!」「おー!」「おー!」「おー!」

「すげー!」「すげー!」「すげー!」「すげー!」「すげー!」「すげー!」「すげー!」

「おひげだ! おひげさんがやったんだよ!」「おひげはないよ、だっておひげだもの!」「さむらい? お姉ちゃんじゃないの! ブシドーってやつで!」

「ブシドー」「ブシドー」「ブシドー」「ブシドー」「ブシドー」「ブシドー」

「くわっ!」「くわっ!」「くわっ!」「くわっ!」「くわっ!」「くわっ!」「くわっ!」

「くわわ!」「くわっ!」「くわっ!」「くわっ!」「くわっ!」「くわっ!」「くわっ!」

「すごい………！　すごい、すごい、すごい！　マシユさま、すごい！！

そんなおつきくて怖いめらめら大っきいの、マシユさまたちが倒してくれたんだ！

すごい！　すごい！　すごいよ！

でも、

ちやんと、お礼、いいたかったな………」

「その人たち、どうしたの？」　「いまどうしてるの？」

「その者達か？」

ふふ、無論、救いに行った。

我らの世界には、もう、脅威はない。

しかし、苦しい運命にある世界は、他にもまだまだある。

だから、旅立ったのだ。

その世界の人々を、我らと同じように助けるため」





「あー！ー！ わたし知ってるもん！ それはね、フオウちゃんっていうのよ!!」

「あー、見た見た見た!」「きゆうきゆう!」「きゆうきゆう!」「ふおーう!」「ふおー」

「うー、ちがうのに〜」

「あー！ そうだ、そうじゃない!」

言える、ちゃんとマシユさまへ、お礼!

マシユさまたちがこの世界にこれたなら、私だってマシユさまたちの世界へ行けるはず!

そうして、みなさんに、一人一人、ちゃんと！ お礼を言うの!

決めた!

どうすれば、できるのかは、わからないけど………うん、それでも!!」

「おはなしー」「ききたいー」「おひげのー」「かっこいいおひげのー」「ふおー〜」

「ほーら、あまり無理言うんじゃないよ」「女神様は他にも行かなきゃいけないところがあるんだぞ」

「よいよい、よいよい。」

時間はたつぷりある。

さて、次は、何から話そうか……………」

「今のお話、なんていうの？」

「名か。」

そう、これなるは、

——カルデアの物語、である」

(  
F  
i  
n  
)